

昭和55年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

鎧 塚 古 墳

1 9 8 1

序 文

熊谷市上中条地区は、大穀倉地帯で、みわたす限りの水田が続き、ひろびろとした静かな農村地帯です。このような地域も、農業近代化の波は、緩むことなくおしよせ、昭和50年、行田市と接する星宮地区、南河原と接する上中条地区を対象に、荒川左岸地区農村基盤整備総合パイロット事業が計画され、昭和51年～56年にかけて、各地区ごとに着工されています。

当地区は、熊谷市の北東部に位置し、古代条里遺構、古墳群が存在することが知られています。これらの遺跡は、貴重な文化遺産として後世に残すことに努力してきました。しかし、工事の性格上やむをえない個所については、記録としてこれを残すことにせざるを得ません。

熊谷市教育委員会では、昭和52年～56年までの5ヵ年計画で、この事業に伴った発掘調査を、国・県の補助事業として実施しています。昭和54年度調査は、53年度に発掘調査した中島遺跡の西隣、鎧塚古墳をはじめとして、すでに削平されてしまっていた中条古墳群の調査を実施しました。

本書は、昭和54年度発掘調査・鎧塚古墳の報告書です。

本書が、学術研究等に資するならば幸に思います。

最後になりましたが、県文化財保護課、深谷土地改良事務所、中条星宮土地改良事務所、地元中条大塚中島地区住民の方々から、御指導御協力いただきましたことに深く、感謝の意を表します。

昭和56年 3 月

熊谷市教育委員会
教育長 森田芳一

例 言

1. 本書は、熊谷市大字上中条字鎧塚 333番地に所在する鎧塚古墳の発掘調査報告書である。

2. 調査は、国・県の補助事業として、昭和54年7月23日から昭和54年11月30日まで実施した。

3. 発掘調査は、寺社下博（熊谷市教育委員会社会教育課）が担当した。

4. 遺物実測図中の中心線について、実線は遺物を全く回転させていない事を、1点鎖線は180°回転させている事を、点線は任意な角度で回転させている事を示す。

5. 遺物番号は、図版番号、写真図版番号と一致する。

6. 本書の執筆編集は寺社下が行った。

7. 本書を作成するにあたり、次の方々に御指導、御協力をいただいた。相京建史（群馬県埋蔵文化財事業団）・萩野繁春（名古屋大学大学院）・岡村和子（千葉市上ノ台遺跡調査員）・小沢一弘（名古屋大学考古学研究室）・酒井清治・高橋好信・水村孝行（埼玉県埋蔵文化財事業団）・外尾常人（埼玉県上里町教育委員会）・平野敏和（佐賀県教育委員会）・今津節夫（青山大学大学院）

目 次

序文	I
例言	II
目次	III
図版目次	III
写真図版目次	IV
I 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 鎧塚古墳の調査	4
1 墳丘	4
2 周溝	7
3 埴輪列	7
4 土層	13
5 墓前祭祀址	16
6 出土遺物	19
a 第1次墓前祭祀址出土遺物	19
b 第2次墓前祭祀址出土遺物	22
c 埴輪	25
IV 考察	69
1. 出土遺物	69
2. 墓前祭祀	80
3. 火山灰について	81
4. 鎧塚古墳の性格と問題点	82

図版目次

Fig

1. 中条遺跡群及び周辺の遺跡	8. 埴輪出土状況図5、1—4、2—4区
2. 鎧塚古墳位置図	9. 土層図
3. トレンチ配置及び鎧塚古墳墳丘実測図	10-1第1次墓前祭祀址遺物出土状況図
4. 埴輪出土状況図1、1—6、2—6区	-2第1次墓前祭祀址遺物配置図
5. 埴輪出土状況図2、2—3、2—5区	11-1第2次墓前祭祀址遺物出土状況図
6. 埴輪出土状況図3、1—3、2—3区	-2第2次墓前祭祀址遺物配置図
7. 埴輪出土状況図4、1—3、1—4区	12. 第1次墓前祭祀址出土遺物実測図

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 13. 第2次墓前祭祀址出土遺物実測図 | 27. 出土埴輪実測図 13、1—3区 |
| 14. 第2次墓前祭祀址出土遺物実測図 | 28. 出土埴輪実測図 14、1—4区 |
| 15. 出土埴輪実測図 1、2—6区 | 29. 出土埴輪実測図 15、1—4区 |
| 16. 出土埴輪実測図 2、2—6区 | 30. 出土埴輪実測図 16、1—4区 |
| 17. 出土埴輪実測図 3、1—6・2—6区 | 31. 出土埴輪実測図 17、1—4区 |
| 18. 出土埴輪実測図 4、1—6区 | 32. 出土埴輪実測図 18、1—4・2—4区 |
| 19. 出土埴輪実測図 5、2—5区 | 33. 出土埴輪実測図 19、2—4区 |
| 20. 出土埴輪実測図 6、2—5区 | 34. 出土埴輪実測図 20、 |
| 21. 出土埴輪実測図 7、2—3区 | 35. 出土埴輪実測図 21、及び形象埴輪、須恵器実測図 |
| 22. 出土埴輪実測図 8、2—3区 | 36. 二段凸帯埴輪基底部幅と第一凸帯までの高さの比率 |
| 23. 出土埴輪実測図 9、2—3区 | 37. 出土埴輪底部拓本 |
| 24. 出土埴輪実測図 10、1—3区 | |
| 25. 出土埴輪実測図 11、1—3区 | |
| 26. 出土埴輪実測図 12、1—3区 | |

写真図版目次

PL

- | | |
|------------------------|---|
| 1. 1、航空写真 | 9. 1、第2次墓前祭祀址遺物出土状況南より |
| 2、発掘前全景南より | 2、" 西より |
| 2. 1、古墳全景北より | 10. 墓前祭祀址出土遺物 |
| 2、古墳全景東より | 11. 2段凸帯各タイプ |
| 3. 1、前方部埴輪出土状況西より | 12. 3段凸帯A、B ₁ 、B ₂ 各タイプ |
| 2、くびれ部埴輪出土状況(2-4区)北より | 13. 3段凸帯C ₁ 、D、E、F各タイプ |
| 4. 1、後円部埴輪列(2—6区)東より | 14. 朝顔形円筒埴輪各タイプ |
| 2、後円部埴輪列(2—6区)南より | 15. 形象埴輪(1) |
| 5. 1、後円部埴輪列(2—3区)西より | 16. 形象埴輪(2) |
| 2、後円部埴輪列(2—3区)東より | 17. 透孔形態 |
| 6. 1、朝顔形埴輪列出土状況(No.91) | 18. 製作技法(透孔穿孔法、凸帯付着法) |
| 2、人物埴輪出土状況(2—6区) | 19. 埴輪の外面にみられる特徴 |
| 7. 1、周溝土層 | 20. 出土器台の文様体 |
| 2、墳丘裾部埴輪設置状況(2—5区) | |
| 8. 1、第一次墓前祭祀址遺物出土状況 | |
| 2、" 北より | |
| 3、第二次 " 北より | |

I 調査の経過

昭和54年7月14日付深地第685号において、深谷土地改良事務所より、昭和54年度荒川左岸地区総合パイロット事業区域内の埋蔵文化財保護について協議書が提された。これに対し、昭和54年7月28日付教文第429号において、埼玉県教育委員会より発掘調査を実施する旨回答がなされた。

これを受けて熊谷市教育委員会では、調査を実施することになったが、本事業に伴う発掘調査は5ヵ年計画で実施されており、本年はその3年目にあたる。調査は、国庫・県費補助金・農政側負担金および市費をもって実施した。

発掘調査は、昭和54年7月23日に開始された。小排水路をトレンチとして土層確認をすると共に、大排水路、道路のパイプ埋設部および、面工事によって破壊される部分に所在する遺跡を対象に調査を実施した。その結果、鎧塚古墳は全面調査対象となったが、他の古墳、集落跡は、埋没位置が深いか、もしくは、遺跡地図にドットされている地点が異っていた為か、遺跡が確認されず、よって、破壊を受けることがなく調査対象からはずれた。

鎧塚古墳及び各小排水トレンチの調査は、湧水と、湧水によって軟弱化した泥土で、足がひざまで沈んでしまったり、滑ったりして容易なものではなかった。その為に調査期間も長いものとなってしまった。さらに遺物の出土量が多く、これに拍車をかけたことになった。

調査は、円墳とされていた鎧塚古墳が、帆立貝式前方後円墳であると確認されたこと、後円部裾円筒埴輪列の内側に2ヵ所の墓前祭祀址が検出されたこと、周溝底面に棒名ニッ岳火山灰（FA）が発見されたこと等多くの成果を上げ、昭和54年11月30日終了した。

II 遺跡の立地と環境

鎧塚古墳は熊谷市大字上中条字鎧塚333番地に所在する。熊谷市上中条一帯は、利根川の南方約3km、荒川の北方約4.5kmのところであり、荒川の沖積扇状地の北端に位置している。標高は約24mで、大部分が水田であり、集落の存在するところは、荒川、利根川の濫流によって形成された自然堤防である。

中条古墳群は鎧塚—Aの他、女塚—B、丸塚—C、権現山—D、雅子塚—E、行人塚—F、鹿那祀東—G、（武人、馬形埴輪が出土したといわれる）、同西—H、雷電塚—I、屯倉塚—丁、鍋塚—K、大塚古墳—O、その他小円墳によって構成されている（註1）。また、その周辺にも多くの古墳群が知られている。熊谷市肥塚には11基の円墳群（内前、方後円墳1）があり、肥塚古墳群とよばれる Fig.1—1（註2）円墳の規模は20m前後である。胴張りの横穴式石室をもつ例が知られている。この石室に利用されている石は利根

川系の安山岩の切石であるという。また、一基の古墳跡からは凝灰質の石棺が発見されている。南河原犬塚、および行田市酒巻から斉条にかけては、とやま古墳を含む、酒巻、斉条古墳群が所在する—2（註3）。とやま古墳は全長69mの前方後円墳であり、三本凸帯の大型円筒埴輪、鉄鈴の出土が知られている。酒巻1号墳は、全長49mの前方後円墳で、三本凸帯で第1段の極端に長くなった形態の円筒埴輪が出土している。また、とやま古墳出土埴輪はB種横刷毛を有し、この地域での埴輪の初現的な姿を示すのに対し、酒巻1号墳出土埴輪は終末期的な様相を示している。

利根川右岸をさらに進むと、行田市須加、新郷に10数基の円墳からなる新郷古墳群が所在する—3（註4）。そのうち大稲荷1号墳は直径24mの円墳であり、古式の須恵器甕、円筒埴輪を出土している。行田市内を武蔵水路に沿って南下すると、全長110mの前方後円、真観寺古墳を含む小見古墳群—4（註5）、八幡山古墳、地蔵塚古墳を含む若小玉古墳群—5（註6）などが所在する。さらに南下すると、稲荷山、丸墓山、將軍山、愛宕山、二子山、瓦塚、鉄砲山、浅間山、奥の山、中の山古墳等によって構成されている埼玉古墳群が所在する—6（註7）。

各古墳群の所在地をみると、熊谷市肥塚—同上中条—南河原村犬塚・行田市酒巻・斉条—同須加・新郷—同小見—同若小玉—同埼玉となり、ほぼ半円形を描く。各古墳群の形成された時期、規模等の差を考慮してもこの形は崩れない。この古墳群に囲まれた地域にはほとんど古墳は知られていない、（このことについては、当地域の特殊な地理的要件を考慮しなくてはならず結論的なものではない。）かわりに、この地域は、扇状地末端であり、水を得やすく、古代から生産活動—水田耕作—の適地であり、時期的に先行する、もしくは同時期の—皿尾遺跡—7（註8）、池守遺跡—8（註9）、池上遺跡—9（註10）、東沢遺跡—10（註11）、中島遺跡—11（註12）等の集落、生産遺跡が知られている。生活領域の問題を提起しているようである。

註1 熊谷市史編纂委員会「熊谷市史」前編 昭和39年

註2 註1に同じ

註3 柳田敏司他「とやま古墳」埼玉考古学会 昭和42年

栗原文蔵「行田市酒巻古墳群について」埼玉県地域研究会発表要旨 昭和44年

栗原文蔵他「斉条第5号墳発掘調査報告—水田下にある特異な古墳—」行田市教育委員会 昭和39年

註4 栗原文蔵他「行田市須加—大稲荷古墳群について—」埼玉考古12号 埼玉考古学会 昭和49年

註5 大野延太郎「武蔵北足立郡小見ノ古墳」東京人類学会雑誌14巻 156号 明治32年

註6 小川良祐他「八幡山古墳石室復原報告書」埼玉県教育委員会 昭和55年

柴田常恵「八幡山古墳」埼玉史談第6巻5号 昭和10年

栗原文蔵「古墳壁画の新資料—埼玉県行田市地蔵塚古墳—」上代文化33号 国学院大学考古学会 昭和38年

註7 齊藤忠・柳田敏司他「埼玉稲荷山古墳」埼玉県教育委員会 昭和55年 その他

註8 塩野博「行田市星宮他皿尾遺跡の土器」埼玉考古4号 昭和44年

註9 齊藤国夫「池守遺跡発掘調査概報」行田市文化財調査報告書7、8集 行田市教育委員会 昭和54年

註10 小川良祐・金子真土「池守・池上遺跡発掘調査の概要」資料館報10 埼玉県立さいたま資料館 昭和55年

註11 並木隆他「中条条里遺跡調査報告書Ⅰ」昭和52年度熊谷市埋蔵文化財調査報告 熊谷市教育委員会 昭和54年

註12 寺社下博「中条遺跡群・中島遺跡」昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会 昭和55年

III 鎧塚古墳の調査

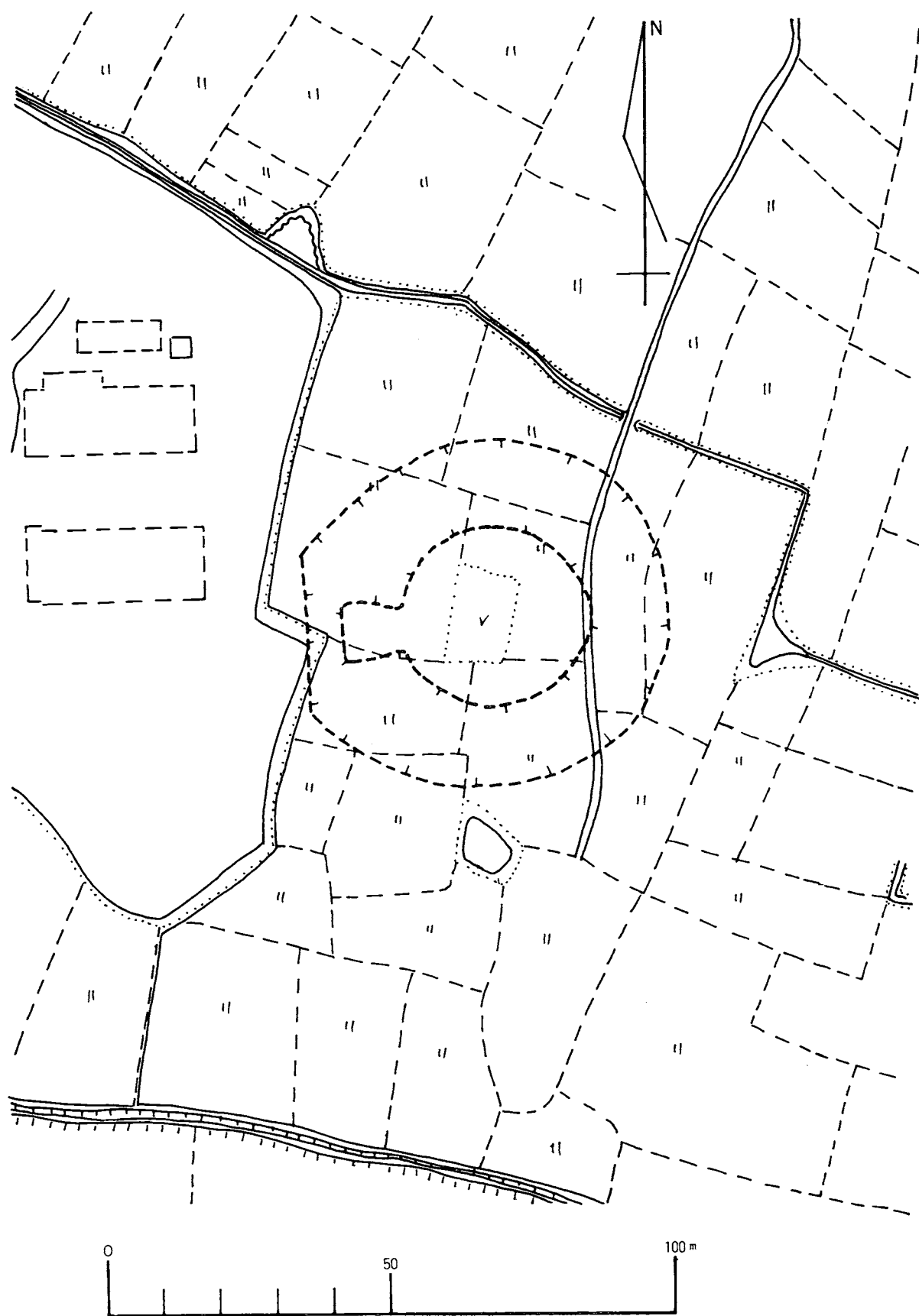
鎧塚古墳は昭和10年代後半に、周辺の道路建設用土として墳土の大半が取り除かれてしまっている。すでにそれ以前（おそらく天明以前）に周溝、及び墳丘裾部の周溝への角度変換線上20cmのところまで破壊されており、破碎された埴輪片も散逸してしまっている。終戦後一部に畑の為の盛土がおこなわれ、あたかも墳丘の一部が切り残された格好で残存している感を呈していた。

調査はこの畑地の一地点を基点として南北（第1トレンチ）東西（第2トレンチ）2本のトレンチを設け、古墳の存在の有無から確認した。その結果、第1トレンチの南北、第2トレンチの東部分で埴輪片を検出し、古墳であると判明した。しかし、第2トレンチ西側で変化がみられず、当初の円墳とする見方から、前方後円墳ではなかろうかとの見方が強くなってきた。そして第2トレンチを西へ延長した結果、第1トレンチでみられた径より12m西に至って埴輪の出土がみられ、この見方を裏づけることとなった。その後北東（第3トレンチ）北西（第4トレンチ）東南（第5トレンチ）南西（第6トレンチ）を、各45°の方位に設け古墳の範囲を確定することにした。この際第3トレンチで第1次墓前祭祀址、第5トレンチで第2次墓前祭祀址の土器群を検出した。範囲を確定した後、トレンチの間を—第1トレンチと第3トレンチの間を1—3区、第2トレンチと第6トレンチの間を2—6区………というように区画し、墳丘の状況および埴輪の検出を進めた。これと並行して周溝の外柵を求めて各トレンチを各方向に延長した。後円部側では規則的にみられた周溝外柵は、前方部側ではかなり異っていた。その為、第2トレンチで確認された外柵と、第4、第6各トレンチで確認された外柵の中間に各々2—4外区、2—6外区を設けて周溝外柵を確認していった。

1. 墳丘

調査の結果前方部が短く、後円部が大きい帆立貝式の前方向後円の形態を示す。主軸長43.8m、後円部径31.8m、前方部長12m、前方部端残存幅10.8（前方部東南コーナーが破壊されている。）m—推定12.5m、くびれ部幅7mを計る。主軸はN—90°—Wを示す。

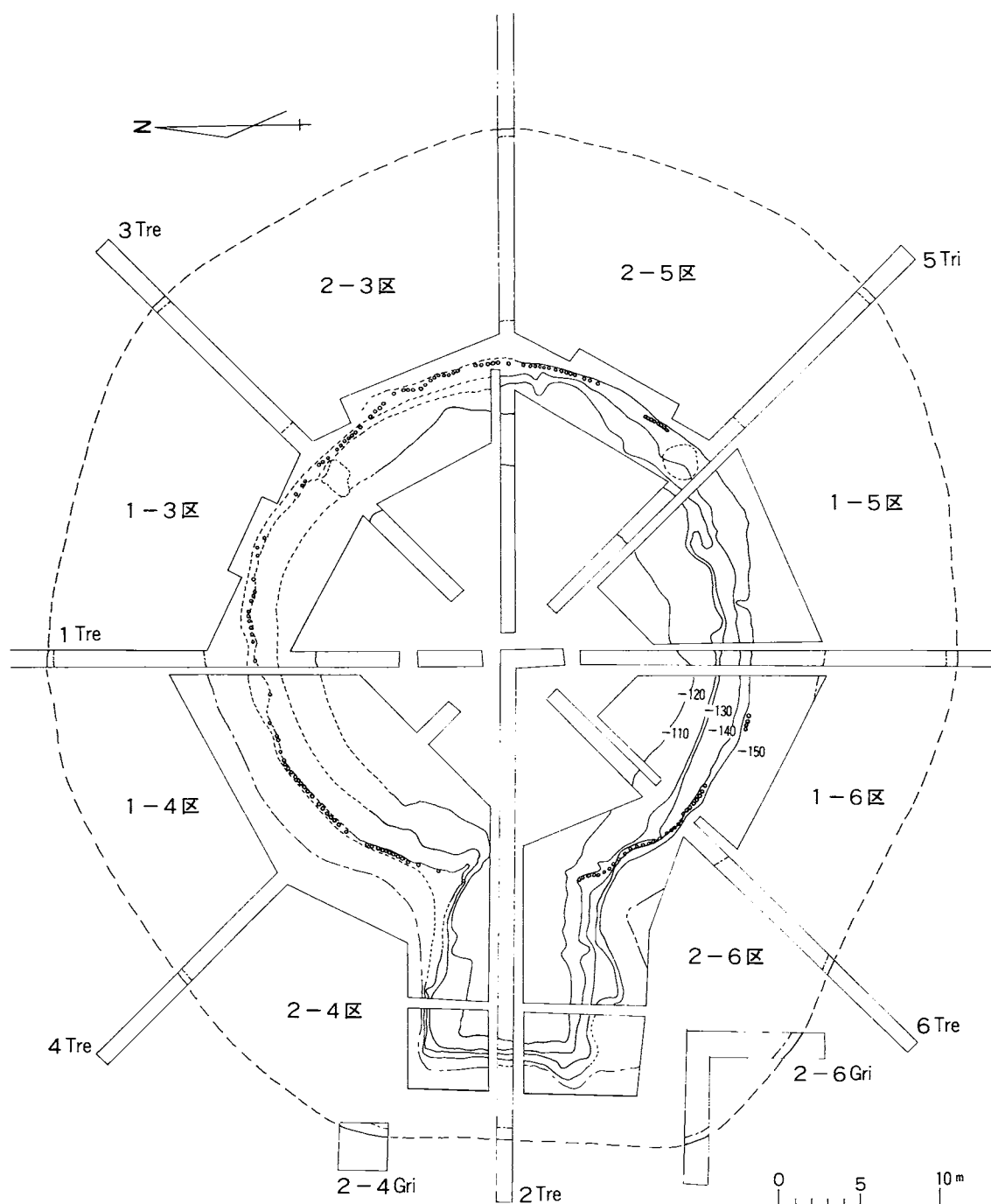
墳丘の高さ及び主体部については現在では直接知り得ることはできないが、墳丘の削平工事に携わった老人の話によると、「東側が丸くて高く（3人の話の平均は4mになる）、西側は雑草地で良くわからない。（1人の話によると腰ぐらいまであったという）東側の頂上の下から10cm前後の河原石がたくさん出た。」という。前方部の高さについて戦前から当地に居住している婦人の話によるとやはり1m前後であったという。これらの話を信用し、調査の結果を合わせると、鎧塚古墳は全長43.8m、後円部径31.8m、同高（4m）前方部長12m、同幅（12.5m）同高（1m）くびれ部幅7mを計る。後円部が非常に高く、前



第2図 鎧塚古墳位置図

方部の低い帆立貝式の前円墳であることが知れる。-()内は推定値-また、主体部は礫層を有していた可能性がある。

第3図は墳丘裾部の状況を10cm間隔の等高線で示したものであるが、後円部北半および前方部の北側一部は湧水により、作業員が一度足を踏み入れた地点の土層が攪乱してしまった為実測不能であった。この地域に図示してある点線による等高線は、出土遺物の土層確認の為残した土柱と各トレンチの土層観察用畦から割り出して復元したものである。



第3図 トレンチ配置及び鎧塚古墳墳丘実測図

等高線でみると、前方部の傾斜は後円部のそれに比して急である。後円部の傾斜は、埴輪を配置している地点で角度が変換し、墳丘裾部より角度をつけて周溝に至る。

1－5区の全域は、かなり以前に攪乱された形跡がある。

2. 周溝

周溝は全周する。後円部側は墳丘の円に沿って、幅12.5～14mで周り、くびれ部から前方部先 4.5mの地点までそのまま流れて、前方部前面に沿って直線を描く。全体として直線部分の短い、崩れた楕形を呈する。

規模は、主軸長61.2m、後円部最大幅55.1m、前方部幅（直線部分幅）19.0mを計る。溝幅は、後円部の最狭部で12.5m、最広部で14.2m、前方部前面では狭く、4.8mを計る。

周溝の堀り方は、墳丘側では比較的緩やかであり、外柵は急である。溝底は緩やかなカーブを描く個所もみられるがほぼ平坦である。

3. 埴輪列

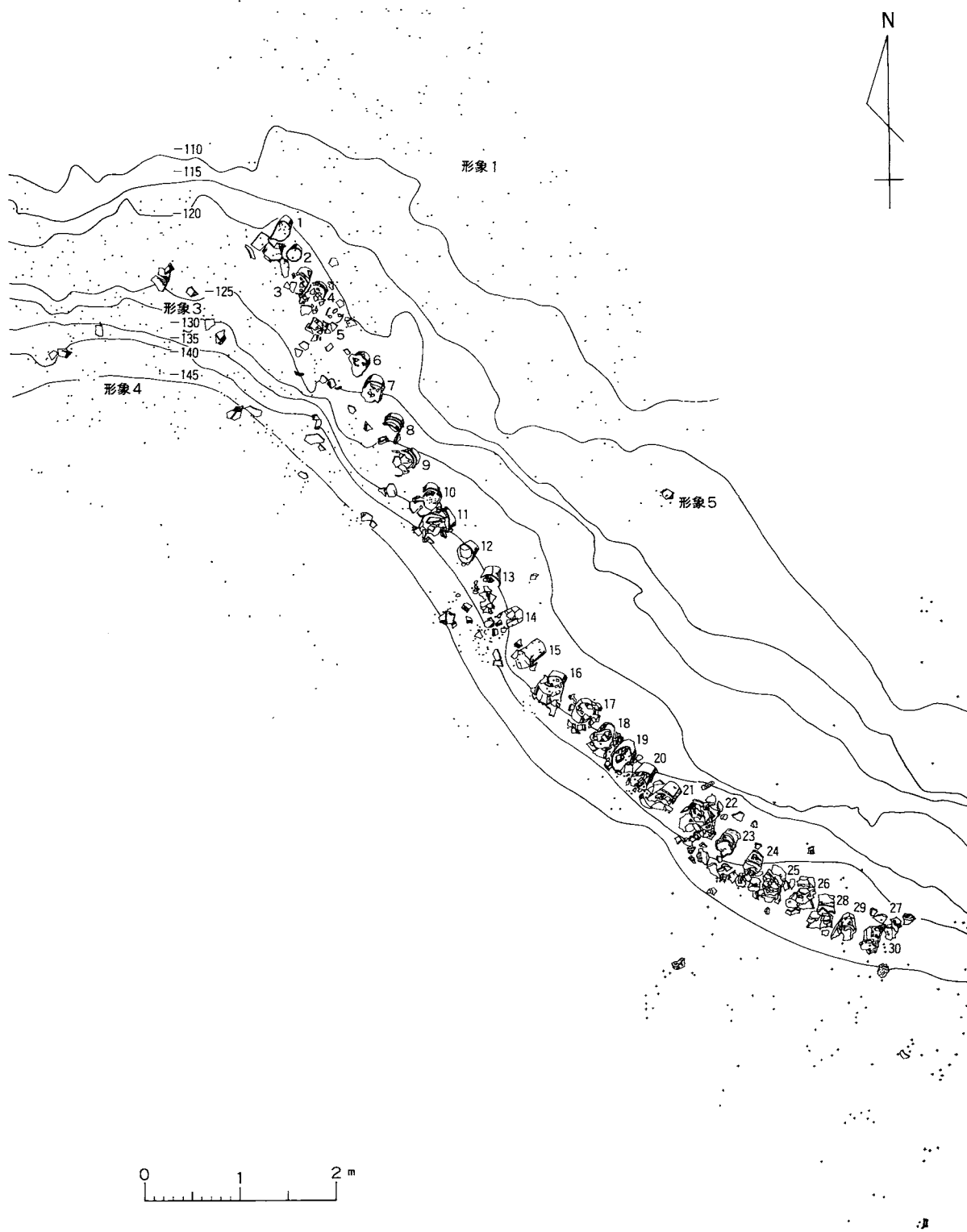
後円部埴端の傾斜変換線上には、南東部を除いて埴輪列が圍繞する。その並び方は、かなり密であり2mあたり7本の割り合いで、それぞれの間隔は20cm前後である。大部分が円筒埴輪であるが10～15本間隔をもって朝顔形円筒埴輪も見られる。

前方部では、配置された埴輪列は確認されていないが、周溝内に多量の埴輪片が発見されており、後円部より一段高い位置に配置されていたものと考えられる。また、後円南東部も周溝内に多量の埴輪片が存在し、やはり埴輪列が存在したものと考えられる。埴端部に高台付須恵杯が出土していることから、この時代に破壊があったものとみなされる。

くびれ部の南側埴輪列の内側に、人物埴輪がわずかであるが、出土している。また、後円北部埴輪列の内側からも一点出土している。

埴輪の配置のしかたは、後円部北半と南半で異なる。後円部南半、2－6区、1－6区では同一形態の埴輪が数個ずつ配置されている。当区では、3段凸帯を有する埴輪が多く朝顔形埴輪が、10本おきに配置されている。当区の並び方は、（Ⅲ－6－C埴輪で区別されている名称を用いる）くびれ部から3－B₂、2－D×2、O、3－B₂、3－B₁×3、3－C₁×5、朝顔、3－D、3－C₂×4、2－A、3－C₁、2－A、3－B₁、朝顔×2と続く。

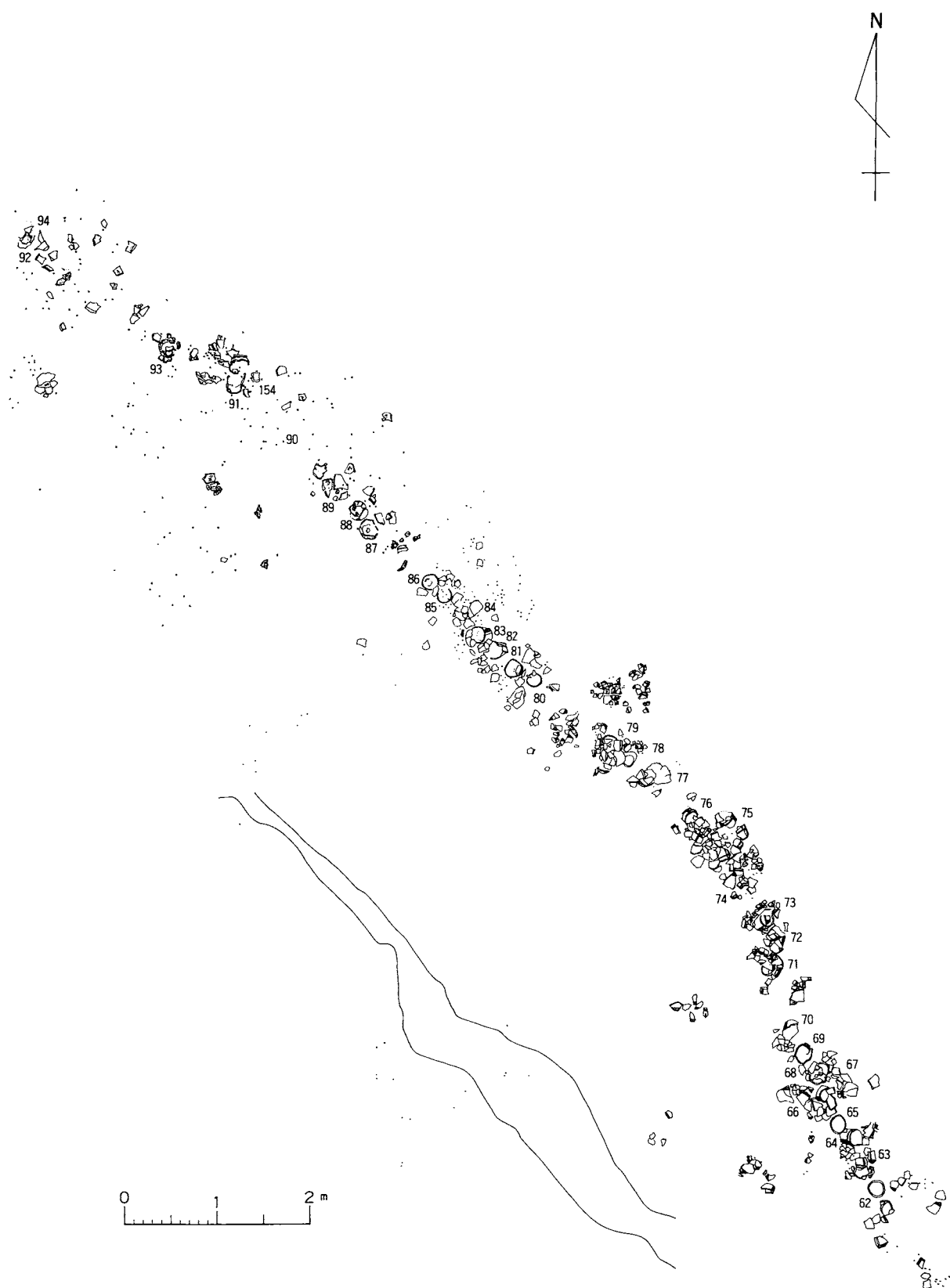
後円東部2－5区では、2段凸帯Dタイプが大多数である。南から3－F、2－D、2－C、2－D×5、朝顔、3－B₁、2－D×2、2－B、2－D×3、3－C₁、2－B、2－C、朝顔と続く。このように、後円部南半では、同一形態が数個ずつ連続し特にくびれ部付近では3段凸帯のうちでも特色のある3－Cタイプが大多数（最もくびれ部に2－Dタイプが配置されるが）であり、東側（第2次墓前祭祀北側）では、2段凸帯を有する埴輪のうちで最も小型である2－Dタイプが集中するという特色を示す。



第 4 図 埴輪出土状況図 1 1-6 区 2-6 区



第 5 図 埴輪出土状況図 2 2-3区 2-5区



第 6 図 埴輪出土状況図 3 1-3区 2-3区



第 7 図 埴輪出土状況図 4 1-3 区 1-4 区



第 8 図 埴輪出土状況図 5 1-4 区 2-4 区

後円部北半は、各タイプの埴輪が交互に配置されている。

後円北部（第1次墓前祭祀北西部1－3区）では埴輪の間隔がまばらで細片が多く、2段凸帯は小型のCタイプのみであり、数はわずかである。後円部北半の東側2－3区と西側1－4区、2－4区では、2段凸帯のうちでも大型のA、B類が多く3段凸帯の各種と交互に配置されている。西側では、北側と同様朝顔形埴輪が定間隔に配置されているが、東側では全く見られない。

埴輪の樹立のしかたについては、土層断面で確認したところ、基部を若干うめていた可能性は認められたが、溝に設置するなど特別な施設は具有していないものと判断された。又、うめていたことについても、部分的な事象である可能性の方が高く定かでない。

以上の点から埴輪の圍繞状態については、①後円部では、墳端の傾斜変換線上に、ほぼ20cm間隔で朝顔形埴輪を含む円筒埴輪が一周する。

②前方部では、後円部埴輪列（－140cmの等高線の上下）より一段高い位置に周らされていたと考えられる。

③形象埴輪は、後円部の墳頂、くびれ部寄りの位置に配置されていたと考えられる。

④埴輪の配置のされ方は、後円部北半と南半で異なる。南半では、同一形態が連続する特色を示し、北半では各形態が交互に配置されるという特色を示す。

⑤北半で見られる2段凸帯の大型埴輪（2－A、B）は、南半でほとんど見られない。代りに南半で見られた2段凸帯の小型埴輪（2－C、D）は、北半では一部（第1次墓前祭祀北西部）でしか見られない。

⑥第1次、第2次墓前祭祀の西側、北側（それぞれの墓前祭祀の墳央から見て左側）ではそれぞれ特徴的な埴輪配列が見られる。

⑦朝顔形埴輪は、ほぼ定間隔で配置されている（約10本間隔）。

⑧埴輪の設置のしかたについては、基部をうめていた可能性があるが、定かでない。という点があげられる。

4. 土層

墳丘を構成している土層は、灰褐色粘土層（X－1）および茶褐色粘土層（X－5）である。これら両層の下位、あるいは周溝底面を構成している土層は青灰色粘土層（XI）である。X－1およびX－5層の間には黒灰色粘土層（X－6）が狭まる部分もある。墳丘部（X－1）の上層には表土・耕作土層（I）を載せているのみで、斑鉄および軽石粒を含有する灰色粘土層（II）は存在しない。

周溝の基盤層は、前記したとおり青灰色粘土層（XI）である。上層よりI・II……IX層と連続し、全体的には、灰褐色粘土層が主体を成し、中間もしくは、下位に泥炭層、火山灰層をもつ。なおX層としてある層は、複数の特徴を備える土層、もしくは、ごく小範囲にレンズ状に堆積している土層を総括したものである。

I層は表土・耕作土であり、うすく茶褐色を帯びている。II層は斑鉄およびオリーブ褐色を呈する軽石粒によって構成される灰色粘土層である。下部は酸化鉄が層を成す。III層は灰褐色粘土である。その最上層は部分的にみられなくなる場合があり、比較的固くしまっている。全体に10cm前後の堆積である…III-1層。中間層は、上層に比して粘性を増し、ほんのわずかに黒味を帯びる。全体に25cm前後の堆積をみる…III-2層。最下層は、上記2層に比してさらに粘性を増し、明るい灰色を呈する灰色粘土層でやわらかい。全体に10cm前後の堆積をみる…III-3層。

IV層はIII-2層と同様であるが、部分的に泥炭を含み、ガサガサした層である。V層は黒褐色で粗粒の軽石粒とスコリアを含有する。5cm前後の堆積である。VI層は黒褐色粘土であり、15cm前後堆積する。

VI層の下位に灰褐色粘土層が再びみられる。周溝内で最も厚く堆積している層で、40cm前後を計る…III-4層。

VII・VIII層は、泥炭を主体とした土層である。しかし、VII層は灰白色粘土を多量に含有している。IX層は若干クリーム色を帯びた灰色細粒火山灰層である。IX層は大部分が周溝底面の直上に堆積しているが、前方部北西コーナー付近にのみ、中間に6～8mmの灰褐色粘土層が検出されている。

周溝内土層について記してきたのであるがII・V・VIII・IX層の4層については、火山灰層（軽石層）もしくは、それを含有する泥炭層と判断し、重鉍物分析を実施したので、さらに細部についてみていくことにする。なお、分析はパリノサーヴェイ社に依頼したものである。

II層は、オリーブ褐色を呈する軽石であるが、耕作土下に、ある程度の攪乱を受けた状態で、凝固していた。重鉍物の組成は、シソ輝石が79.9%、普通輝石が11.8%、不透明鉍物（磁鉄鉍）が6.2%であった。

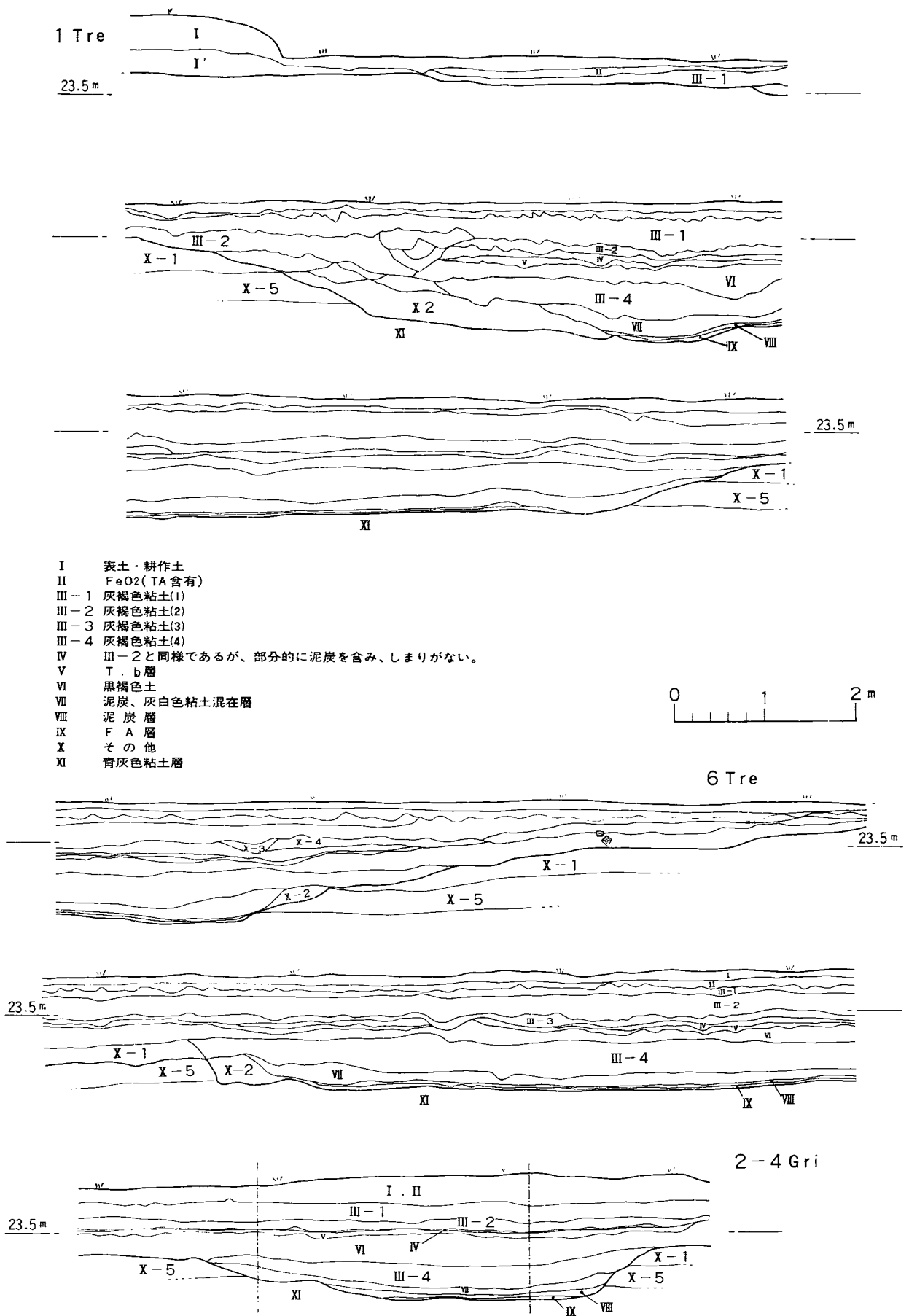
V層は、黒褐色で粗粒の軽石粒とスコリア粒を含む、重鉍物の組成は、シソ輝石が85.7%、普通輝石が11.5%、不透明鉍物（磁鉄鉍）が2.8%であった。

II、V両層共、シソ輝石＞普通輝石＞不透明鉍物（磁鉄鉍）の鉍物組成を示す。これらの特色は、明らかに浅間の降下軽石層の特徴を示す。各々の色相、形状等層序、層相から検討してみると、II層を浅間“A、降下軽石層、V層を浅間“B、降下軽石層に比定してさしつかえあるまい。

なお、II層—浅間A降下軽石層は、墳丘部を除いて周溝内、周溝外の一面に分布しており、V層—浅間B降下軽石層は周溝内および周溝外の一部に分布している。

VIII層は、黒色の泥炭層であり、重鉍物量は9.5%と少ない。重鉍物組成は、角閃石（酸化角閃石を含む）が53.9%、シソ輝石が35.8%、不透明鉍物（磁鉄鉍）が6.7%、普通輝石1.7%であった。

IX層は、若干クリーム色を帯びた灰色細粒火山灰層である。重鉍物組成は、角閃石（酸



第 9 図 土 層 図

化角閃石を含む)が47.9%、シソ輝石が38.3%、不透明鉱物(磁鉄鉱) 7.6%、普通輝石が2.9%であった。また微量ながら緑簾石が観察された。

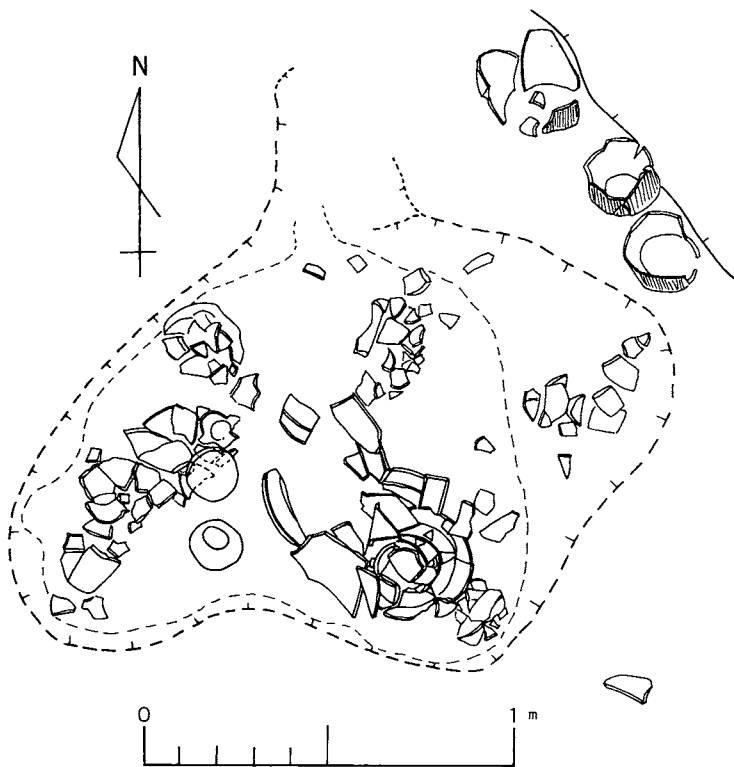
VIII、IX両層共、角閃石(酸化角閃石を含む)＞シソ輝石＞不透明鉱物(磁鉄鉱)＞普通輝石という重鉱物組成を示す。この組成は浅間の、シソ輝石＞普通輝石＞不透明鉱物(磁鉄鉱)という組成と根本的に異なる。そして、最も特徴的な角閃石を多量に含有することから榛名火山二ツ岳火山灰層に同定し得る。さらに、酸化角閃石、緑簾石を含有することから、榛名火山二ツ岳火山灰層のなかでもいわゆる“FA”に比定してさしつかえあるまい。

VIII層はIX層とほぼ同一の重鉱物組成を示すが、これはIX層—FA層—が推積した後、これを基盤とした池沼的環境が形成されたためFA層の鉱物組成が反映するような泥炭がつくられたものと考えられる。

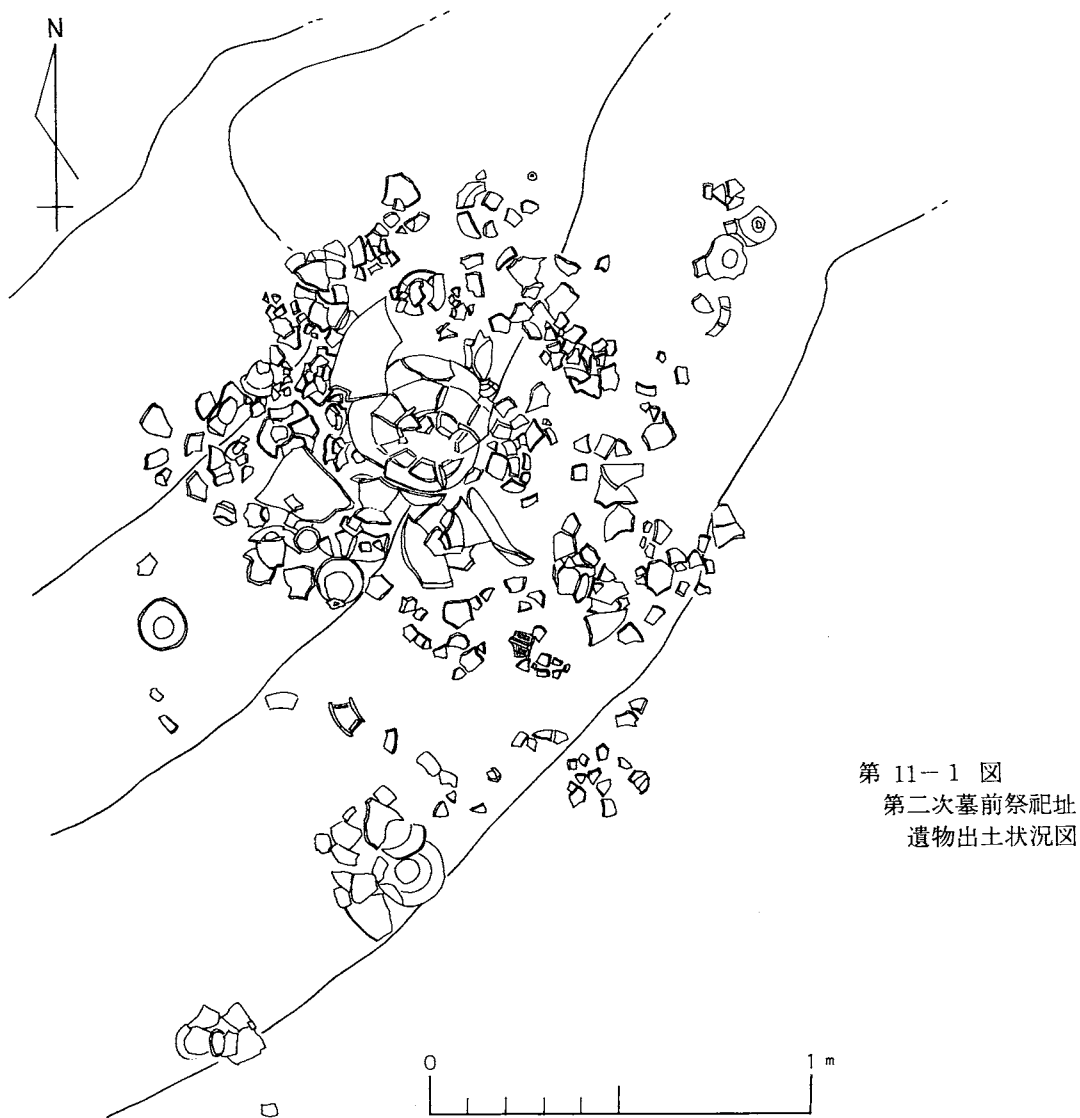
5. 墓前祭祀址

墳丘後円部の北東隅、埴輪列の内側に位置する例と、同じく東南隅に位置する例がある。後章で述べるような、出土遺物の検討によって、各々の遺物群に時期差を認め、前者を第1次、後者を第2次とした。

遺物の組み合わせは、第1次例が須恵器器台1、須恵器無蓋高杯1、土師器埴1、土師器杯3、土師器高杯6(内1は大型)であり、第2次例は須恵器器台1、須恵器無蓋高杯1、土師器壺1、土師器杯7、土師器高杯14(内1は大型)である。量的には後者が大きく前者を上回るが、基本的な組み合わせ—須恵器器台—須恵器高杯—土師器壺(埴)—土師器杯



第10-1図
第一次墓前祭祀址遺物出土状況図



第 11-1 図
第二次墓前祭祀址
遺物出土状況図

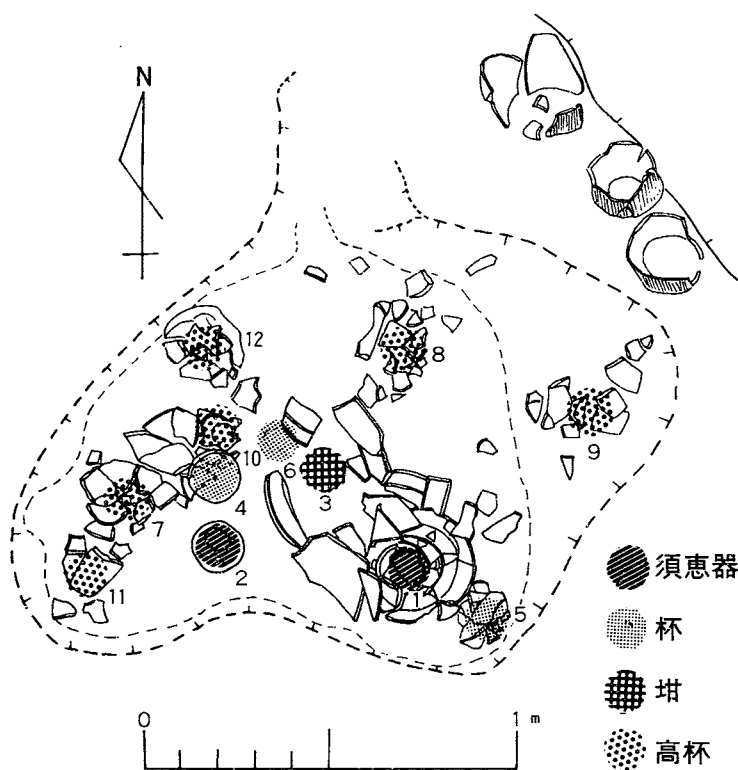
一土師器高杯（内 1 は大型）一は全く同一である。

a. 第 1 次墓前祭祀址

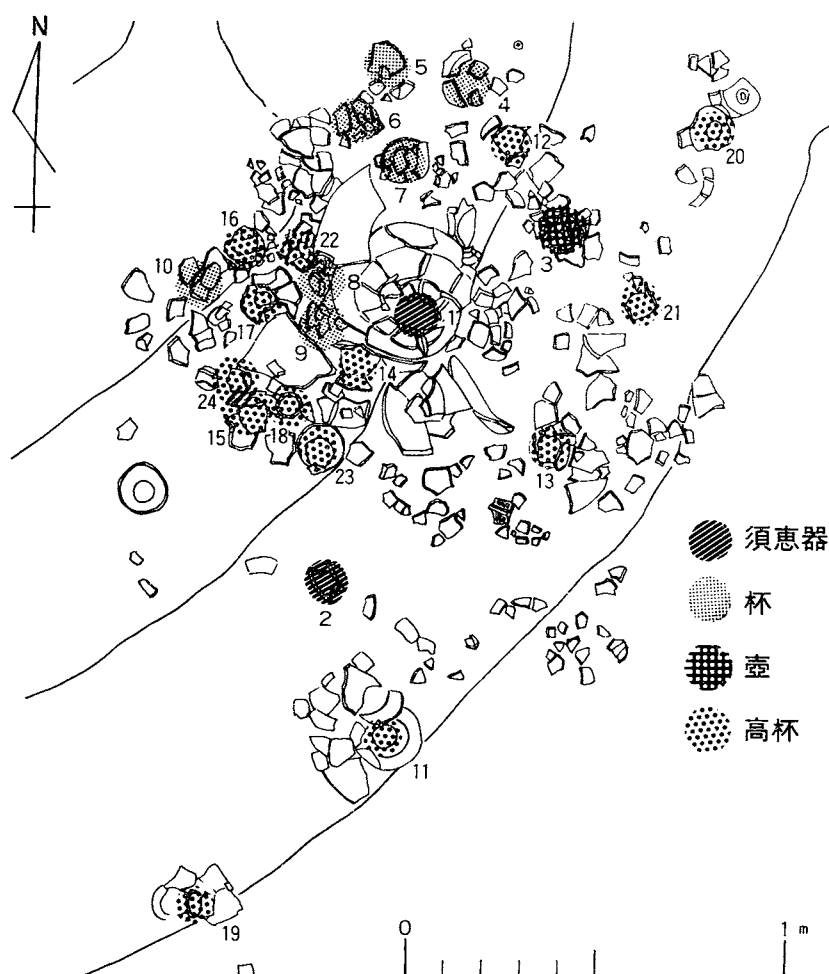
後円部の中心点から S-45°-E のほとんど埴輪列（No.87、88、89）に接する地点に位置する。東西 1.8m 南北 1.1m の不整楕円形を呈し、5~10cm の深さに掘り込まれた土坑内に土器群が配置されている。土坑底面（遺物出土レベル）はほとんど平坦である。10-2 図は各遺物の基部（細片で発見されたものはその中心点）の位置を示したものである。北側に土師器高杯 6 点が扇状に並び（No.11-7-10-12-8-9）、この要の位置に須恵器器台が位置する。器台の西側に須恵器高杯、土師器埴があり、器台の東、西両側に各々土師器杯が位置する。器台西側に位置する土器群は、土師器大型高杯（No.10）一須恵器高杯（No.2）一土師器埴（No.3）で正三角形を形成し、特徴的である。

b. 第 2 次墓前祭祀址

後円部中心点から N-133°-E の推定埴輪列（この部分には埴輪列が存在しない）内側に位置する。



第 10-2 図
第一次墓前祭祀址遺物配置図



第 11-2 図
第二次墓前祭祀址
遺物配置図

遺物群の範囲は、東西 1.6 m、南北 2 m の楕円形を呈し、No.19 の土師器高杯のみが西南方にずれる。遺物は墳丘裾部の傾斜に沿って置かれ、水平面を造り出していない。

須恵器器台を中心にして、土師器杯が北から西へ集中して配置されており、土師器壺は東に位置している。土師器高杯は器台の西 (No.14、15、16、17、18、22、23、24) および東 (No.12、13、20、21) に分かれる。須恵器高杯および土師器大型高杯は、器台および、土師器杯、高杯の集中地域から離れているが、全体からみると器台の西南方に位置する。

6. 出土遺物

a. 第 1 次墓前祭祀址出土遺物

須恵器高杯型器台 1 . 須恵器高杯 1 . 土師器埴 1 . 土師器杯 3 . 土師器高杯 6 (内大型 1) が出土している。

1 . 高杯型器台・高さ 33、口縁径 40.3、脚袖径 30.6、脚高 16.2cm を計り、杯部は深い半球型を呈する。口唇部は強く屈曲し、段を成す。体部は、外面の上位 $\frac{1}{2}$ (下段の凸帯より上位) 及び内面の口唇部に回転ナデが施されている。外面の下位は、回転削りの痕跡を示し、内面の体部は横位を主体としたナデが施されている。体部底面は脚と同一行程でつくられており体部を巻き上げによりつくりあげている。脚部は外面の全面および内面下半部に回転ナデが施されており、内面上半部は、横のナデが加えられている。体部には 2 条を一对の凸線を 2 段に配している。凸帯は付着されたものであり、周辺を窪めて造り出したものでない。口唇部に付されている段及び、二段の凸線のそれぞれの間には、8 条の櫛描波状文が 2 列ずつ配されている。脚部は、比較的短かく緩やかな曲線を描いて脚端部に至る。脚端部は、口唇部と相対的なつくりを見せる。つまり口唇部は屈曲した口唇下部に凸帯を付しており、脚端部は上部に凸帯を付したものである。それが外見状段を成す様にみえる。杯、脚部接合部及び脚中央部にそれぞれ 2 条の凸帯を、脚部の角度変換線上には 1 条の凸帯を付している。各凸帯間にそれぞれ 3・3・2 列の櫛描波状文が付されている。各波状文はそれぞれ上から 8・8・10・10・10・11・10・10 条の櫛描である。櫛描波状文を施した後、上下に相対した三角形の透しが 6 方に配される。上段の三角形は、左下隅で切断がとめられている。下段の三角形は、左右の辺の上辺から 1 cm 前後下で上方からの切断行為が停止している。波状文の施文方向は左から右である。施文順位は下から上である。

2 . 無蓋高杯・高さ 11.2、口縁径 13.5、底端部径 11.3、くびれ径 4.5、脚高 5.4cm を計る。杯部は深く、大きい。杯部は巻き上げ、水挽きによる成形がなされ、外面は口唇下 1.8cm に細い凸帯をもつ。凸帯下には 2 条の浅い沈線がめぐる。口縁から幅 3 cm の間は回転ナデ、体部下半部は回転ヘラ削りの調整痕がみられる。内面は口唇端部に 1 条の沈線を持ち、口唇下 1.2cm の所にわずかな稜をもつ。また、内面は全面に丁寧な回転ナデが施されている。脚部は裾部へ大きく曲線を描いてひろがる形態を示し、端部は矩形を示す。脚部は全面に丁寧な回転ナデが施され、内面は端部に鈍い段を有する。また、四方に裾部が若

干広い長方形の透しをもち、杯部下面に切り込みの痕跡を残す。色調は暗赤褐色を呈し、白色の微粒子を多量に含む。また、重量が軽いことも特色の1つである。

3. 埴・頸部が鋭角的で、口縁にかけて直線的に外傾する。恐らく、口縁径が胴径より若干小さく、底部が丸い形態をとるものと思われる。内外面共表面が剥離しており、整形については不明である。口縁の高さについても不明であるが、胴高より低いと思われる。

4. 杯・高さ 6.2、口縁径13.0cmを計る。

口縁はほぼ直立し、端部は丸味をもつ。明確な稜をもち、体部は丸味をもつ。体部外面の細部は不詳であるが、不正方向の削り様ナデが施されているものとみられる。口縁部は横ナデが施されている。体部内面は不明である。胎土は細かい。

5. 杯・高さ 5.8、口縁径12.4cmを計る。

口縁は直立し、端部は矩形を示す。丸味をもった稜をもつ。体部は深く、外面不正方向の削り様ナデが施されている。口縁部は横ナデの後、部分的にナデが施されている。体部内面はナデが施されている。胎土は非常に細かい。

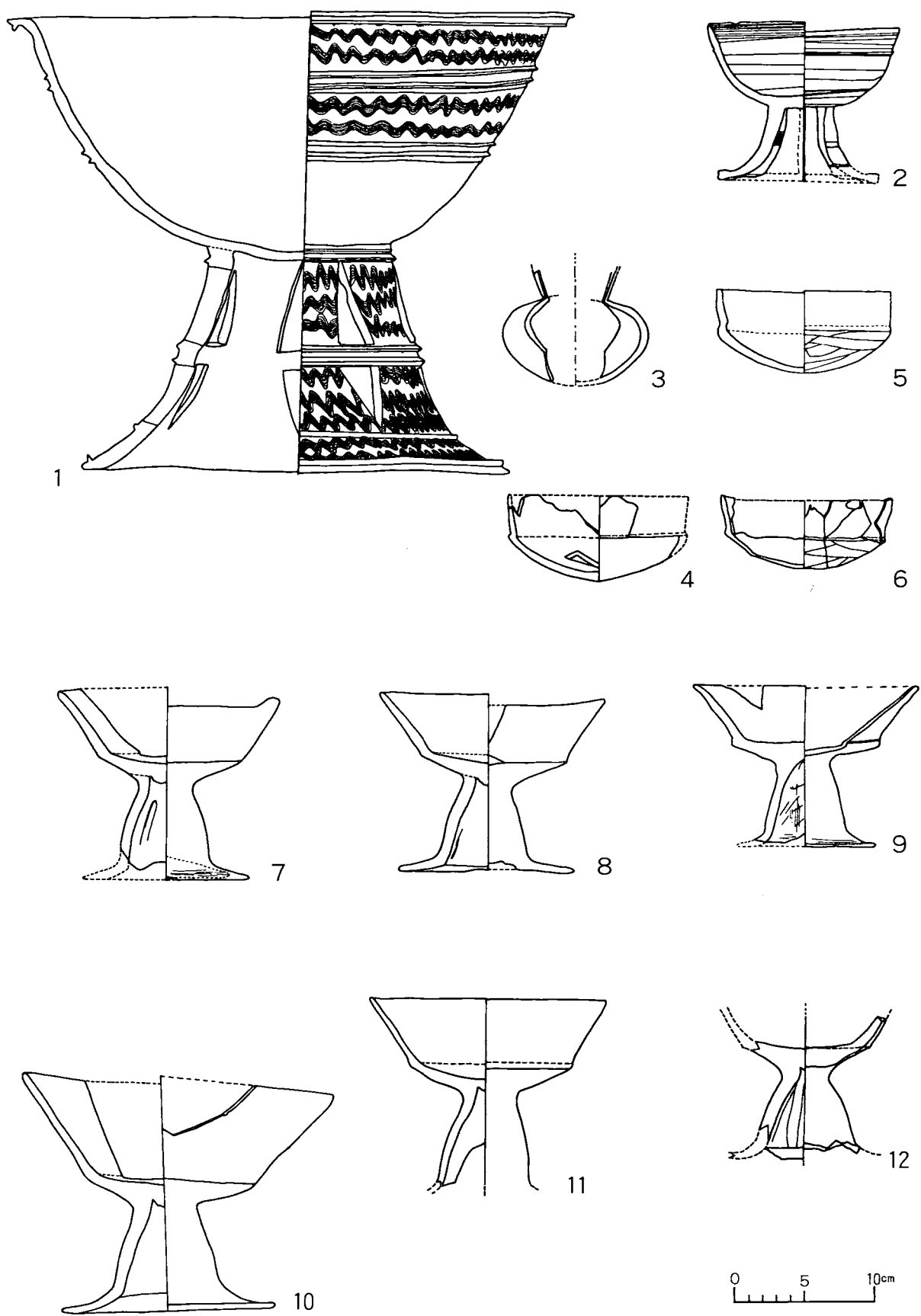
6. 杯・高さ 5.2、口縁径12.3cmを計る。

若干丸味をもつが明瞭な稜をもってわずかに内湾しながら外傾する口縁に移行する。口唇部は、わずかな丸味をもつ。体部は平坦部をもたない。整形痕は明瞭でないが体部外面は削りの痕跡がみられる。

7. 高杯・高さ13.6、口縁径15.8、脚端部径11.9、くびれ部径 3.9cmを計る。赤褐色を呈する。全体に調整痕が見られないが、脚袖部の化粧土の残存する部分に横ナデが認められる。脚部は、若干の脹らみをもっている。脚裾部は大きく開く。口唇部は丸味をもつ。脚部内面はへら状工具によって雑にナデつけられている。杯部は、あまり鋭くない稜をもって、わずかにそりをみせ外傾する。口唇部外面に1条の沈線をもつ。又、口縁部の一部が大きくゆがんでいる。胎土は非常に細かい。杯脚部の接合面には、杯部にいわゆるへソをもって脚部にはめこむ形態である。

8. 高杯・高さ12.7、口縁径16.0、脚端部径12.5、くびれ部径 3.4cmを計る。赤褐色を呈する。全体に調整痕が認めがたい。杯部は、はっきりした稜をもってわずかりそりをみせ、外傾する。口唇部は丸味をもつ。脚部は、ほんのわずかの脹らみをもつがほとんど直線的に裾部に移行する。裾部は、ほぼ平坦になって大きく広がる。脚部内面はへら工具によって雑にナデつけられている。杯・脚部の接合は杯部にへソをもっており7と同様である。胎土は非常に細かい。

9. 高杯・高さ11.5、口縁径16.0、脚端部径10.0、くびれ部径 3.1cmを計る。赤褐色を呈する。杯部は、明確な稜をもち外反して口縁に至る。体部底面はほぼ垂平である。口唇部は丸味をもつ。全体に調整痕が明確でない。脚部は接合面直下でわずかな脹らみをもちそのまま裾部に移行する。裾部はわずかに広がる。内面はへら状工具及び指頭によってナデつけられている。上記2例とは接合法がことなり、脚部及び杯底面と杯体部が接合され



第 12 図 第一次墓前祭祀址出土遺物実測図

ている。胎土は非常に細かい。

10. 高杯・杯部が全体に傾いているが最高高17.4、脚部高 8.0、口縁径22.2、脚端部径15.2cmを計る。赤褐色を呈する。全体に調整痕は明瞭でない。杯部は、底面が小さく明瞭でない稜をもって外傾している。口唇部は丸味をもつ。脚部はわずかな脹らみをもって裾部へ移行する。裾部は大きく開き。端部は丸味をもつ。脚部内面は、ヘラ状工具によって雑にナデつけられている。杯・脚接合部は杯部中央にヘソをもつ。胎土は非常に細かい。

11. 高杯・推定高14.5、口縁径16.8、くびれ径 3.8cmを計る。全体に調整痕はみられない。脚は若干の丸味をもち、大きくくびれて杯部へ移行する。杯部はわずかな稜をもち、直線的に口縁へ移行する。口唇端部は丸味をもつ。接合面は杯底面にヘソをもつ。胎土は細かい。脚裾部を欠く。

12. 高杯・杯部上半、脚裾部を欠く。脚部はわずかな脹らみをもって大きく裾部へ広がる。杯部は比較的鋭い稜をもち、全体的な形態はNo.8 に酷似する。杯部及び脚部外面の整形は不明であるが、脚部内面は指頭によるナデツケが施されている。胎土は細かい。

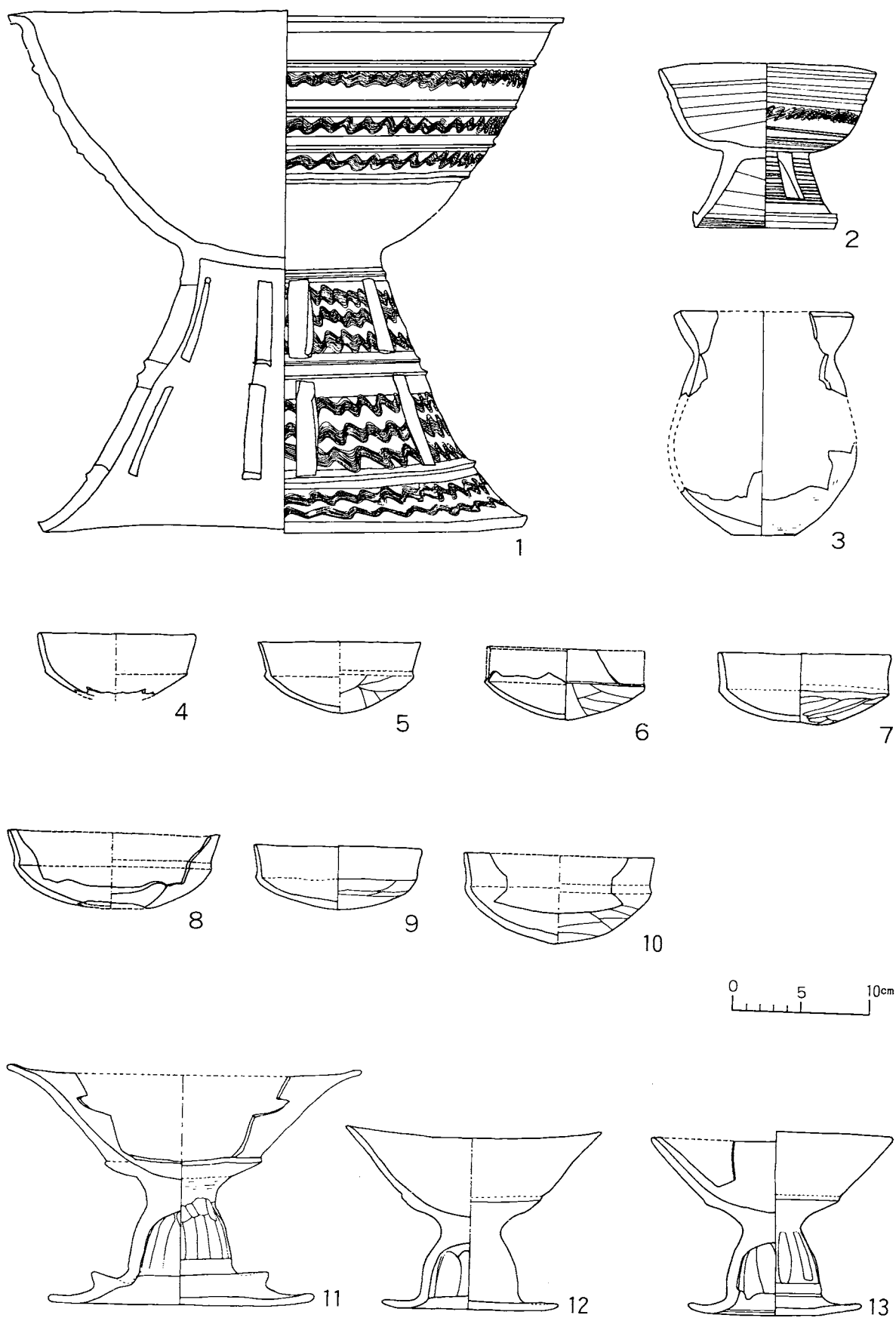
b. 第2次墓前祭祀址出土遺物

須恵器高杯型器台1、須恵器高杯1、土師器壺1、土師器杯7、土師器高杯14、（内大型1）、が出土している。

1. 高杯型器台・高さ37.5、脚部高19.2、口縁径40.2、脚端部径35.2、くびれ部径14.2cmを計る。杯体部はやや直線的なカーブで口唇部に至るが、杯部自体は深い。口唇部は強く外方に屈曲し、端部はほぼ矩形であるが中央がわずかにくぼむ。体部には、1条の凸帯が4本配されその間に櫛描波状文が一带ずつ配されている。凸帯は断面略三角形を呈するが若干丸味をもつ。凸帯の上下面をくぼますことによって相対的な効果をねらっている。波状文は、上から14・13・13条で施文されている。

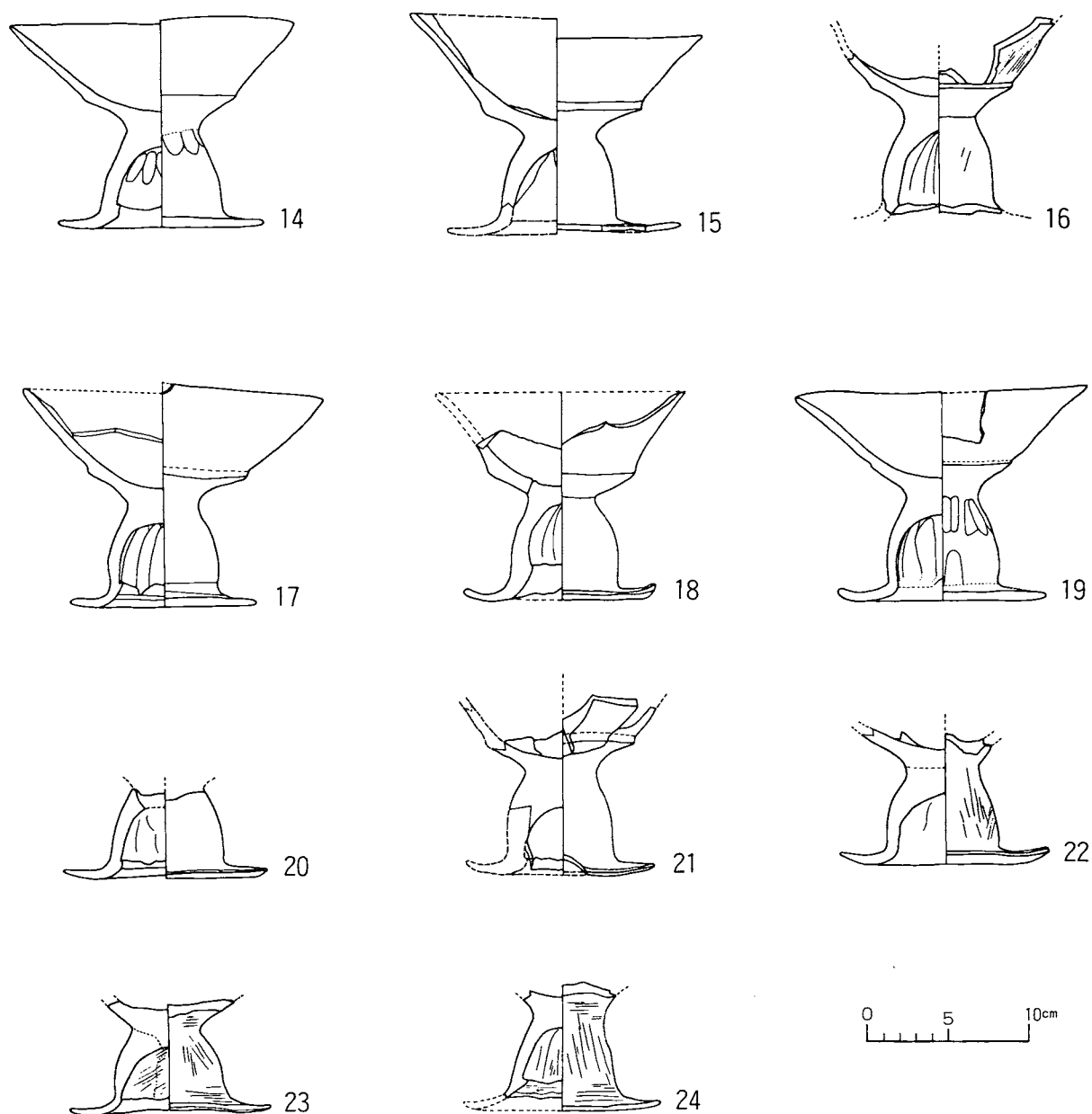
脚部は直線的に裾に移行し、裾はわずかに外方に広がる。接合直下に1条、中央部に2条、裾への変換線上に1条の凸帯を配している。その間長方形透しを上下二段相対する位置に8カ所もっている。透し孔の切断は雑であり、切り残しが多く見られる。上下段とも3列の波状文が付されている。凸帯は、杯部と同様断面略三角形を呈しており杯部のそれとくらべると若干しっかりしている。波状文は上から12・12・11・11・12条によって施文されているが、それによって条線の数へっているものもある。裾部は、12・11条の2列の波状文が付されている。脚端部は、略矩形を呈する。脚部内面接合部には、棒状のナデ付けがなされている。接合部外面は、回転ナデの調整痕が顕著である。杯部内面の口縁部は回転ナデが施され、体部は丁寧な横のナデが加えられている。外面は文様帯及び、上位は回転ナデ、下位はナデ様の回転削りが施されている。

2. 無蓋高杯・高さ11.9、脚高 5.4、口縁径15.6、脚端部径10.4、くびれ径 6.1cmを



第 13 图 第二次墓前祭祀址出土遺物実測図(1)

計る。杯部は深く、体部底面から丸味をもってわずかに外傾しながら口縁に至る。口縁下に2条の凸帯が上下面をくぼめることによってつくりだされている。凸帯直下・杯中央部に5条の櫛描波状文が施されている。脚部は短く、太い接合面から直線的に裾部に秒行する。外面は長方形（台形）、内面は三角形を呈する透しを三方にもつ。脚端部は段をなし、内湾ぎみになっている。内面の全体に巻き上げ痕が良くみられる。杯部底面から脚端部にかけて、回転ナデが施されている。工具が櫛目状のものであろうか。沈線状の調整痕が残る。杯口縁部及び内面は回転ナデが施されている。脚の端部から5～6mm前後のナデが加えられ回転ナデの痕跡が消されている。青灰褐色を呈する。



第 14 図 第二次墓前祭祀址出土遺物実測図(2)

3. 壺・推定高16、推定口縁径13、底径 4.5、推定くびれ部径10、胴部最大径を下半部にもち13.3cmを計る。茶褐色を呈する。全体に薄く仕上げられている。底部は平底を呈し段をもたないで胴部に移行する。緩やかに頸部に移行し、内湾ぎみに外傾した口縁をもつ。口唇部は矩形を示すが内面にわずかにくぼみをもつ。口縁は横ナデ、底面は削り様のナデ、胴部は縦あるいは横のナデが施されている。胎土は粗い。

4～10は杯である。8、10は比較的大型である。口縁部の形態は、6が直立している他は、わずかに外傾している。そのうち4はやや内湾ぎみに外傾しているが、他は外湾ぎみもしくは直線的に外傾している。口唇部はほとんどが丸味をもつが、6は内側に1条の凹線をもつ。体部は4、7、9が浅く、5、6、8はほぼ $\frac{1}{2}$ 、10は深い形態を示す。稜は6以外は比較的鈍い。全ての器体について整形痕は明瞭でないが、体部外面は削りもしくは削り様ナデで仕上げられている。胎土は4、8が細かく、5、9が前者に比較するとやや粗い。6、7、10は砂粒を多量に含む。

11～24は高杯である。11は大型で、高さ17.4、口縁径26.1、脚端部径19.3、杯体部稜までの高さ10.4cmを計る。杯部は明確な稜から大きく外反し、丸く仕上げられた口縁へ移行する。脚は脹らみをもち、強く外反し鋭い稜をもって段を成し、さらに水平な脚端部へ移行する。

12～24は杯部の形態、杯・脚部の接合面の形態によって大きく2種に区分される。12～15、17、19、20、23は、稜から直線もしくは、わずかに外反しながら丸味をもつ口縁に移行し、脚から杯への移行は鋭角的である。16、18、21、22、24は外反しながら丸い口唇部へ移行する形態を示す。前者と比して口縁径が小さい。脚から杯への移行は丸味をもつ。

脚部は全て丸味が強いが、後者は接合の形態（前者は杯底面を脚と、後者は杯底面を杯と同一行程で成形したと思われる）から、長く伸びた脚を呈する。

整形痕は脚内面を除いてほとんど見られない。脚内面は、全て、ナデが丁寧に施され、指頭によるナデツケ痕をわずかに残すものと全く残さないものがある。

12、23は杯内面が黒く仕上げられており、11の内外面15、16、17、19、21の杯内面は朱塗されていたと思われる。

胎土は13、14がやや粗く、2～3mm大の小礫を多く含む。18は細かい。他はほとんど同一で、比較的細かい。

c、埴輪

鎧塚古墳を圍繞していた埴輪は、円筒埴輪及び朝顔形円筒埴輪である。その原位置が確認もしくは、推定されたものが164点に及ぶ。

円筒埴輪は、凸帯が2本のものと3本のものがある。形態、技法によって、凸帯2本のものが4タイプ（2-A、B、C、D）、3本のものが6タイプ（3-A、B₁、B₂、C₁、C₂、D、E、F）に類別される。また、朝顔形円筒埴輪は3タイプ（朝顔-A、B、C）に類

別される。

凸帯2本のものは、大型のもの(2-A、B)、小型のもの(2-C、D)の両者がある。2-AはBに比して第1段が幅広くつくられ安定感がある。Aは、透孔が第2段下位に配置され、内面に切り残しをもつものに対し、Bは第2段上位に配置され、切りっぱなしでシャープな面をみせる。又、刷毛目数は、Aが9~11本(2cm内)であるのに対し、Bは6~7本と粗い。

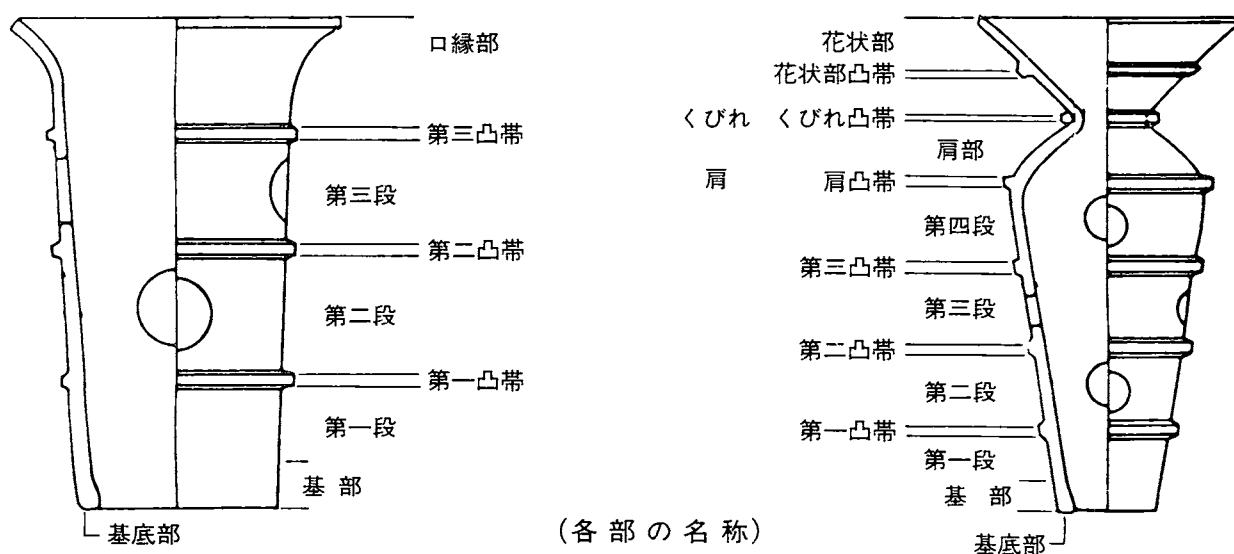
小型の2者の差は著しい。Dは、内面にナデの痕跡のみがみられ、透孔は第2段下位に配置され、切り口は再調整されている。特徴的なのはXの窯印を必ず有することである。Cは、内面の第2段以上に縦の刷毛、それ以下に縦のナデを施している。透孔は第2段上位に配置され、切り口は切りっぱなしでシャープである。

このように凸帯2本の例は、A、B-C、Dの3種類の技術が用いられたと考えられる、

3段凸帯の例は鎧塚古墳でみられる埴輪のうち最も数が多い。しかし、2段凸帯例のように明確な区別が無い。内面の整形(刷毛のみの整形か、ナデを施すか)、透孔(配置されている位置、穿孔法、形態・規模の差)、器形、凸帯の付着法等によって大別したところ、A、B-C、D、E-Fの4型になり、細かな特徴を加見すると、A、B-1、B-2、C-1、C-2、D、E、Fと区分される。

朝顔形円筒埴輪は最も数が少ないが、花状部の成形技法・形態、調整技法、透孔の穿孔法、凸帯数等によってA、B、Cの3型に区分される。

埴輪観察表凡例

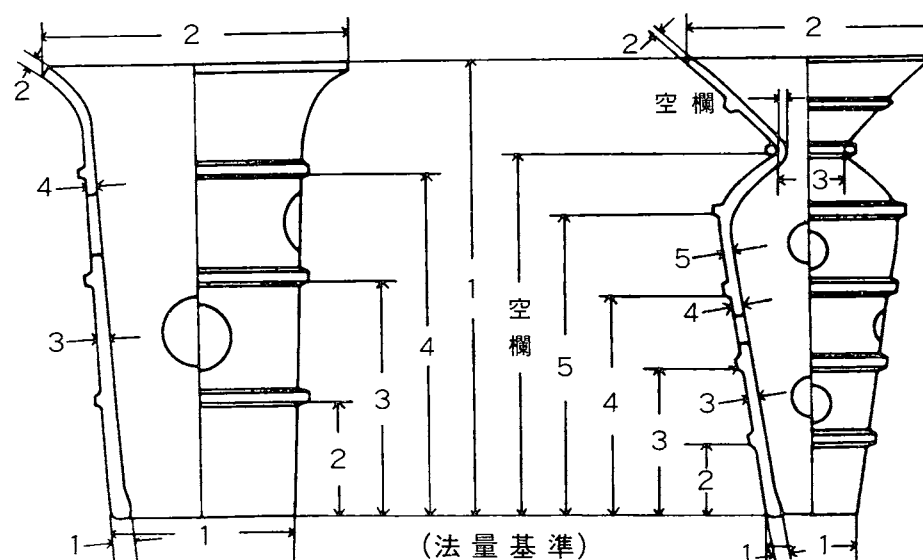


・出土区—— Fig、2 による調査区分 ・番号—— 一連番号

・様式—— IV 考察・埴輪において区分した。

・様式名、整形技法はここに含まれ、ことなった技法をもつ場合は備考欄に記した。

法量——記入順序は下図に示すとおりである。単位はcm。表中()は推定値。



口縁部形状——A・2 cm前後の外反を示す。口唇内面に窪みを持つものもある。口唇端部は真横を向く。例・3 Aタイプ・3 Eタイプ・3 Fタイプ・3—Cタイプ、そのうち3 Eタイプは内面に稜をもつように屈曲する。 B・1 cm前後の外反であり、外反の仕方がA類よりも緩やかである。例・3—B₂ タイプ。 C．口唇のみ幅1 cmで水平に外反するタイプ。 例・3—D、 D．僅かに外反し、口唇端部が斜め上方を向く。例・B₂ タイプ・2—C。 E．緩やかに口縁全体が反傾し口唇部がそれよりも外傾度が強まる。口唇端部は斜め上方を向く。例・2—A・2—D・2—B。

・凸帯——A．上辺を丁寧にナデ付け、下辺はほとんど放置しておく。側辺は上辺と共にナデられている。おおむね矩形を呈する。 B．上・下辺共丁寧にナデ付けており側辺は、上下辺より先にナデられている。おおむね矩形を呈するが稜に盛り上りをみせる場合が多い。 C．全体にナデが加えられ稜が丸みをもつ。 D．上・下・側三辺を一緒にナデる。側辺・中央三辺共凹みをもつ。

・透孔——穿孔法 A．全面シャープな切り口であり切りっぱなし。 B．シャープな切り口であるが、内面下部に切り残しがみられる。 C．シャープな切り口であるが切りっぱなしでなく、余土を内外面にかぶせる。 D．再調整が施されシャープな切り口がみられない。

——形A．円形、多少崩れているものも含む。 B．D形、逆の場合(□)は逆Bと記入。 C．カマボコ形、逆の場合(▽)は逆Cと記入。 F．その他。

——位置A．上下凸帯どちらからも等しく離れ、その中間に位置する。 B．下の凸帯に接するか非常に接近している。 C．上の凸帯に接するか非常に接近している。

——規模タテ×ヨコ (cm) ・刷毛目—2 cm内に見る条痕数平均 (小数点以下切ステ)
上段は表、下段は裏を示す。

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-6H	1	3-E	¹ (41.5) ² (12.8) ³ (21.2) ⁴ (28.7)	¹ 14.5 ² 26.2	¹ 2.3 ² 0.5 ³ 1.1 ⁴ 1.1 ⁵ 0.9	A	¹ — ² — ³ —	¹ なし、もしくは不明 ² A・A・AorC・—×7.4 B・AorC・—(大)	9 9	淡橙褐色 内面≠外 面≠黒 ずんだ小 豆色	胎土は細かいが部 分的に4mm大の礫 を含む。 半須恵質 底～口縁 底端部外面一部横 ナデ
	2	2-D	¹ (34) ² 12.0	¹ 11.4 ² (21.3)	¹ 1.6 ² 0.8 ³ 1.1	E	¹ 1.0・D ² 1.0・D	¹ D・A・B・(4.0×6.5)	12	内面 小豆色 外面 青ずんだ 灰褐色	胎土はやや細かい 須恵質 底～口縁一部 第二段×窯印
2-6I	3	2-D	¹ × ² 11.2 ³ 21.1	¹ 11.7 ² ×	¹ 1.8 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.0・D ² 1.2・D	D・A・A・5.3×6.7 D・A・A・(中～大)	11	地は淡黄 色 内面淡い 小豆色 外面≠灰 褐色	胎土は細かい 半須恵質 底～第三段上位 第二段×窯印 外面底端部一部横 ナデ
	4	3-B ₂	¹ 43.2 ² 11.2 ³ 20.3 ⁴ 29.7	¹ 16.0 ² (20.5)	¹ 2.7 ² 0.5 ³ 0.9 ⁴ 0.8 ⁵ 0.7	D	¹ 1.0・A ² 0.7・B ³ 1.1・B	¹ D・A・A・3.7×3.8 D・A・A・(小) ² D・A・A・6.0×(6.5)	10 10	内面の全 面及び外 面の≠黒 ずんだ小 豆色 外面の≠ 柿色	胎土は粗い 半須恵質 底部～口縁
	5	2-B	¹ × ² (11.8) ³ (20.2)	¹ (16.1) ²	¹ 2.2 ² × ³ 0.8 ⁴ 0.8	×	¹ × ² ×	¹ A・A・(A)・(6.2×7.5)	6 6	よごれた 淡黄色	胎土はやや細かい 底部～第三段中位
	6	3-B ₁	¹ × ² 12.0 ³ 20.5	¹ 16.0 ² ×	¹ 2.5 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.8	×	¹ 1.0・A ² 1.0・A	¹ A・A・A・3.7×(3.5) (A)・(A)・(A)・(小)	10 10	内面及び 外面の≠ 橙褐色 外面の一 部黒ずん だ赤褐色 及び灰褐 色	胎土は粗い 半須恵質 外面底端部高さ5 .5幅7cmの半円形 の焼きむらあり 底～第三段下位
	7	3-B ₁	¹ × ² 12.0 ³ 20.8	¹ 14.7 ² ×	¹ 2.1 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.9	×	¹ 1.1・A ² 1.2・A	¹ A・A・B・4.1×5.5 A・A・B・(4.0)×5.0 ² A・A・(B)・(大)	10	外面は淡 橙褐色 内面黒ず んだ赤褐 色	胎土は粗い 底～第三段中位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-6 I	8	3-B ₁	¹ × ² 11.8 ³ 20.5	¹ 15.9 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.9	¹ 3.0 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.9	×	¹ 1.1・A ² 1.1・A	¹ A・A・A・3.1×3.7 A・A・A・3.5×3.7 ² (A)・(A)・ー・(大) (A)・(A)・ー・(大)	12	内面及び 外面の半 は淡橙褐 色 外面の半 は黒ずん だ赤褐色	胎土は粗い 底～第三段下位
	9	3-C ₁	¹ × ² 12.5 ³ 21.0	¹ 16.4 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.8	¹ 2.4 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.8	×	¹ 0.9・B ² 1.0・B	¹ B・A・A・4.0×4.0 B・A・A・4.0×5.0 ² B・A・(B)・(大) B・A・B・(大)	9 9	淡黄褐色 外面底端 一部黒ず んだ赤褐 色	胎土はやや粗い 底～第三段中位 外面底端の一部横 ナデ
	10	3-C ₁	¹ (43.5) ² 12.5 ³ 21.1 ⁴ (31.0)	¹ 16.0 ² (22.5) ³ 1.1 ⁴ 0.9	¹ 2.0 ² 0.6 ³ 1.1 ⁴ 0.9	A	¹ 0.9・A ² 1.0・A	¹ A・A・B・3.6×3.8 A・A・BorA・4.0×4.5 ² A・A・BorA・(5.4×6.0) A・(A)・BorA・(中～大)	10 10	全面黒ず んだ赤褐 色	胎土は粗い 底～口縁
	11	3-C ₁	¹ × ² 12.6 ³ 21.5	¹ 14.3 ² × ³ 1.2 ⁴ 1.0	¹ 1.5 ² × ³ 1.2 ⁴ 1.0	×	¹ 1.0・B ² 1.0・D	¹ B・A・A・4.3×4.6 B・A・BorA・(小or中) ² B・(A)・(A)・(中or大)	10 10	全体に黒 ずんだ赤 褐色	胎土は粗い 底～第三段上位
2-6 J	12	3-C ₁	¹ × ² 12.2 ³ 21.0	¹ 16.8 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.9	¹ 2.0 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.9	×	¹ 1.3・B ² 1.2・B	¹ B・A・A・4.0×4.4 B・(A)・(A)・(小or中) ² B・(A)・(B)・(中or大) B・(A)・(B)・(中or大)	12 10	灰褐色	胎土は粗い 須恵質 底～第三段下位 外面底端部横ナデ
	13	3-C ₁	¹ × ² 12.5 ³ 21.4	¹ 14.8 ² × ³ 1.0 ⁴ 0.9	¹ 2.2 ² × ³ 1.0 ⁴ 0.9	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B	¹ B・A・A・4.1×4.0 B・(A)・(A)・4.1×(4.0) ² B・(A)・(B)・(大)	10 10	灰褐色	胎土は粗い 須恵質 底端部高さ5幅9 cmの半円形の焼き むらあり 底～第三段下位
	14	朝顔A	¹ × ² 11.8 ³ 20.4 ⁴ 29.8 ⁵ 39.3 ⁶ 47.1	¹ 16.7 ² × ³ 15.5 ⁴ 1.1 ⁵ 1.0 ⁶ 0.8	¹ 3.1 ² × ³ 1.8 ⁴ 1.1 ⁵ 1.0 ⁶ 0.8	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B ³ 0.9・B ⁴ 0.9・B ⁵ 0.9・B	¹ BD・A・A・2.6×2.5 BD・A・A・(大) ² AD・E・A・6.0×5.0 AD・E・A・6.3×5.4 ³ BD・A・A・3.5×3.5	11 11	淡黄褐色 半淡灰褐 色	胎土はやや粗い 硬質 外面底端部高さ6 幅13cmの焼きむら あり 底～頸部
	15	3-D	¹ 44.0 ² 12.8 ³ (21.7) ⁴ 30.9	¹ 16.0 ² (28.4) ³ 0.9 ⁴ 0.8 ⁵ 0.8	¹ 1.9 ² 0.7 ³ 0.9 ⁴ 0.8 ⁵ 0.8	C	¹ 1.1・B ² — ³ 1.0・B	¹ B・A・A・4.8×5.4 B・A(E)・A・5.0×5.0 ² B・A・A・6.4×8.0	10 10	淡赤褐色	胎土は細かい 底～口縁 底端部外面一部横 ナデ

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-6 J	16	3-C ₂	¹ × ² 12.2 ³ 21.2	¹ 18.0 ² ×	¹ 2.0 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.1・B ² 1.1・B	¹ A・A・A・4.0×(3.5) B・A・A・3.7×3.3 ² B・A・B・(大)	12 12	淡赤褐色	胎土は粗い 外面高さ7幅10cm の焼きむらあり 底～第三段中位
	17	3-C ₂	¹ × ² 12.0 ³ (21.0)	¹ 16.2 ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.0・B ² ×	¹ D・A・(A)・(中) B・(A)・(A)・(中) ² B・(A)・(A)・(大)	9 9	㍲淡黄褐色 ㍲淡橙褐色 ㍲灰褐色内面 ㍲小豆色 ㍲灰褐色	胎土はやや粗い 半須恵質 底～第三段下位 外面底端部一部横 ナデ
	18	3-C ₂	¹ × ² 12.3 ³ 20.8	¹ 15.3 ² ×	¹ 2.1 ² × ³ 0.7 ⁴ 0.7	×	¹ 1.0・D ² 1.0・B	¹ A・A・A・(4.5)×- A・(A)・A・(中) ² (A)・(A)・(B)・(大)	9 9	橙褐色 外面一部 黒褐色	胎土は粗い 外面の黒褐色は須 恵質化したものか 底～第三段下位
	19	3-C ₂	¹ × ² 11.9 ³ 21.0 ⁴ 30.5	¹ 15.7 ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 1.1 ⁴ 0.8 ⁵ 0.7	×	¹ 1.0・D ² 1.0・D ³ 1.2・D	¹ B・A・A・4.5×4.5 B・A・A・4.8×- ² D・A・A・(6.0×6.0) D・A・A・6.7×(6.7)	10 10	赤褐色 外面の一 部及び内 面黒褐色	胎土は粗い 半須恵質か 底部～第四段下位
	20	3-A	¹ × ² 12.2 ³ 20.5	¹ 15.6 ² ×	¹ 2.2 ² 1.0 ³ 0.9	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B	¹ B・A・B・6.5×(7.0) B・A・B・(中or大) ² B・(A)・(A)・(中)	9 9	地は淡黄 色全体に 淡黄灰褐 色	胎土は粗い 半須恵質 底～第三段下位 外面底端部一部横 ナデ
	21	3-C ₁	¹ × ² 12.0 ³ 21.0	¹ 15.5 ² ×	¹ 1.9 ² 0.8 ³ 0.8	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B	¹ A・A・AorC・3.2×3.6 A・A・A・(小) ² B・A・B・(7.0×7.0)	9 9	赤褐色と 淡黄色の しもふり	胎土は粗い 底～第三段下位
1-6 C	22	2-A	¹ × ² 14.0 ³ 26.1	¹ 19.0 ² × ³ 21.8	¹ 2.1 ² × ³ 0.8 ⁴ 0.7	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B	¹ B・A・B・9.3×9.0 B・A・B・(大)	9 9	地淡赤褐 色赤紫が かった灰 褐色 内面は全 面黒褐色	胎土は細かい 半須恵質 底～第三段中位 底端部幅3cmの横 ナデ
	23	3-B ₁	¹ × ² 12.0 ³ 20.5	¹ 16.6 ² × ³ 18.5	¹ 2.3 ² × ³ 1.5	×	¹ 1.0・A ² 1.0・A	¹ D・A・A・4.5×3.9 D・A・A・3.8×4.0 ² A・(A)・B・(6.5×7.0) D・(A)・(B)・(大)	12	赤褐色	胎土はやや粗く5 ～8mm大の礫を含 む 底～第三段下位
	24	2-A	¹ × ² 12.2 ³ 26.2	¹ 15.7 ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 1.1	×	¹ 1.2・B ² 1.3・B	¹ B・A・B・8.0×6.8 B・A・B・(7.2×7.0)	9 9	地淡黄色 外面の㍲ 灰褐色	胎土は細かい 半須恵質 底～第三段下位 底端部横ナデ

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-6 C	25	3-A	¹ × ² 12.0 ³ 21.2	¹ 15.4 ² ×	¹ 1.8 ² × ³ 1.0 ⁴ 0.8	×	¹ 1.1・B ² 1.0・B	¹ B・F・A・5.8×9.3 B・A・A・5.8×6.8 ² B・A・A・—×6.0	10 9	全面灰褐色	胎土はやや粗く 5 ~8mm大の礫を含む 須恵質 底面外部に 3.5× 12cm半円形の焼き むらあり 底~第三段中位
	26	朝顔C	¹ × ² 12.0 ³ 21.2	¹ (14.9) ² × ³ 1.2 ⁴ 0.8	¹ 1.8 ² × ³ 1.2 ⁴ 0.8	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B	¹ A・A・B・(5.5×5.5)	7 7	外面薄茶 褐色 内面はよ ごれた茶 褐色	全体の器形は不詳 胎土は粗く 5~8 mm内の礫を含む 底~第三段下位 第三段に縦の刷毛 (二次調整)
	27-28	朝顔B	¹ (84) ² 11.0 ³ 23.0 ⁴ (35.5)	¹ 14.8 ² (42) ³ × ⁴ 1.2	¹ 1.8 ² 0.4 ³ 1.0 ⁴ 1.2	×	¹ 1.1・B ² 1.0・B	¹ A・A・A・5.0×5.8 A・A・A・5.0×6.0 ² B・A・C・(6×7) B・(A)・(C)・(大)	7 7	地淡黄色 内面全面 灰褐色 外面の半 赤紫がか った灰褐 色	胎土は細かい 半須恵質朝顔形埴 輪、底面外部は高 さ 4.5×幅12cm半 円形に欠落し焼き むらの状況を示す 底~第三段上端 および花状部
	29	2-C	¹ × ² 12.5 ³ 22.0 ⁴ ×	¹ 14.4 ² ×	¹ 2.0 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.2・B ² 1.1・B	¹ A・A・A・4.6×5.9 A・A・A・(中)	7 7	大部分灰 褐色一部 淡黄色内 面灰褐色	胎土はやや細かい 須恵質 底~第三段下位
	30	3-A	¹ × ² 12.2 ³ ×	¹ 18.4 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 0.8	×	¹ 1.0・B	¹ B・A・B・—×6.5 B・—・B・(中~大)	9 9	赤褐色 外面一部 淡黄色	胎土は細かい 底~第二段中位
1-6 E	31	朝顔A	¹ × ² 12.0 ³ 20.5	¹ 16.6 ² ×	¹ 2.8 ² × ³ 1.1 ⁴ ×	×	¹ 1.0・B ² 1.2・B	¹ B・A・A・3.6×3.0 B・(A)・(A)・(小) ² (A)・(A)・(B)・(中)	9 9	地は若干 赤味がか った淡黄 色 外面の半 灰褐色	胎土は細かいが部 分的に 5mm大の礫 を含む 半須恵質 底~第三段下位 外面底端部横ナデ 第二段刻みあり
	32	2-C	¹ × ² 11.5 ³ 19.7	¹ 13.2 ² ×	¹ 2.2 ² × ³ 1.2	×	¹ 1.1・B ² ×	¹ A・A・A・(中) A・A・A・(中)	7 7	地は淡黄 色 全体に灰 黒褐色	胎土はやや粗い 須恵質底端部高さ 4.9幅9.5cmの焼き むらあり 底~第二段上端部
	33	3-E	¹ × ² 12.3	¹ (14.3)	¹ 2.3 ² × ³ 0.6	×	¹ 1.2・B	¹ B・A・B・5.0×5.5	10 10	地淡黄色 と灰褐色	胎土は粗い 半須恵質 底~第二段中位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形 状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-6A	34	3-A	¹ × ² 12.0	¹ 15.7 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.0・B ²	¹ B・A・A・(6.0×7.0)	10 7	地淡黄色 内外面大 部分が灰 褐色	胎土はやや粗い 須恵質 底端部に高さ 3.5 幅11cm半円形の焼 きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
2-5B	35	3-F	¹ × ² 11.2	¹ 14.5 ² ×	¹ 2.1 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.3・B	¹ B・A・(B)・(大)	8 8	地淡黄色 外面一部 灰褐色及 び小豆色	胎土は粗く 3～5 mm大の礫を多量に 含む 半須恵質 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
	36	2-D	¹ × ² 12.0	¹ 13.1 ² ×	¹ 1.4 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.0・B	¹ D・A・B・(中～大)	11	灰褐色	胎土はやや粗い 須恵質 外面底端部高さ 1 .7幅 8 cmの焼きむ らあり 底～第二段下位
	37	2-C	¹ 34.8 ² 11.0 ³ 20.3	¹ 13.4 ² 23.3	¹ 2.1 ² 0.5 ³ 0.8	D	¹ 1.1・A ² 1.0・B	¹ A・A・C・6.0×6.5 A・A・C・(中～大)	6 6	地は淡黄 色、外面 半は灰褐 色、内面 淡橙色	胎土はやや細かい 半須恵質 底～口縁
	38	2-D	¹ × ² 12.5	¹ 12.5 ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.2・D	¹ D・F・B・ー×7.0 D・(A)・B・(大)	9	よごれた 淡黄色	胎土はやや細かい 底～第二段中位
	39	2-D	¹ × ² 11.4	¹ 11.3 ² ×	¹ 1.7 ² × ³ 0.8	×	¹ 1.2・D	¹ D・A・ー・ー×6.5 D・A・ー・(大)	12	オレンジ 色と灰褐 色が交互	胎土は細かいが5 mm大の礫を含む 須恵質 底～第二段上位
	40	2-D	¹ × ² 11.4	¹ 13.0 ² ×	¹ 1.8 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.1・D	¹ D・逆B・(A)・ー×5.0	10	地は淡黄 色、大部 分が灰褐 色、一部 淡橙色	胎土は粗く小礫を 多量に含む 半須恵質 外面底端部に高さ 6幅11cm山形の焼 きむらあり 底～第二段中位
	41	2-D	¹ × ² 12.0 ³ 20.5	¹ 11.9 ² ×	¹ 1.4 ² × ³ 0.8	×	¹ 0.9・D ² 1.1・D	¹ D・A・A・6.0×6.0	10	地は淡黄 色、大部 分は小豆 色がかっ た灰褐色	胎土は細かいが5 mm大の礫を含む 半須恵質 底～第三段下位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-5 B	42	2-D	¹ × ² 10.7	¹ (11.5) ² ×	¹ 1.7 ² × ³ 0.8	×	¹ 1.1・B	¹ D・ー・ー・(大)	11	内面 淡黄色 外面 灰褐色	胎土は細かい 半須恵質 外面底端部高さ 4 .5幅 9 cm 半円形の 焼きむらあり 底～第二段下位
2-5 C	43	朝顔B	¹ 残高16.5 ² 39.5	¹ × ² 39.5	¹ × ² 0.6	×	¹ ×	¹ —————	7 7	小豆色が かった淡 灰褐色	胎土は細かい 須恵質 5 mm ぐらいの礫を 含む 花状部
	44	3-B ₂	¹ × ² 11.7	¹ 14.6 ² ×	¹ 1.9 ² × ³ 0.9	×	¹ 0.8・B	¹ A・(A)・(A)・ー	9	$\frac{1}{2}$ 橙褐色 $\frac{1}{2}$ 淡黄色 内面は橙 褐色	胎土はやや細かい 半須恵質 外面底端部不整形 の焼きむらあり 底部～第一段下位
	45	2-D	¹ × ² 11.0	¹ 11.3 ² ×	¹ 2.0 ² × ³ 0.7	×	¹ 1.0・B	¹ D・A・B・ー×6.0 (D)・(A)・(A)・(大)	11	地は淡黄 色 $\frac{1}{2}$ 赤褐色 $\frac{1}{2}$ 灰褐色 内面小豆 色	胎土はやや粗い 半須恵質 外面基部の $\frac{1}{2}$ が剥 離している 第二段透孔間に× の窯印あり 外面底端部横ナデ 底部～第二段中位
	46	2-D	¹ × ² 11.0	¹ (11.0) ² ×	¹ 1.6 ² ×	×	¹ 1.3・D	¹ (D)・(A)・(B)・(中)	—	淡黄色に 赤褐色の しもふり	胎土はやや粗い 表面の剥離がはげ しく実測不能 底部～第二段下位
	47	2-B	¹ × ² 13.5	¹ 15.4 ² ×	¹ 2.9 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.0・B	¹ —————	6	外面 灰黒褐色 内面 黒褐色	胎土は細かい 半須恵質 底部～第二段下位
	48	2-D	¹ × ² 10.0	¹ 11.2 ² ×	¹ 1.5 ² × ³ 0.7	×	¹ 1.2・B	¹ D・A・(A)・(中～大) D・A・(A)・(中～大)	9	淡茶褐色	胎土はやや粗い 第二段×窯印あり 底部～第二段下位
2-5 D	49	2-D	¹ × ² 10.5 ³ (19.0)	¹ 12.3 ² ×	¹ 1.6 ² × ³ 0.7	×	¹ 1.0・B	¹ D・A・(E)・(A)・(大) D・A・(E)・A・(大)	12	地は淡黄 色で部分 的に橙褐 色及び灰 褐色 内面は全 部橙褐色	胎土は粗い 半須恵質 第二段×窯印あり 底～第二段上位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-5D	50	2-D	¹ × ² 11.4	¹ 11.4 ² ×	¹ 1.8 ² × ³ 0.8	×	¹ 1.1・D	¹ —————	10	地は淡黄色赤褐色のしもふり	胎土はやや粗い 底～第二段下位
	51	3-A	¹ × ² 12.5	¹ 15.5 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 1.0	×	¹ ×	¹ B・ーB・ー・(中～大)	9 9	地は淡黄色 大部分は小豆色をおびた灰褐色	胎土は粗く5～8mm大の礫を多量に含む 須恵質 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
	52	2-B	¹ × ² 14.0	¹ 15.0 ² ×	¹ 1.7 ² × ³ 0.9	×	¹ ×	¹ A・A・(C)・(大) A・ー・ー・ー	7	地は淡茶褐色	胎土は細かい 底端部高さ5幅12cmの半円形の焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
	53	3-C ₂	¹ × ² 11.8	¹ 15.5 ² ×	¹ 2.0 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.2・B	¹ B・A・B・(小) B・A・B・(小)	9 9	地は橙褐色 色は黒味がかつた小豆色	胎土は粗い 半須恵質 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
	54	2-C	¹ × ² 12.6	¹ 13.0 ² ×	¹ 1.8 ² × ³ 1.1	×	¹ 1.1・B	¹ A・A・B・(中) A・A・B・(中)	7 7	地は淡黄色 色は淡赤褐色 外面第二段の一部 灰褐色	胎土は粗い 半須恵質 底～第二段中位
	55	朝顔A	¹ × ² 13.0 ³ 21.3 ⁴ 30.7 ⁵ 39.7 頸下45	¹ 16.2 ² × ³ (13.0)	¹ 2.8 ² × ³ 1.2 ⁴ 0.8 ⁵ 0.8	×	¹ 1.1・B ² 0.9・B ³ 1.0・B	¹ B・(A)・(A)・(4.3×3.3) A・(A)・(A)・(小) ² A・(A)・A・(中～大) A・A・(A)・(中～大) ³ B・A・A・3.4×4.1	10 8	外面黒褐色 内面黒褐色 外面はしもふり	胎土は粗い 半須恵質 礫が多量に含んでいる 底部～朝顔の頸部
2 ト レ	56	3-C ₁	¹ × ² 13.0 ³ 21.5	¹ 17.0 ² ×	¹ 2.8 ² × ³ 1.0 ⁴ 1.0	×	¹ 1.2・B ² 1.1・B	¹ B・A・A・4×3.9 B・A・A・4×(4.0) ² B・(A)・(B)・(中～大)	10 10	淡茶褐色	胎土は細かい 外面高さ5.7幅12cmの半円形の焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第三段下位
2-3D	57	3-C ₂	¹ × ² 12.3 ³ 21.7	¹ 15.2 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 1.2	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B	¹ A・(A)・A・(4.0×3.2)	9 9	淡赤褐色	胎土はやや細かい 礫を含む 外面底端部横ナデ 底～第三段下位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-3D	58	3-C ₁	¹ ×	¹ 17.0	¹ 2.9	×	¹ 0.9・B ² 0.8・B	¹ B・A・A・4.1×3.9 B・A・A・(小～中)	9	淡黄褐色 と赤褐色 のしもふり	胎土はやや細かい 外面底端部横ナデ 底～第三段下位
			² 12.0	² ×	² ×				10		
			³ 19.5	³	³ 1.2						
	59	3-C ₂	¹ ×	¹ 15.3	¹ 1.7	×	¹ 1.0・B	¹ A・―・(B)・―	10	淡赤褐色	胎土はやや細かい 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
			² 13.9	² ×	² ×				9		
				³ ×	³ ×						
	60	3-C ₂	¹ ×	¹ 15.8	¹ 1.9	×		¹ B・(A)・(B)・(小)	10	淡黄色	胎土は細かい 半須恵質 全面高さ11幅15cm の半円状の焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
			² 12.8	² ×	² ×				11		
				³ ×	³ ×						
	61	2-A	¹ ×	¹ 16.1	¹ 2.7	×	¹ 1.0・B	¹ B・(A)・(B)・(大)	10	地は淡黄色 灰褐色	胎土は細かい 半須恵質 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
			² 13.7	² ×	² ×				14		
				³ ×	³ ×						
	62	3-A	¹ ×	¹ 15.8	¹ 2.2	×	¹ 1.1・B	¹ B・(A)・(A)・(中) B・(A)・(B)・(中)	11	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 小礫を含む 底部に高さ2.5幅 2.5cm山形の焼き むらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
			² 12.2	² ×	² ×				11		
				³ ×	³ ×						
	63	2-B	¹ ×	¹ ×	¹ ×	×	¹ ×	¹ A・A・C・(大)	6	よごれた 赤褐色	胎土はやや細かい 底～第二段下位
					² ×						
					³ 0.8						
2-3C	64	3-C ₁	¹ ×	¹ 15.3	¹ 2.7	×	¹ 1.0・B ² 1.0・B ³ 1.1・B	¹ B・A・A・3.0×3.5 (B)・(A)・(A)・(小) ² B・(A)・(A)・(大)	11	赤褐色	胎土はやや細かい 第二段に斜めの刻 み目 外面底端部横ナデ 底～第四段下位
			² 11.7	² ×	² ×				9		
			³ 21.0		³ 1.0 ⁴ 0.8						
	65	3-B ₂	¹ ×	¹ 16.2	¹ 2.5	×	¹ 1.1・A	¹ A・(A)・(B)・(小)	10	淡赤褐色	胎土は細かい 外面に5mmの礫あり 外面に高さ10幅10 cmの半円状の焼き むらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
			² 12.3	² ×	² ×						
				³ ×	³ ×						

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-3C	66	2-B	¹ 40.9 ² 13.4 ³ 25.5	¹ 16.3 ² 26.5	¹ 1.6 ² 0.6 ³ 0.8	E	¹ 1.0・B ² 1.0・B	¹ A・A・C・(大) × ² A・A・B・2.9×3.1	6 6	淡黄色と 赤褐色と 相半内面 は淡黄色	胎土は細かい 半須恵質 口縁部に小礫あり 外面底端部横ナデ 底～口縁
	67	3-B ₂	¹ 39.7 ² 11.8 ³ 20.1 ⁴ 30.4	¹ 16.4 ² 25.4	¹ 3.0 ² 0.7 ³ 1.1 ⁴ 0.5	D	¹ 0.9・A ² 0.9・A ³ 0.9・A	¹ D・A・A・3.1×3.4 × ² D・A・A・5.3×6.5 (D)・(A)・(A)・(中～大)	12 10	淡赤褐色	胎土はやや粗い 硬質 外面底端部横ナデ 底～口縁
	68	2-A	¹ × ² 14.3 ³ 26.3	¹ 17.1 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 0.9	×	¹ 0.9・B ² 1.1・B	¹ B・(A)・(A)・(大) B・(A)・(A)・(大)	11 8	淡黄色	胎土は細かい 底～第三段中位
	69	3-B ₁	¹ × ² 12.3	¹ 15.7 ² ×	¹ 2.7 ² × ³ ×	×	¹ 1.2・A	¹ D・――	測定不能	赤褐色	胎土はやや粗い 特に外面の摩滅が はげしい 底～第二段下位
	70	2-B	¹ × ² 11.1	¹ 13.2 ² ×	¹ 1.7 ² × ³ ×	×	¹ 1.0・A	¹ A・(A)・(A)・(中)	6 6	淡黄色の 地に赤褐 色のしも ふり状を 呈するも の	胎土は細かい 小礫を含む 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
	71	3-C ₂	¹ × ² 11.6	¹ 15.6 ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 0.9	×	¹ 0.9・B	¹ ――	11 8	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 小礫を含む 底～第二段下位
	72	2-B	¹ × ² 11.3	¹ 12.9 ² ×	¹ 1.8 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.0・D	¹ D・(A)・(A)・(大) D・(A)・(A)・(大)	7	淡黄色の 地に赤褐 色のしも ふり状	胎土は粗い 底～第二段中位
	73	3-A	¹ × ² 13.9	¹ 15.4 ² ×	¹ 2.2 ² × ³ 0.7	×	¹ 1.0・B	¹ B・(A)・(A)・(大) B・――	10 10	淡赤褐色	胎土は細かい 小礫を含む 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
	74	2-B	¹ × ² 13.8	¹ (14.5) ² ×	¹ 2.1 ² × ³ 0.9	×	¹ 0.9・D	¹ A・(A)・(C)・(大)	6	淡赤褐色	胎土は細かい 底～第二段下位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-3C	75	2-A	¹ 42.8 ² 13.4 ³ 25.6	¹ 17.1 ² 29.8	¹ 2.7 ² 0.7 ³ 0.9	E	¹ 0.8・B ² 0.9・B	¹ B・A・B・一(大) C・A・B・(6×6)	10 12	地は下半 部が灰褐色 上半部が 淡赤色 内面は灰 褐色	胎土は細かい 須恵質 底～口縁
	76	3-E	¹ 40.3 ² 12.4 ³ 20.9	¹ 14.7 ² 20.9	¹ 2.1 ² 0.5 ³ 1.2 ⁴ 0.7	A	¹ × ² 0.9・B ³ 0.7・B	¹ A・A・A・5.5×4.3 × ² A・A・B・6.0×6.9 (A)・(A)・B・(中)	12 11	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 底部に高さ3幅5cm の焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～口縁
2-3A	77										細片の為復元不可
	78										細片の為復元不可
	79	2-B	¹ 42.9 ² 13.9 ³ 26.2	¹ 15.5 ² 27.6	¹ 2.0 ² 0.7 ³ 1.0	E	¹ 0.9・(B) ² 0.9・B	¹ A・A・C・7.0×7.9 A・A・C・6.5×(7.3) ² A・(A)・B・(2.0×2.7)	7 7	淡黄色	胎土は細かい 半須恵質 底部に高さ4幅8cm の半円の黒の焼き むらあり 底～口縁
	80	2-B	¹ × ² (11.5)	¹ 14.6 ² ×	¹ 2.0 ² × ³ ×	×	×	¹ —・—・—・—	7	橙褐色	胎土は細かい 底部に高さ2幅5.5 cmの淡黄色の焼き むらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
	81	3-A	¹ × ² 14.0	¹ 15.2 ² ×	¹ 1.7 ² ×	×	¹ 1.3・B ² 1.0・B	¹ A・(A)・(B)・(中)	12 13	赤褐色 一部黒褐色	胎土はやや細かい 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
	82	2-C	¹ 36.5 ² 12.3 ³ 21.7	¹ 13.1 ² 25.9	¹ 1.9 ² 0.5 ³ 0.9	D	¹ 1.1・B ² 1.2・B	¹ A・A・A・5.5×6.2 A・(A)・A・(5.2×5.6)	6 7	淡黄色	胎土は細かい 硬質 底～一部口縁
	83	3-B ₁	¹ × ² 11.9 ³ 20.5	¹ 16.0 ² ×	¹ 1.7 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.4・B ² 0.8・B	¹ D・A・B・4.5×5.2 D・—・—・—	8	赤褐色と 淡黄色の しもふり	胎土はやや粗い 底部に高さ7.3幅9 cmの半円状の焼き むらあり 底～第三段下位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-3A	84	3-A	¹ 41.7 ² 11.6 ³ 20.9 ⁴ 30.5	¹ 15.8 ² 27.2 ³ 0.9 ⁴ ×	¹ 2.0 ² 0.7 ³ 0.7 ⁴ 0.7	A	¹ 0.9・B ² 1.0・B ³ 1.0・B	¹ A・A・A・5.8×6.9 A・A・A・5.6×6.0 ² A・A・A・7.8×8.9 A・A・A・(6.4×7.7)	8 8	赤褐色	胎土は細かい 第二段に刻み目あり 外面底端部横ナデ 底～口縁
	85	3-C ₂	¹ ×	¹ 14.9 ² ×	¹ 2.2 ² 0.7	×	¹ 1.0・B	¹ B・―・(A)・― ×	9 9	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 小礫あり、底部高 さ5幅10cmの焼き むらあり 外面底端部横ナデ 底～第三段下位
	86	3-C ₂	¹ ×	¹ 14.6 ² ×	¹ 2.6 ² 1.2	×	¹ 1.2・B	¹ ―・―・―・―	9 9	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 底部に高さ7幅10 cmの焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
1-3E	87	2-B	¹ ×	¹ 16.5 ² ×	¹ 2.2 ² 0.9	×	¹ 1.3・B	¹ A・―・―・―	10 10	赤褐色	胎土は細かい 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
	88	3-E	¹ ×	¹ 16.0 ² (12.0) ² ×	¹ 2.5 ² 1.0	×		¹ ―・―・―・―	10 10	㊦灰褐色 ㊦小豆色 ㊦淡黄色 内面㊦灰 褐色、㊦ 小豆色	胎土は細かい 須恵質 内面に大礫あり 外面底端部横ナデ 底～第二段下位
	89	3-F	¹ ×	¹ 17.8 ² ×	¹ 2.0 ² ×	×	¹ 1.2・B ² 0.8・B	¹ D・(A)・A・(中) ×	9 10	淡橙褐色	胎土は細かい 底～第三段下位
	90	3-B ₂	¹ ×	¹ 16.5 ² ×	¹ 2.8 ² ×	×	¹ 0.9・B	¹ ―・―・―・―	12	淡橙色	胎土はやや細かい 3mmの礫を多量に 含む 外面底端部横ナデ 底～第二段上位
	91	朝顔C	¹ 55.0 ² 13.0 ³ 21.8 ⁴ 31.8 ⁵ 39.5	¹ 14.1 ² 38.0 ³ 14.5	¹ 2.1 ² 0.7 ³ 1.0 ⁴ 0.9 ⁵ 0.9		¹ 0.8・B ² 1.0・B ³ 1.0・B ⁴ 1.4・B ⁵ 0.9・E	¹ A・(A)・(B)・(大)	7 8	外面薄茶 褐色 内面はよ ごれた茶 褐色	全体の器形は不詳 胎土は粗く5～8 mm大の礫を含む 底～口縁まで

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-3E	92	3-B ₁	¹ × ² 12.0 ³ 20.7	¹ (15.0) ² ×	¹ 1.9 ² × ³ 1.1 ⁴ 0.8	×	¹ 1.2・A ² 1.0・A	¹ D・A・A・3.4×2.9 D・(A)・(A)・(A)	10	橙褐色	胎土はやや細かい 小礫を含む 底～第三段下位
	93	3-C ₂	¹ × ² 12.4 ³ 20.3	¹ 17.2 ² ×	¹ 1.6 ² 0.7 ³ 0.8	×	¹ 0.9・B ² 1.1・B	¹ × × ² B・(A)・B・(中)	10 9	黒褐色と 橙褐色の 混一部橙 褐色	胎土は細かい 須恵質 底～第三段中位
1-3D	94	朝顔A	¹ × ² (11.5)	¹ 15.6 ² ×	¹ 2.5 ² × ³ 0.8	×	¹ ×	¹ - - - - -	10 9	黒褐色	胎土は細かい 須恵質 底～第二段下位
	95	3-C ₁	¹ × ² 11.9	¹ 16.7 ² ×	¹ 2.5 ² 1.1 ³ ×	×	¹ 1.0・B	¹ - - - - -	9 9	灰褐色と 淡橙色の 相半	胎土は細かい 須恵質 多量の礫を含む 底部高さ3幅5cm の焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
	96	2-C	¹ 37.0 ² 13.3 ³ 22.9	¹ 12.2 ² 25.3	¹ 1.6 ² 0.6 ³ 1.1 ⁴ 1.0	D	¹ 0.9・D ² 0.7・D	¹ D・逆C・C・5.0×5.6 D・逆C・C・5.0×5.8	7 7	淡黄色と 灰褐色の 相半	胎土は細かい 半須恵質 底～口縁
1-3C	97	3-E	¹ (38.7) ² 12.5 ³ × ⁴ 28.9	¹ 16.2 ² 22.0	¹ 2.1 ² 0.7 ³ 1.0 ⁴ 0.9 ⁵ 0.5		¹ × ² × ³ 1.2・B	¹ B・(A)・(A)・(中) × ² A・(A)・(A)・(大)	10 9	灰褐色 部分的に 淡橙褐色	胎土は細かい 須恵質 第三段中位～口縁 底～第二段上位
	98	2-C	¹ ×	¹ ×	¹ 1.6 ² ×	×	¹ ×	¹ ×	10	淡赤褐色	胎土は細かい 基部のみ
	99	(3-B ₁)	¹ ×	¹ ×	¹ 2.5 ² ×	×	¹ ×	¹ ×	11	地淡黄色	胎土は粗い 外面黒色吸炭 (黒斑?) 基部の一部
	100	3-E	¹ ×	¹ 16.6 ² ×	¹ 2.1 ² ×	×	¹ ×	¹ ×	8 11	淡黄色	胎土は細かい 半須恵質 底～第一段上位

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-3B	101	3-B ₁	¹ (43.2) ² (12.0) ³ (21.0) ⁴ (30.3)	¹ × ² 27.0	¹ × ² 0.7	B	¹ 1.0・B ² 0.9・B ³ 1.1・B	¹ D・A・A・4.2×4.4 D・(A)・(A)・(中) ² D・A・A・6.4×7.4 D・A・A・6.6×7.7	8 9	淡橙色と 赤味帯び た灰褐色	胎土は細かい 二段目三本の刻み 目あり 須恵質 器高数値は第一段 高を12cmと推定し たものである 一段上位～口縁
	102	朝顔A	¹ × ² 12.2 ³ 20.2	¹ 16.6 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.1・B ² 1.1・B	¹ A・A・A・3.1×(3.5) A・(A)・A・(2.2×3.0)	10 8	≒灰褐色 ≒淡黄色	胎土は細かい 須恵質 底部に高さ5幅12 cmの半円焼きむら あり 外面底端部横ナデ 底～第三段中位
	103	3-C ₁	¹ ×	¹ 15.2 ² ×	¹ 2.2 ² ×	×	¹ ×	¹ ×	10 10	赤褐色	胎土はやや粗い 底～第一段凸帯下 まで 外面底端部横ナデ
	104	2-C	¹ (39.8) ² 12.2 ³ 22.0	¹ 12.5 ² 27.5	¹ 1.9 ² 0.5 ³ 1.0	D	¹ 1.0・B ² 1.2・B	¹ A・(A)・(A)・(中) B・(A)・(A)・(中)	7 9	淡黄色と 赤褐色	胎土は粗い 一部口縁 底～第三段中位
	105	3-A	¹ (45.5) ² 11.8 ³ 20.4 ⁴ 29.6	¹ 16.1 ² (28.4)	¹ 2.7 ² 0.7 ³ 1.0 ⁴ 1.0	A	¹ 1.0・B ² 0.8・B ³ 0.8・B	¹ A・A・B・5.5×6.5 D・(A)・B・(中) ² B・(A)・B・(大) (A)・(A)・(A)・(大)	11 10	灰褐色と 赤褐色の しもふり	胎土はやや細かい 須恵質 第二段に刻みをも つ 礫を多量に含む 一部口縁 底～第四段上位
	106	3-F	¹ 41.5 ² 12.5 ³ 20.8 ⁴ 30.4	¹ 14.3 ² 26.3	¹ 2.1 ² 0.7 ³ 1.0	A	¹ ×	¹ A・A・B・3.7×3.6 ×	9 10	底部は灰 褐色 赤褐色と 一部に黄 褐色	胎土は細かい 硬質 内面は赤褐色 底部に高さ4幅12 cmの焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～口縁
	107	3-F	¹ ×	¹ 14.7 ² ×	¹ 2.0 ² ×	×	¹ 1.1・B ² 1.2・B	¹ D・逆B・B・5.2×4.9 A・—・A・— ² D・—・B・—	11 10	淡赤褐色	胎土はやや粗い 裏に巻上げ痕あり 底～第三段下位
	108	3-B ₁	¹ 42.2 ² 12.3 ³ 12.6 ⁴ 30.2	¹ 15.6 ² 27.8	¹ 2.0 ² 0.6 ³ 0.7 ⁴ 0.8	B	¹ 1.2・A ² 1.1・A ³ 1.1・A	¹ D・A・A・4.5×4.6 D・A・B・4.6×4.4 ² D・A・B・7.0×8.0 D・A・A・6.5×7.9	10 10	赤褐色	胎土は細かい 外面底端部横ナデ 底～第四段上位、 一部口縁

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形 状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-3 B	109	朝顔A	¹ (71.8) ² (13.0) ³ (21.8) ⁴ (31.4) ⁵ (44.5) ⁶ 53.2	¹ × ² (50.0) ³ ⁴ ⁵ ⁶	¹ × ² 0.7 ³ 1.0 ⁴ 0.9 ⁵ 3.5 ⁶ 1.3		¹ × ² × ³ × ⁴ × ⁵ D 三角形を形成 ⁶ 0.9・B	¹ A・A・C・3.5×3.4 × ² × D・A・C・6.6×6.6 ³ A・A・B・4.4×4.1 D・A・B・3.2×3.9	9 10	淡黄褐色	胎土はやや粗い 一部底～口縁 器高数値は第一段 高を13cmと推定し たものである
1トレ	110	3-A	¹ (46.2) ² 12.5 ³ 21.3 ⁴ 31.0	¹ 15.8 ² 29.6	¹ 2.3 ² 0.8 ³ 1.1 ⁴ 1.0	A	¹ 1.0・B ² 0.9・B ³ 1.0・B	¹ A・(A)・B・(5.5×5.3) A・一・(B)・(中) ² D・A・A・8.5×7.5 D・一・一・一	11 9	淡黄色	胎土は細かい 半須恵質 底～口縁
1-4 C	111	3-B ₁	¹ × 	¹ × ² (23.6) 	¹ × ² 0.8 ³ ×	B	¹ × ² × ³ D	¹ ² A・A・(A)・(大)	10 10	淡橙色	胎土は細かい 小礫を含む 第三段上位～口縁
	112	3-B ₁	¹ × ² 11.7 ³ 20.3	¹ 17.0 ² × 	¹ 3.2 ² × ³ 1.2 ⁴ 1.0	×	¹ 1.0・A ² 1.2・A	¹ D・A・A・(3.4×3.2) D・C・A・3.7×4.5 ² A・一・一・一	9	赤褐色	胎土はやや粗い 底～第三段上位
	113	2-B	¹ 38.0 ² 9.7 ³ 21.3	¹ 15.1 ² 23.1	¹ 2.1 ² 0.3 ³ 1.0	E	¹ 0.9・B ² 1.0・B	¹ A・A・C・6×8 A・(A)・C・(大) ² A・一・B・一	6 6	淡黄色の 地に赤褐色のしも ふり状を呈するもの	胎土は細かい 底～口縁
2-4 B	114	3-C ₁	¹ 42.8 ² 12.9 ³ 20.3 ⁴ 29.5	¹ 16.5 ² 27.5	¹ 2.8 ² 0.8 ³ 1.4 ⁴ 0.7	A	¹ 1.1・B ² 1.1・B ³ 1.1・B	¹ A・一・(B)・(小) A・一・一・(小) ² A・A・A・6.9×7.9	9 9	灰褐色に 赤褐色のしもふり 状	胎土は細かい 須恵質 底～口縁
	115	2-A	¹ × ² 14.0 ³ 25.7	¹ 16.5 ² × 	¹ 2.0 ² × ³ 0.8	×	¹ 1.0・B	¹ B・(A)・B・(大) B・A・B・(6.5×6)	11 10	淡赤褐色 淡黄色の 相半	胎土は細かい 底～第三段下まで
	116	3-B ₂	¹ × ² 11.2 ³ 19.8	¹ 16.6 ² × 	¹ 2.7 ² × ³ 1.0	×	¹ 0.9・B ² 1.1・B	¹ D・A・A・4.5×4.2 D・A・B・4.0×(4.7) ² A・(A)・B・(大)	8	淡赤褐色	胎土はやや細かい 底～第三段上まで
1-4 B	117	2-B	¹ (35.5) ² (11.0) ³ (22.2)	¹ × ² 24.6	¹ × ² 0.5 ³ 0.6	E	¹ 0.9・B ² 1.1・B	¹ A・(A)・C・5.5×8	7 6	淡黄色	胎土は細かい 器高数値は第一段 高を11cmと推定し たものである 第一段中位～口縁

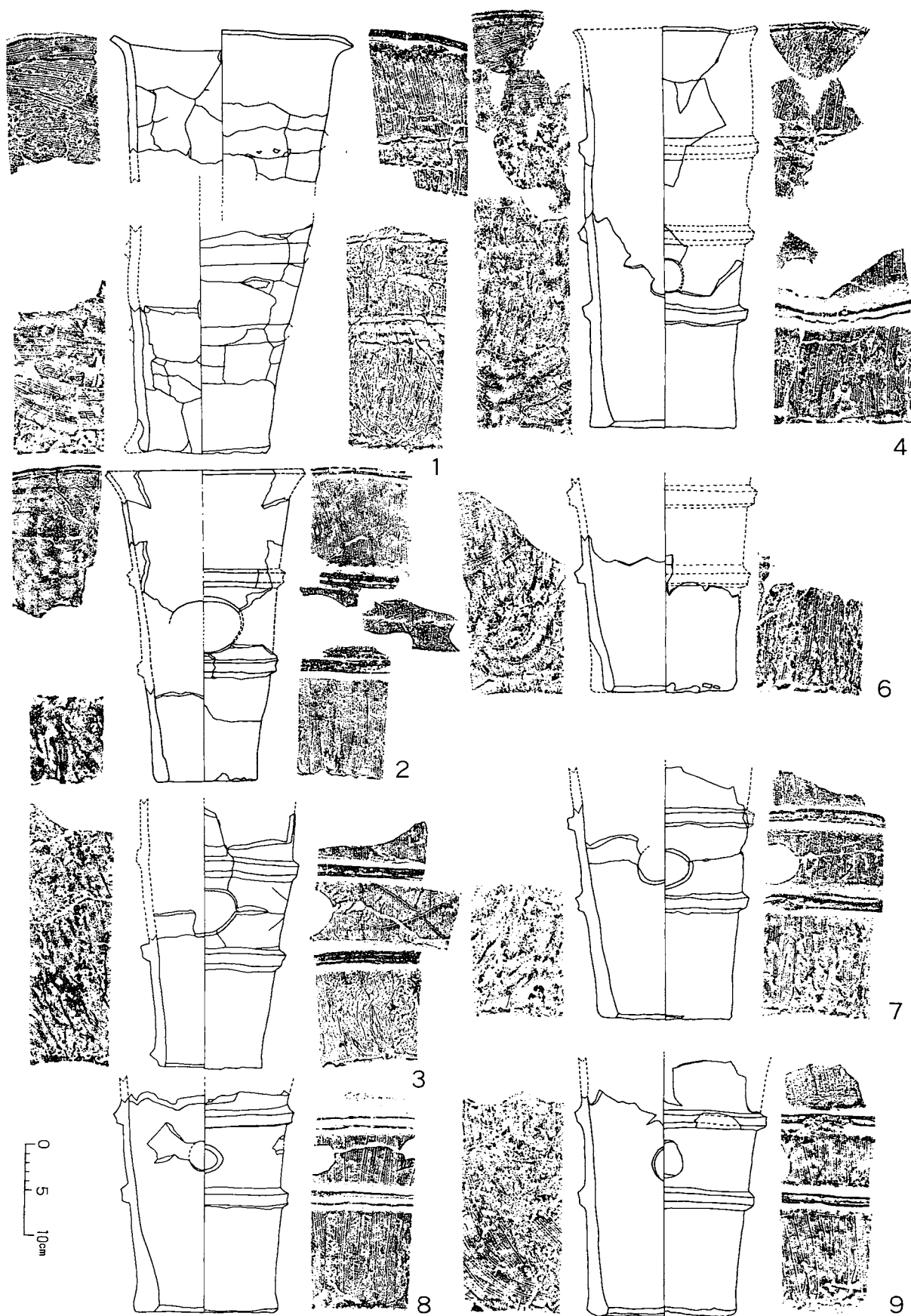
出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-4 B	118	3-C ₁	¹ × ² 11.8	¹ 16.8 ² ×	¹ 1.9 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.0・B	¹ B・-・-・(小)	11 11	淡赤褐色	胎土は細かい 半須恵質 5mm大の礫あり 外面底端部横ナデ 底～第二段中まで
	119	3-C ₁	¹ (46.1) ² 12.3 ³ 21.1 ⁴ ×	¹ 17.6 ² (27.8)	¹ 1.9 ² 0.9 ³ 1.0	A	¹ 1.0・B ² 1.1・B ³ ×	¹ A・A・C・4×4.5 A・A・(A)・(中) ² A・(A)・(B)・(中)	9 10	よごれた 淡黄色	胎土は粗い 5mm大礫を含んで いる 底～第三段中まで 口縁あり
	120	2-B	¹ 40.6 ² 14.1 ³ 26.3	¹ 13.1 ² 30.4	¹ 1.0 ² 0.5 ³ 0.9	E	¹ 0.9・B ² 1.0・B	¹ A・A・C・6.4×6.5 A・A・C・7.0×7.1 ² A・-・B・-	6 6	淡黄色の 地に赤褐 色のしも ふり状を 呈するも の	胎土は粗い 外面底端部横ナデ 底～口縁まで
	121	3-B ₁	¹ (46.8) ² 12.1 ³ 20.3 ⁴ 29.9	¹ 17.1 ² (27.5)	¹ 2.5 ² 0.8 ³ ×	B	¹ 0.9・D ² 1.1・D ³ 1.2・D	¹ D・A・A・4.3×4.2 D・A・A・(中) ² C・A・C・5.9×8.2 C・(A)・(B)・(大)	9 7	黒褐色へ 赤褐色の しもふり と赤褐色	胎土は細かい 半須恵質 裏は黒褐色と赤褐 色のしもふり 底～第四段上まで 口縁あり
	122	3-E	¹ × ² 11.6 ³ 19.6 ⁴ 29.0	¹ 12.5 ² ×	¹ 1.7 ² × ³ 1.0 ⁴ 1.4	×	¹ 1.1・B ² 1.0・B ³ 1.0・B	¹ A・逆B・A・4.5×5.1 A・逆D・A・4.4×4.5 ² A・(逆D)・(A)・(中) A・(逆D)・(B)・(中)	9 8	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 底部に高さ6幅8 cmの焼きむらあり 底～第四段下
	123	朝顔A	¹ (74.6) ² 12.0 ³ 20.6 ⁴ 30.2 ⁵ 39.0 ⁶ × ⁷ (56.6) ⁸ (62.8)	¹ 16.1 ² (44.2) ³ (15.4)	¹ 2.3 ² 0.7 ³ 0.9 ⁴ (0.9) ⁵ (0.8) ⁶ (0.8) ⁷ (1.4) ⁸ (2.2) ⁹ (0.9)		¹ 1.0・B ² 1.0・B ³ 1.1・B ⁴ 1.1・B ⁷ 1.0・B	¹ B・A・A・3.5×3.4 B・A・A・3.0×3.5 ² B・A・C・5.5×7.0	8 9	黒褐色 灰褐色	胎土は細かい 須恵質 3mm位の礫を含む 底～口縁
1-4 A	124	3-C ₁	¹ × ² 12.0 ³ 20.9 ⁴ ×	¹ 17.7 ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.8	×	¹ 1.0・D ² 0.8・D ³ 1.1・D	¹ A・A・A・4×5 ² A・(A)・-(- ×6)	10 9	赤褐色	胎土はやや細かい 外面底端部横ナデ 底～第四段下

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形 状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-4 A	125	3-B ₁	¹ 42.1 ² 11.8 ³ 19.5 ⁴ 28.8	¹ 14.9 ² 26.4	¹ 2.4 ² 0.8 ³ 1.1 ⁴ 1.2	B	¹ 0.8・A ² 1.0・A ³ 1.0・B	¹ A・A・B・3.8×4.7 D・A・B・(3.2)×3.7 ² B・(A)・(A)・(大) B・(A)・A・(5.0)×(6.5)	11 11	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 3mmの礫を含む 底～口縁まで
	126	2-B	¹ 41.4 ² 14.5 ³ 26.5	¹ (15.6) ² 27.0	¹ 2.2 ² 0.6 ³ 0.7	E	¹ 0.9・A ² 0.9・A	¹ A・A・C・6×8 -・-・-・-・-	7 7	淡黄色と 淡灰褐色 の相半 内面は赤 褐色	胎土は細かい 須恵質 底～口縁まで
	127	3-B ₁	¹ × ² 12.0 ³ 20.7	¹ 15.2 ² ×	¹ 2.5 ² × ³ 1.1	×	¹ 1.0・A ² 0.9・A	¹ B・A・A・4×(4) A・A・B・(4×3.5)	10	淡橙色	胎土はやや細かい 底～第三段中まで
	128	3-C ₂	¹ × ² 12.2 ³ ×	¹ 15.0 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 0.5	×	¹ 1.1・D	¹ A・(B)・-・-・(中) D・(B)・-・-・(中) ² A・-・-・-・-	10 9	淡赤褐色	胎土は粗い 底～第三段下まで
	129	3-C ₁	¹ × ² 11.5 ³ 20.7	¹ 16.0 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 1.0	×	¹ 0.9・B ² 0.9・B	¹ A・A・A・4.5×5 B・A・C・4×4.5 ² A・(A)・(B)・-	11 11	淡赤褐色 灰褐色の しもふり	胎土はやや粗い 半須恵質 第二段に刻み目あり 外面底端部横ナデ 底～第三段中まで
	130	2-B	¹ × ² ×	¹ 15.7 ² ×	¹ 1.4 ² × ³ 0.8	×	¹ ×	¹ A・-・-・-・(大) A・-・-・-・(大)	7 5	よごれた 淡黄色	胎土はやや細かい 底～第二段上まで
	131	朝顔A	¹ × ² 11.9 ³ 20.6	¹ 13.8 ² ×	¹ 1.6 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.9	×	¹ 1.0・B ² 1.1・B	¹ A・A・A・(4.2)×4.2 A・(A)・(A)・(中) ² A・(A)・-・-・- A・-・-・-・-	10 8	$\frac{1}{2}$ 灰褐色 $\frac{1}{2}$ 淡黄色	胎土は細かい 底部に高さ3幅10 cmの焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第三段上まで
	132	2-B	¹ × ² 14.2 ³ 26.7	¹ 16.9 ² ×	¹ 2.5 ² × ³ 0.9	×	¹ 0.9・B ² 0.8・B	¹ A・A・C・6.2×7.5 A・A・C・(5.5)×(7.3)	7 7	$\frac{1}{2}$ 淡黄色 $\frac{1}{2}$ 赤褐色	胎土は細かい 半須恵質 外面底端部横ナデ 底～第三段上まで
	133	2-B	¹ × ² 14.3 ³ 26.0	¹ 14.3 ² ×	¹ 1.5 ² × ³ 0.8	×	¹ 1.0・D ² 1.1・D	¹ A・A・C・6.5×8.9 A・A・C・6.3×8.7	7 6	よごれた 淡黄色	胎土はやや粗い 底～第三段上まで

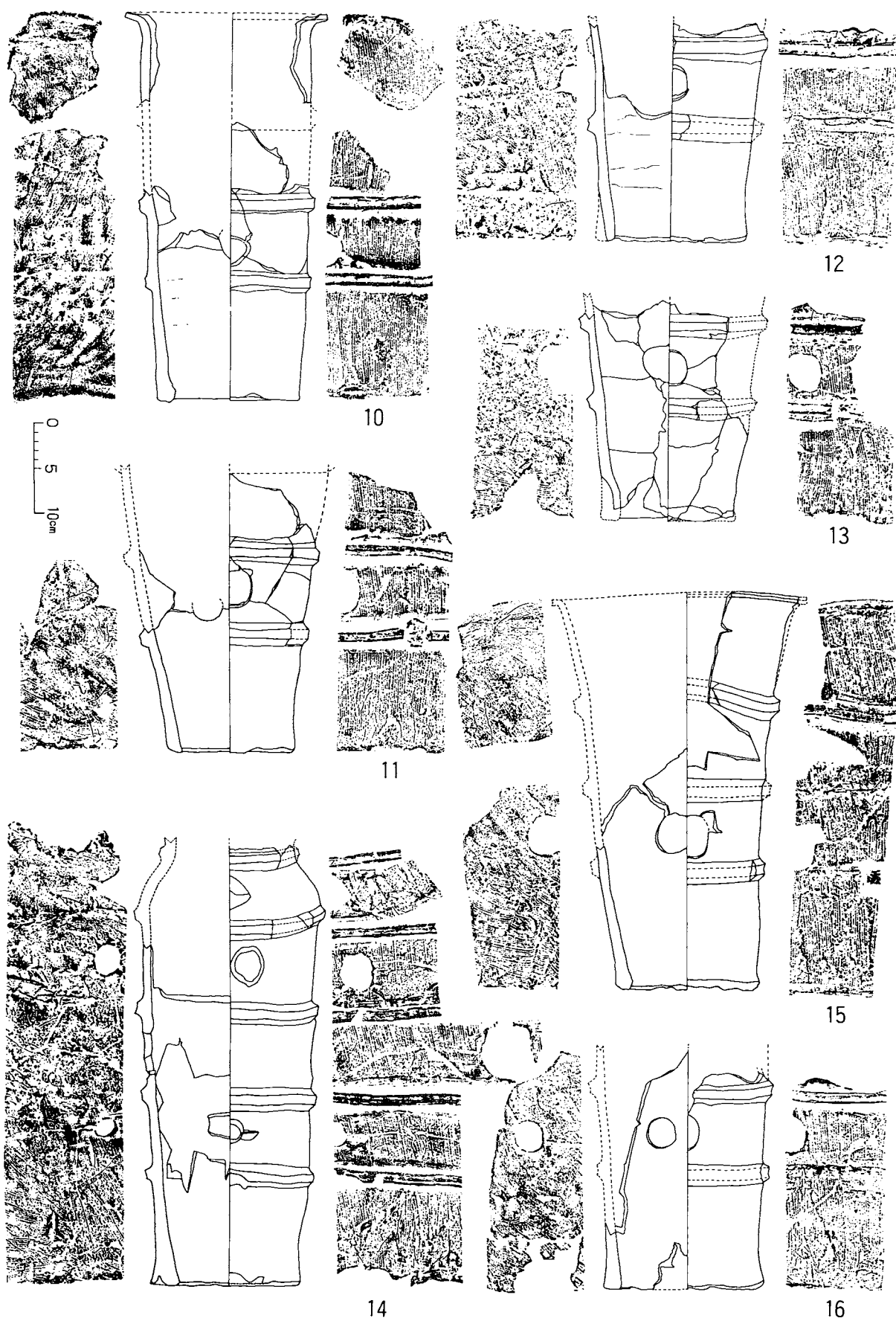
出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
1-4 A	134	3-D	¹ × ² 12.0	¹ (16.8) ² ×	¹ 2.2 ² × ³ 0.8	×	¹ 0.9・B	¹ B・(A)・一・(大)	11 10	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 底部に高さ3幅10 cmの焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第二段中位
	135	3-C ₁	¹ × ² ×	¹ (17.2) ² ×	¹ 2.4 ² ×	×	¹ ×	¹ ×	9 9	うすあず き色	胎土はやや細かい 小礫を含む 外面底端部横ナデ
2-4 E	136	3-B ₂	¹ × ² 12.2 ³ 20.9 ⁴ ×	¹ 15.0 ² ×	¹ 2.2 ² × ³ 1.1	×	¹ 1.2・B ² 1.1・B	¹ B・(A)・(A)・一 D・(A)・(A)・一	9	㍷淡橙色 ㍷淡黄色 内面は淡 橙色	胎土はやや細かい 3mmぐらいの礫を 含む 底～第三段下まで
2-4 C	137	2-B	¹ (39.3)	¹ (26.2) ² ×	¹ × ² 0.5	E	¹ × ² 1.1・B	¹ A・A・(C)・(大) A・(A)・(C)・(大)	10	よごれた 淡橙褐色	胎土はやや細かい 器高数値は第二段 高を26cmと推定し た物である 第二段中位～口縁 まで
	138	3-F	¹ × ² × ³ × ⁴ 29.7	¹ (15.2) ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 1.0 ⁴ 0.9	×	¹ × ² × ³ 1.1・D	¹ A・A・A・(中) B・一・一・一 ² C・A・A・6.3・(6.0)	10 10	灰褐色	胎土は細かい 須恵質 外面底端部横ナデ 底～第四段上位
	139	3-C ₂	¹ × ² 12.3 ³ 20.5 ⁴ 29.7	¹ 15.6 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 1.0 ⁴ 1.0	×	¹ 1.1・B ² 0.9・B ³ 0.6・B	¹ B・A・A・4×4.5 B・A・A・4×4 ² B・A・B・(大)	11 10	橙褐色と 灰褐色を 相半	胎土は細かい 半須恵質 外面底端部横ナデ 底～第四段下まで
	140	3-D	¹ (45.1) ² 11.6 ³ 21.0 ⁴ 31.0	¹ 14.2 ² (27.5)	¹ 2.6 ² 0.6 ³ 0.8 ⁴ 1.1	C	¹ 1.2・D ² 1.0・D ³ 1.0・D	¹ A・A・C・5×6 B・A・A・6×5.5 ² A・A・A・6.5×8 A・A・A・7×(6) ³ A・(A)・A・(2.5×3)	9 10	赤褐色	胎土は粗い 3mmぐらいの礫を 含む 底～口縁まで
	141	3-D	¹ × ² 12.0 ³ 21.5	¹ 16.0 ² ×	¹ 2.1 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.6・B ² 1.4・B	¹ B・A・A・5.0×5.6 B・(A)・一・(中) ² B・一・一・(大)	10 10	赤褐色	胎土は粗い 底～第三段下まで
	142	3-F	¹ × ² 12.7 ³ ×	¹ 15.6 ² ×	¹ 2.4 ² × ³ 0.8 ⁴ 0.7	×	¹ 1.0・B ² ×	¹ B・A・B・4.5×5.5 B・A・B・5×5.5 ² A・A・一・一 A・一・一・一	8 9	淡赤褐色	胎土は細かい 外面底端部横ナデ 底～第三段中まで

出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形 状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-4 C	143	3-C ₂	¹ × ² × ³ 20.4	¹ 14.5 ² ×	¹ 2.1 ² × ³ 0.9 ⁴ 0.9	×	¹ × ² 0.9・D	¹ B・A・B・(5.5×4.5) B・A・A・(中) ² B・ー・B・(中)	10 10	橙褐色と 灰褐色の 相半	胎土は細かい 須恵質 外面底端部横ナデ 底～第三段下まで
	144	3-F	¹ (41.3) ² 12.0 ³ 20.3 ⁴ ×	¹ 14.7 ² (28.3)	¹ 2.2 ² 0.7 ³ 0.9 ⁴ 0.9	A	¹ 0.9・B ² 0.8・B ³ ×	¹ B・A・B・4×4.5 B・A・B・(4×4.5) ² B・A・B・(中) A・A・ー・(大)	9 9	淡黄色と 灰褐色の まざり	胎土は細かい 須恵質 底～口縁まで
2-4 D	145	3-C ₂	¹ × ² 12.5	¹ 16.3 ² ×	¹ 2.6 ² × ³ 0.7	×	¹ 1.1・B	¹ B・A・B・(4.5×5) B・A・ー・ー	10 9	灰褐色と 赤褐色の しもふり	胎土は細かい 半須恵質 5mm大の礫を含む 底部に高さ4幅10 cmの焼きむらあり 外面底端部横ナデ 底～第三段中まで
	146	朝顔A	¹ × ² (12.8) ³ ×	¹ 15.1 ² ×	¹ 2.2 ² × ³ 1.0	×	¹ 1.0・B	¹ B・(A)・(B)・(小)	10 10	灰褐色と 淡黄色の 相半	胎土は細かい 須恵質 内面に巻上げ痕あり 外面底端部横ナデ 底～第二段中
	147	2-B	¹ × ² ×	¹ 15.2 ² ×	¹ 2.2 ² × ³ ×	×	¹ ×	¹ ×	6	淡赤褐色	胎土は細かい 外面底端部横ナデ 底～第一段凸帯まで
	148	3-D	¹ × ² 12.0	¹ (18.0) ² ×	¹ 2.5 ² ×	×	¹ C	¹ ×	8 11	淡赤褐色	胎土は細かい 外面底端部横ナデ 底～第一段凸帯まで
2-4 A	149	3-F	¹ × ² (12.5)	¹ 14.5 ² ×	¹ 2.5 ² × ³ 0.9	×	¹ 0.9・B ² ×	¹ C・A・B・(大) (B)・ー・ー・ー	9 8	淡橙褐色 と灰褐色 の相半	胎土は細かい 半須恵質 底～第二段凸帯まで
2-4 D	150	2-B	¹ × ² 14.0 ³ ×	¹ 15.1 ² ×	¹ 2.2 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.1・C		6	淡黄色 赤味帯び た灰褐色 淡橙色	胎土は細かい 内面に巻上げ痕あり 外面底端部横ナデ 底～第二段下まで
2-4 C	151	3-C ₁	¹ × ² 11.8 ³ ×	¹ 17.1 ² ×	¹ 2.1 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.2・B ² ー	¹ A・ー・ー・ー A・ー・ー・ー ² ー・ー・ー・ー	9 11	よごれた 小豆色	胎土はやや細かい 底～第二段下位

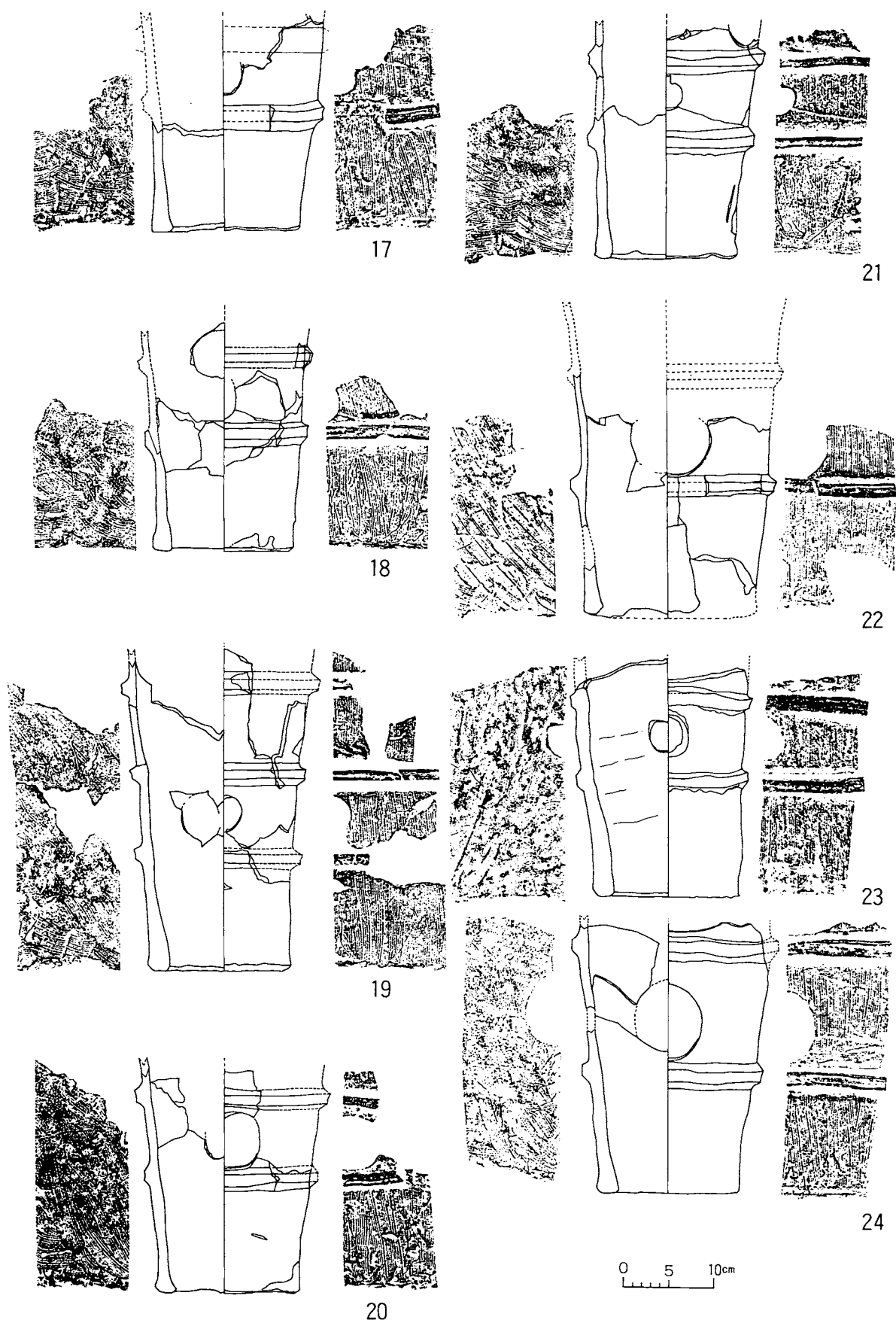
出土区	番号	様式	法 量			口縁部 形 状	凸 帯 幅・形状	透 孔 穿孔法・形・位置・規模	刷毛目数 (2cm内)	色 調	備 考
			器 高	器 径	器 厚						
2-4 C	152	3-B ₁	¹ × ² 12.2 ³ 20.4	¹ 16.0 ² ×	¹ 2.3 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.0・D ² 0.8・D	¹ A・A・A・(中) D・――・(中) ² A・――・――	10	橙褐色	胎土は細かい 半須恵質 底～第三段上位
2-5 C	153	2-D	¹ × ² ×	¹ 12.8	¹ 2.1	×	¹ ×	¹ ―――	10	よごれた 赤褐色	胎土はやや粗い 基部のみ
1-3 E	154		¹ × ² ×	¹ ×	¹ 2.2 ² × ³ 1.1	×	¹ ×	¹ ―――	11	淡橙色	胎土は細かい 第一段上位
2-4 A	155	2-B	¹ (40.4) ² 14.2	¹ (15.5) ² (27.6)	¹ 2.3 ² 0.5 ³ ×	E	¹ 0.9・A	¹ A・(A)・―― A・(A)・――	5 6	よごれた 淡黄色	胎土は細かい 底～第二段中まで 口縁あり
2-4	156		¹ × ² 12.5	¹ × ² ×	¹ 1.9 ² × ³ 0.9	×	¹ 1.0・B	¹ ―――	7 8	淡黄色	胎土はやや粗い 半須恵質 底～第二段下
	157		¹ × ² 11.9	¹ 15.6 ² ×	¹ 2.6 ² × ³ 1.2	×	¹ 1.1・B	¹ ―――	6 6	淡黄白色	胎土はやや粗い 5mm大の礫を含む 底～第二段中まで
	158	2-B	¹ × ² ×	¹ × ² ×	¹ × ² 0.6 ³ 1.0	E	¹ ×	¹ ――― ² (A)・――	7 8	淡黄色	胎土はやや細かい 半須恵質 第二段上～口縁
2-6 E 前方部	159		¹ ×	¹ ×	¹ 1.7 ² ×	×	¹ ×	¹ ―――	12	灰褐色	胎土はやや細かい 須恵質 基部のみ
2-6 F 前方部	160		¹ ×	¹ ×	¹ 2.0 ² ×	×	¹ ×	¹ ―――	9 8	淡赤褐色	胎土はやや粗い 基部のみ
2-6 E 前方部	161		¹ ×	¹ ×	¹ 2.1	—	¹ ×	¹ ―――	7	灰白色	胎土はやや細かい 基部のみ
2-6 H 前方部	162	3-B ₂	¹ ×	¹ ×	¹ × ² 0.5 ³ 1.0	D	¹ × ² × ³ 1.0・B	¹ (A)・――・(C)―― (B)・――・(C)――	10	灰褐色	胎土はやや粗い 須恵質 第三段上位～口縁
	163	3-F	¹ ×	¹ ×	¹ × ² 0.6 ³ 0.8	A	¹ × ² × ³ 1.1・B	¹ A・(A)・(C)・(中)	10 10	灰褐色	胎土はやや粗い 第三段上位～口縁
	164	3-E	¹ ×	¹ × ² (22.6)	¹ × ² 0.8	A	¹ ×	¹ A・(A)・C・(大)	11 11	表灰褐色 裏淡黄色	胎土はやや粗い 半須恵質 第三段中位～口縁



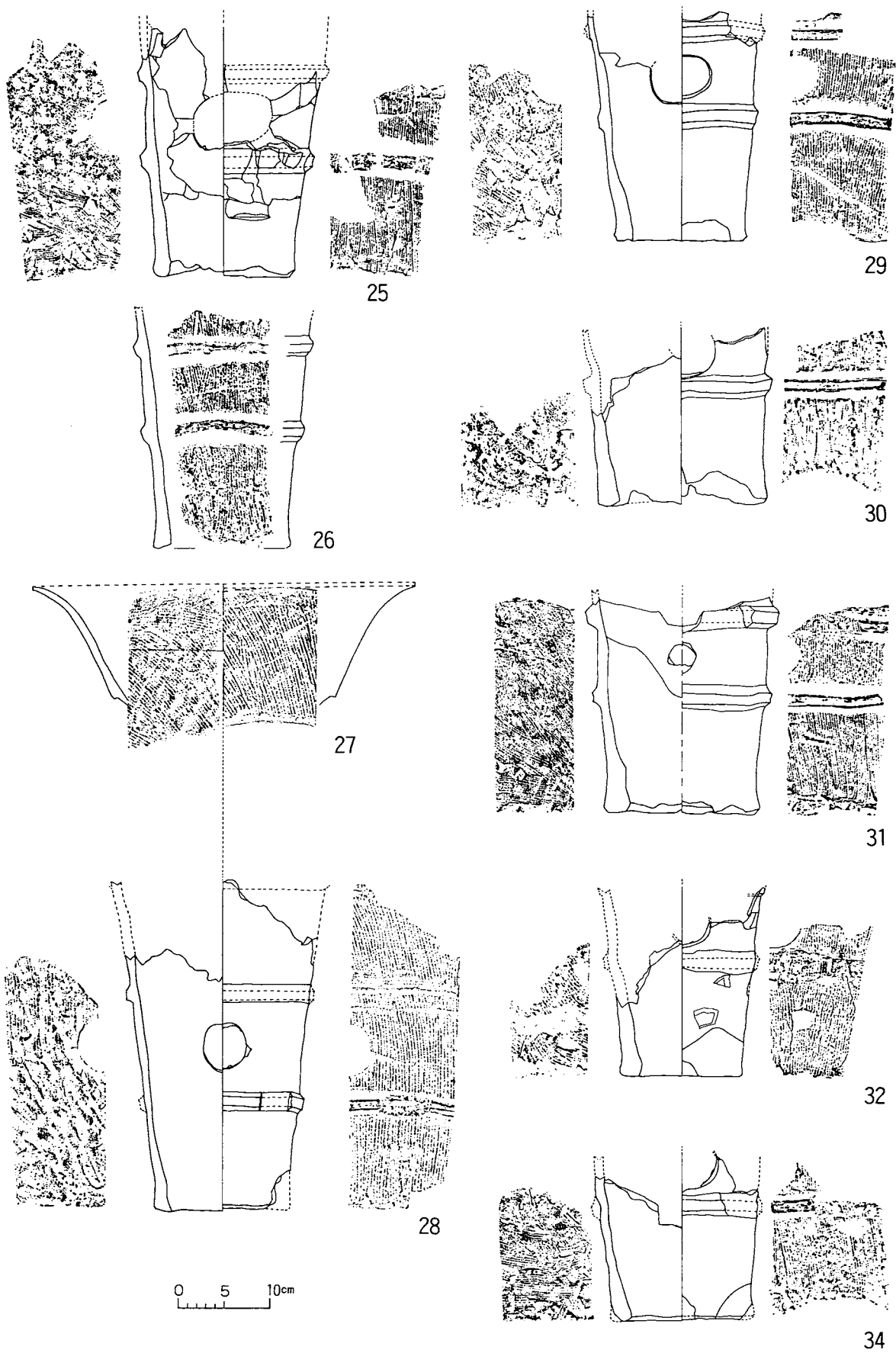
第 15 图 出土埴輪実測図 1 1-6 区



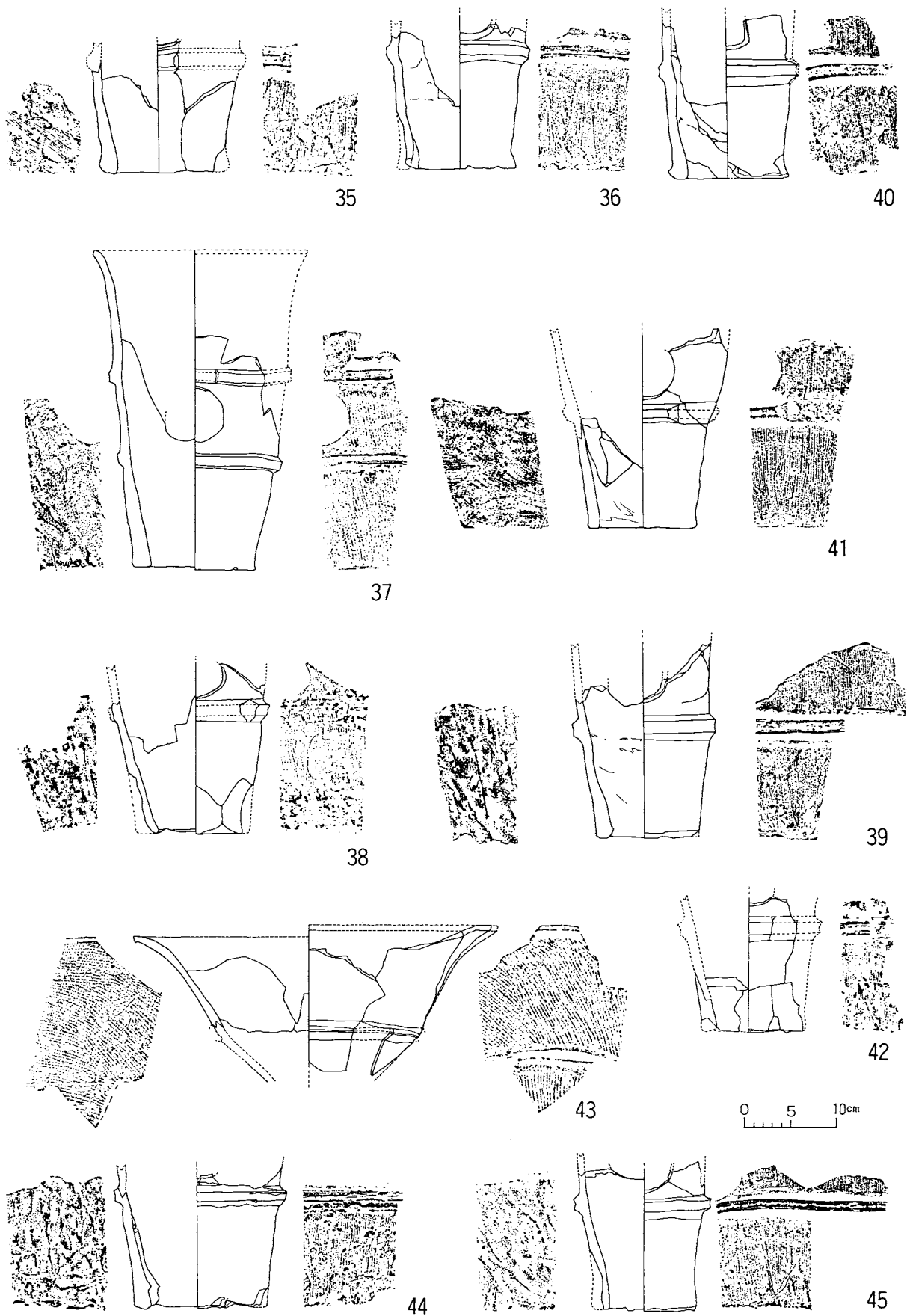
第 16 图 出土埴輪実測図 2 2-6 区



第 17 図 出土埴輪実測図 3 1-6 区 2-6 区



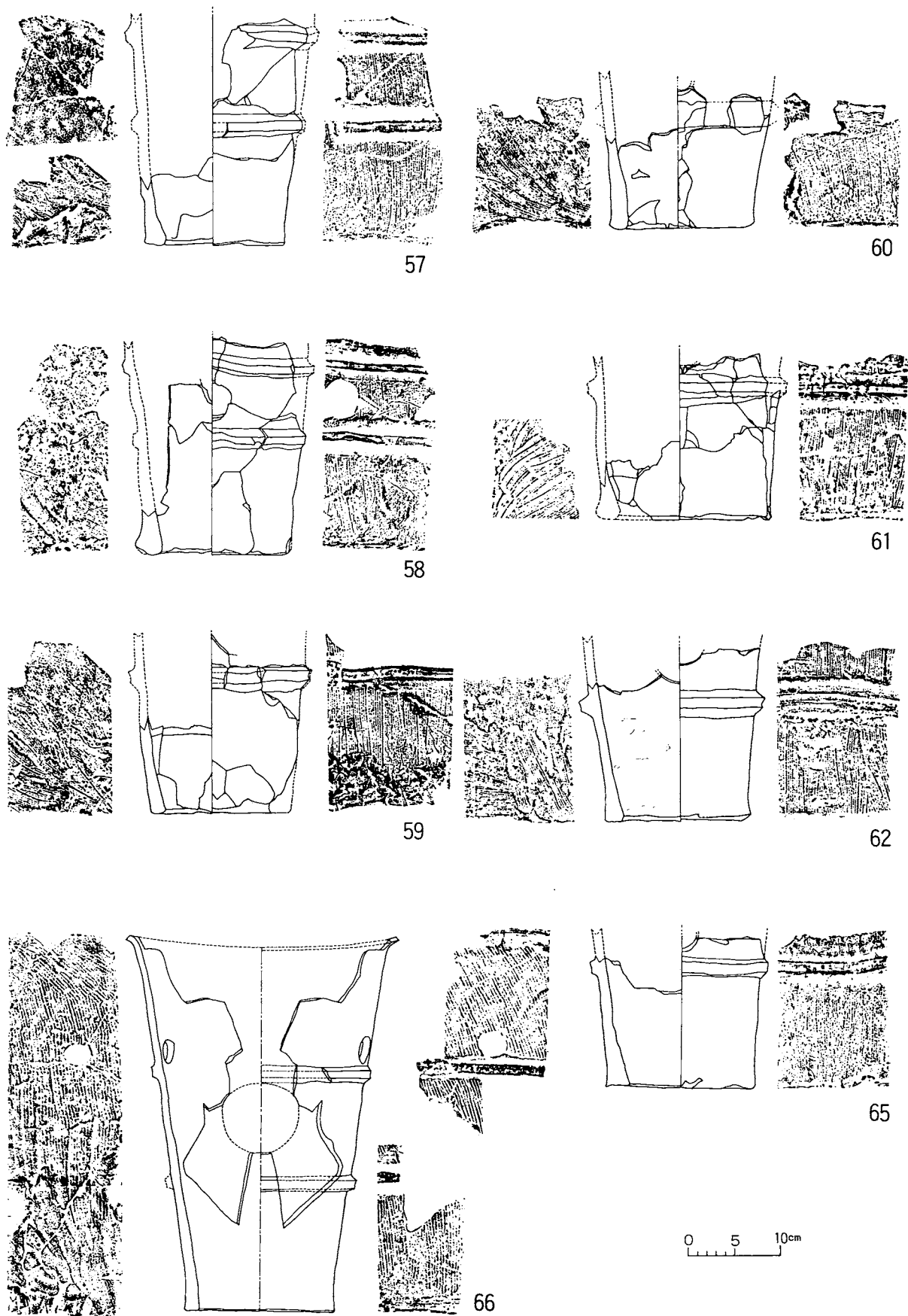
第 18 図 出土埴輪実測図 4 1 - 6 区



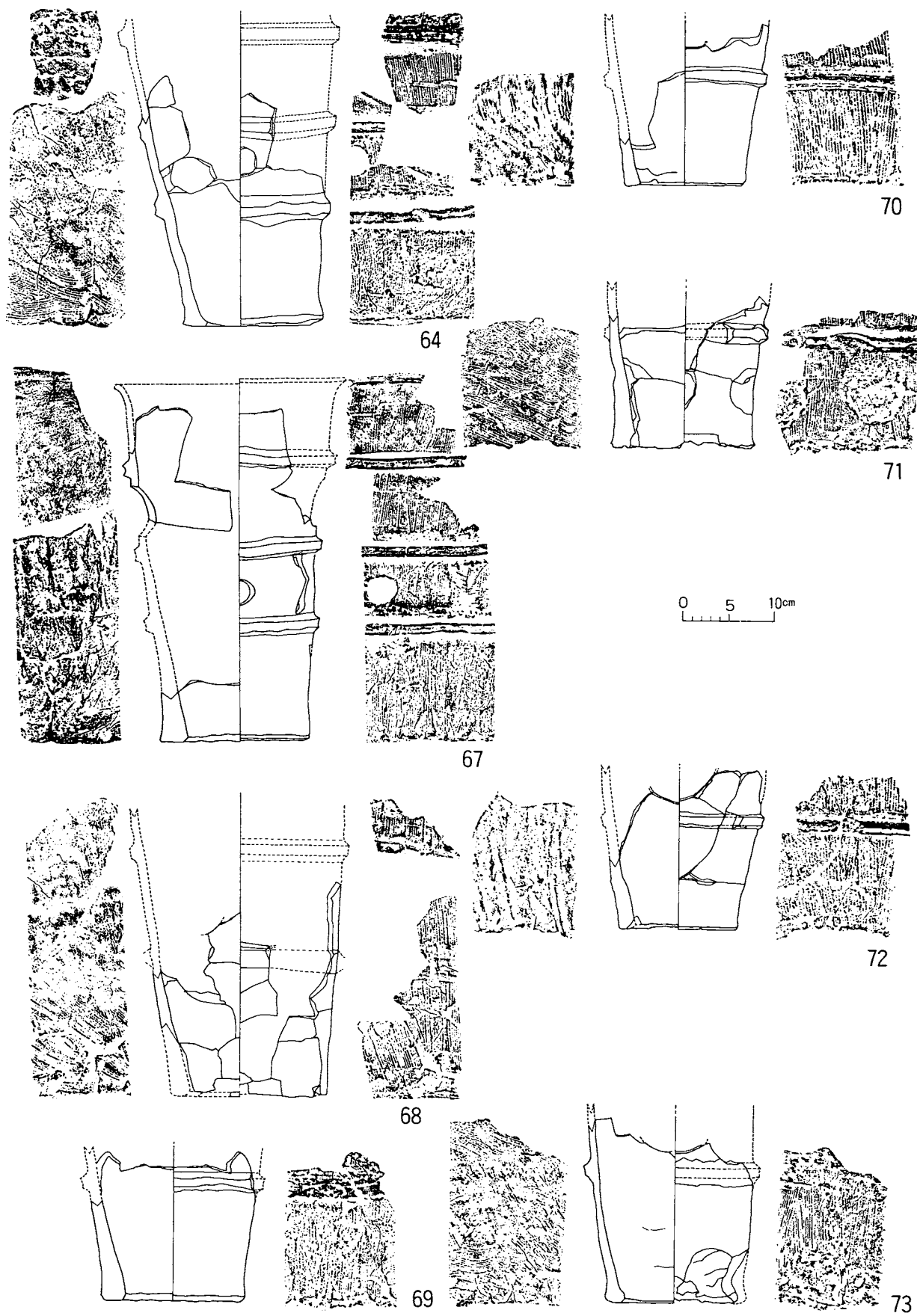
第 19 図 出土埴輪実測図 5 2-5 区



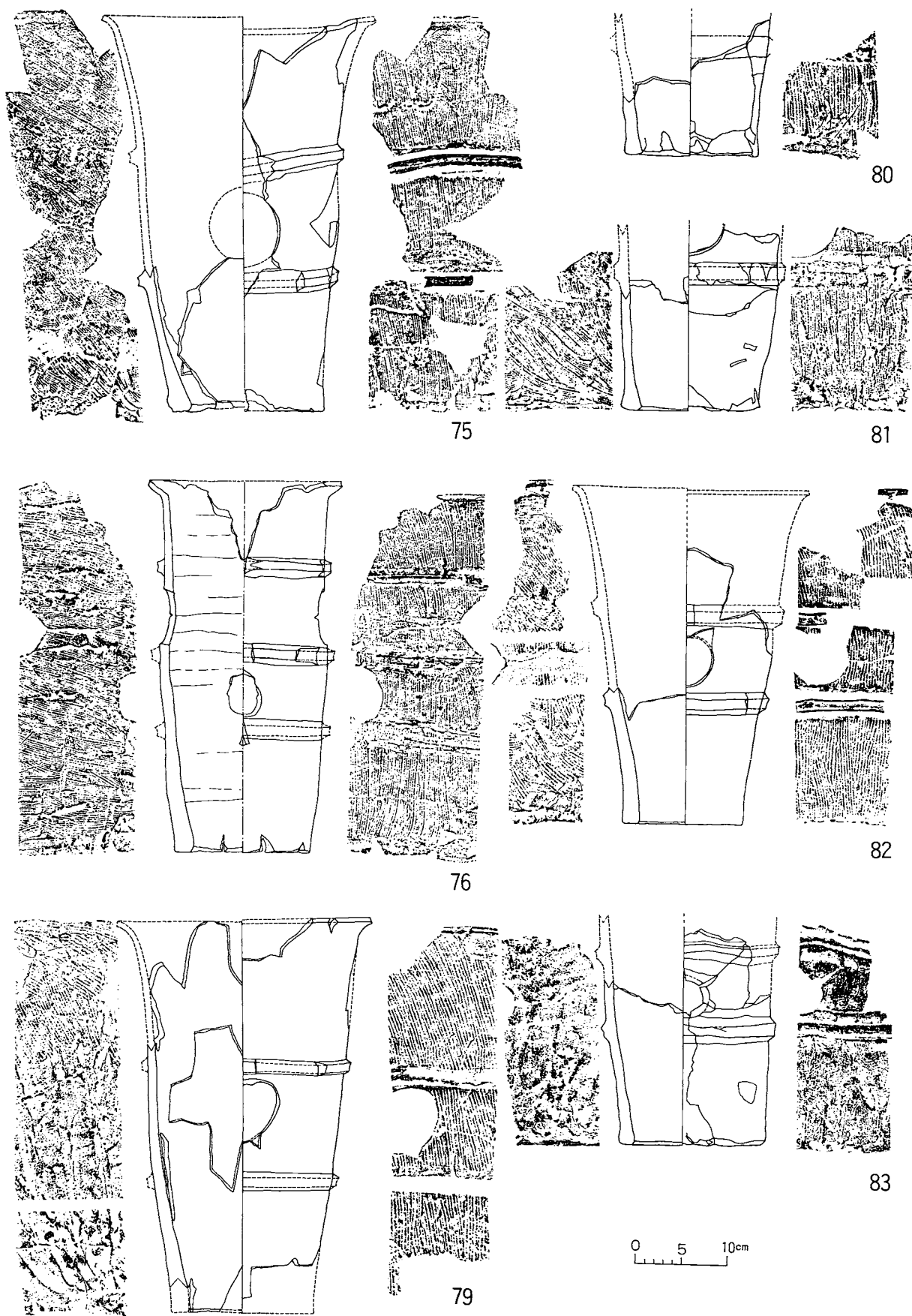
第 20 図 出土埴輪実測図 6 2-5 区



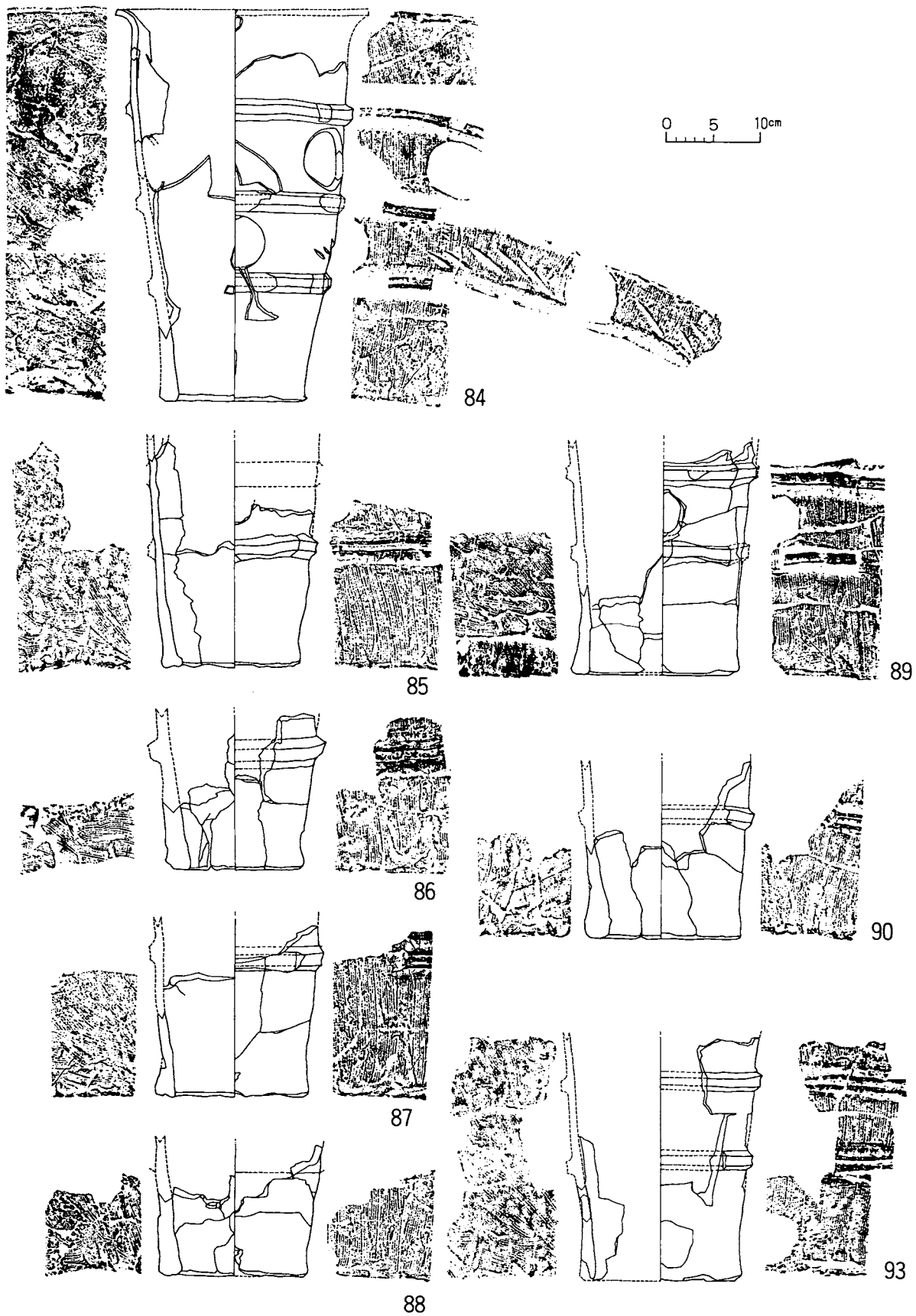
第 21 図 出土埴輪実測図 7 2-3 区



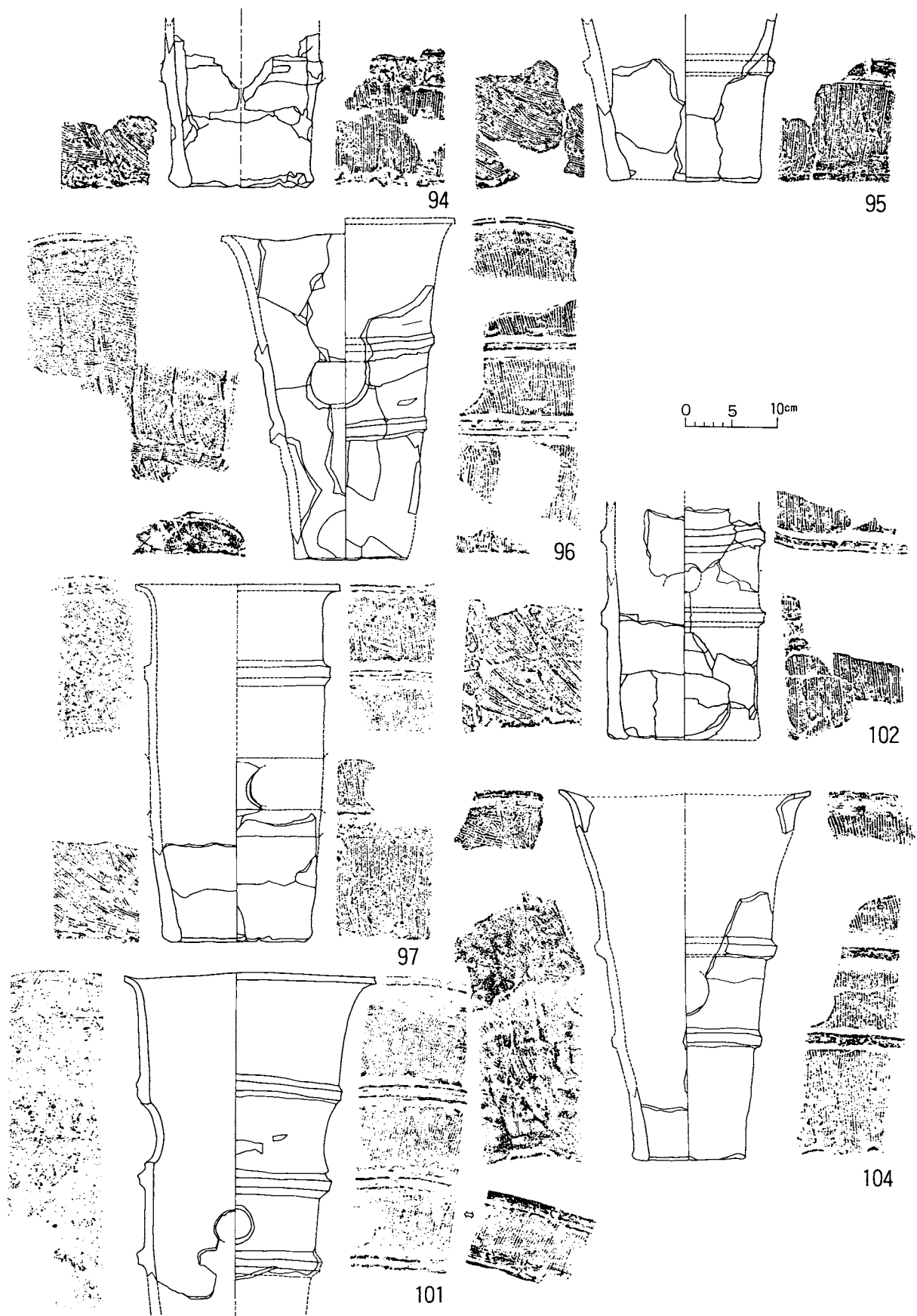
第 22 図 出土埴輪実測図 8 2-3 区



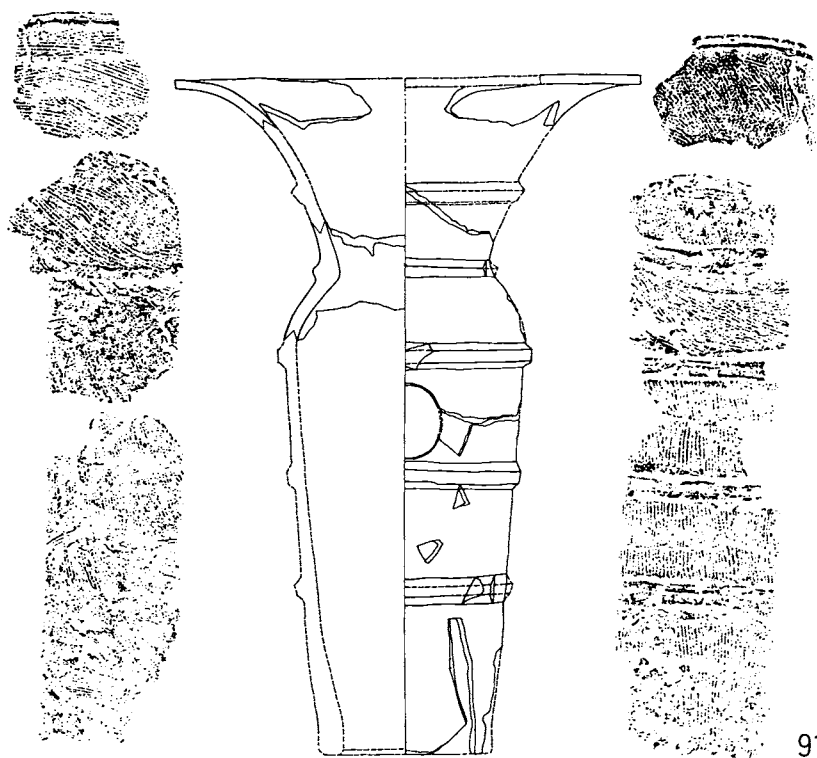
第 23 图 出土埴輪実測図9 2-3区



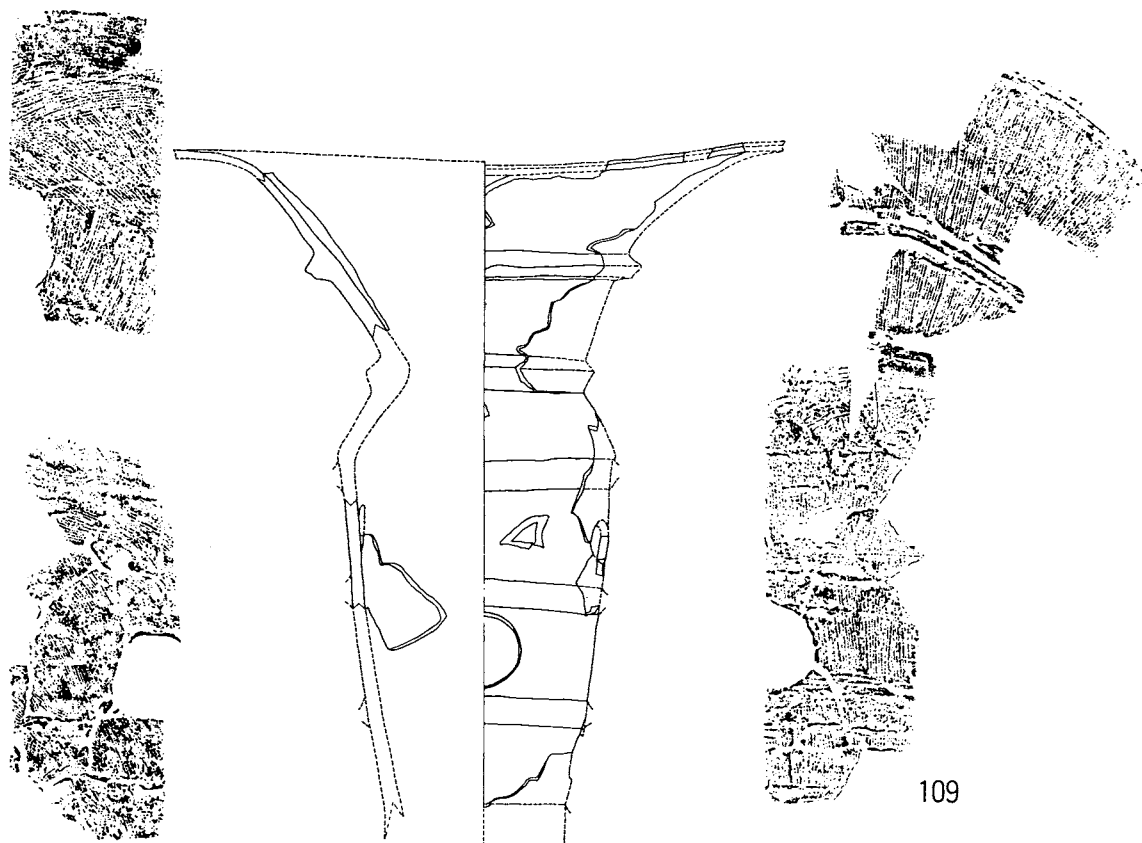
第 24 図 出土埴輪実測図10 1 - 3 区



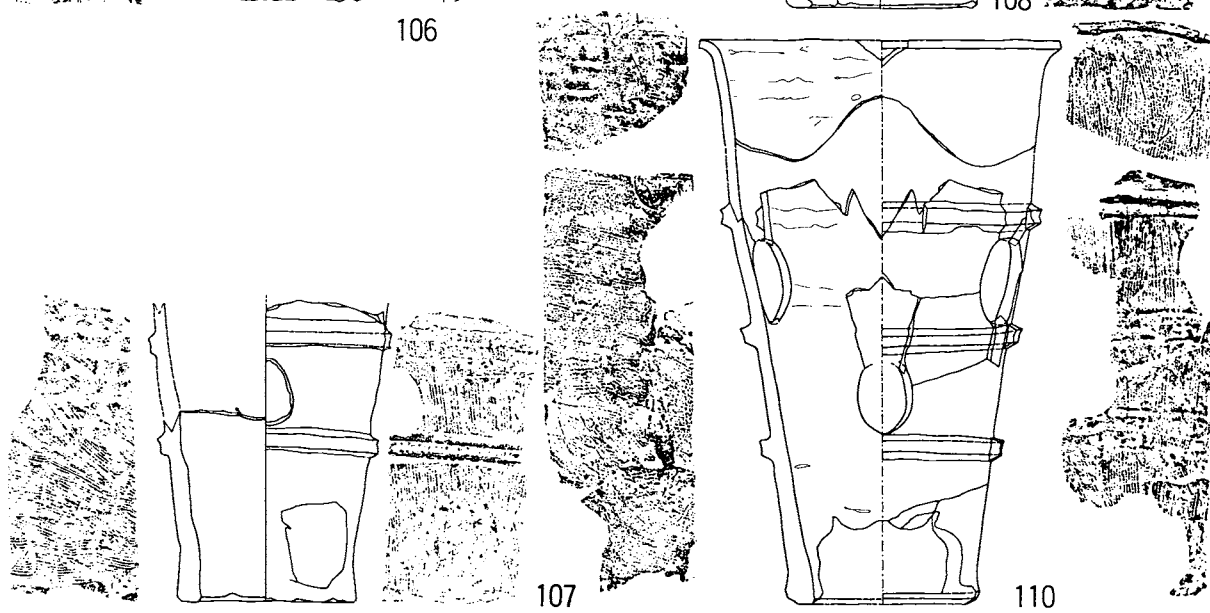
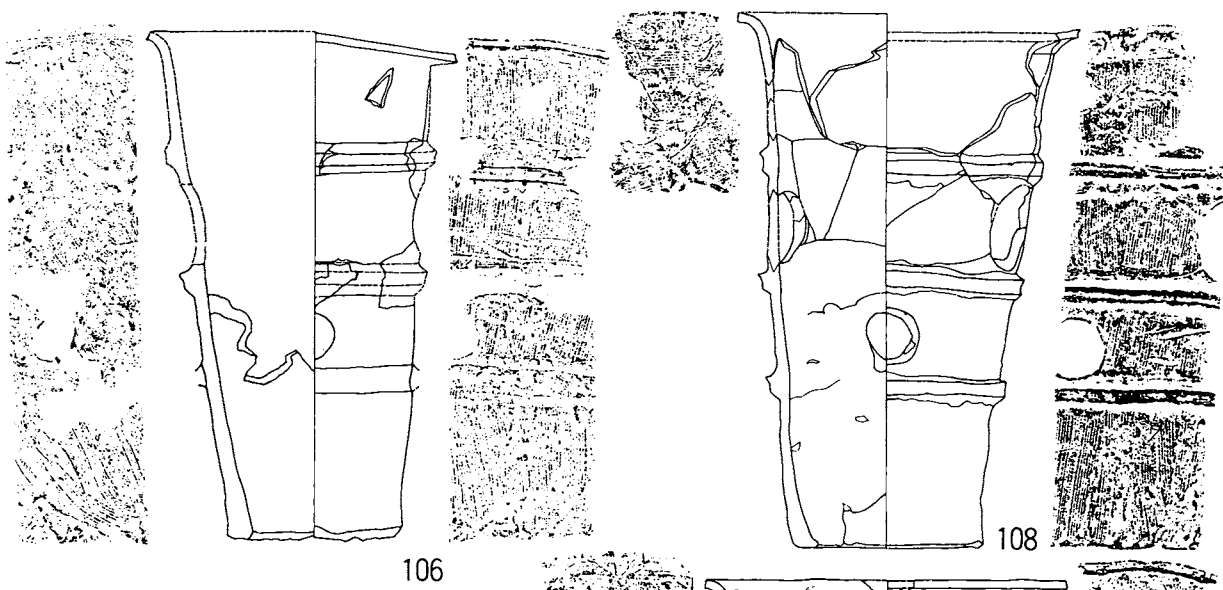
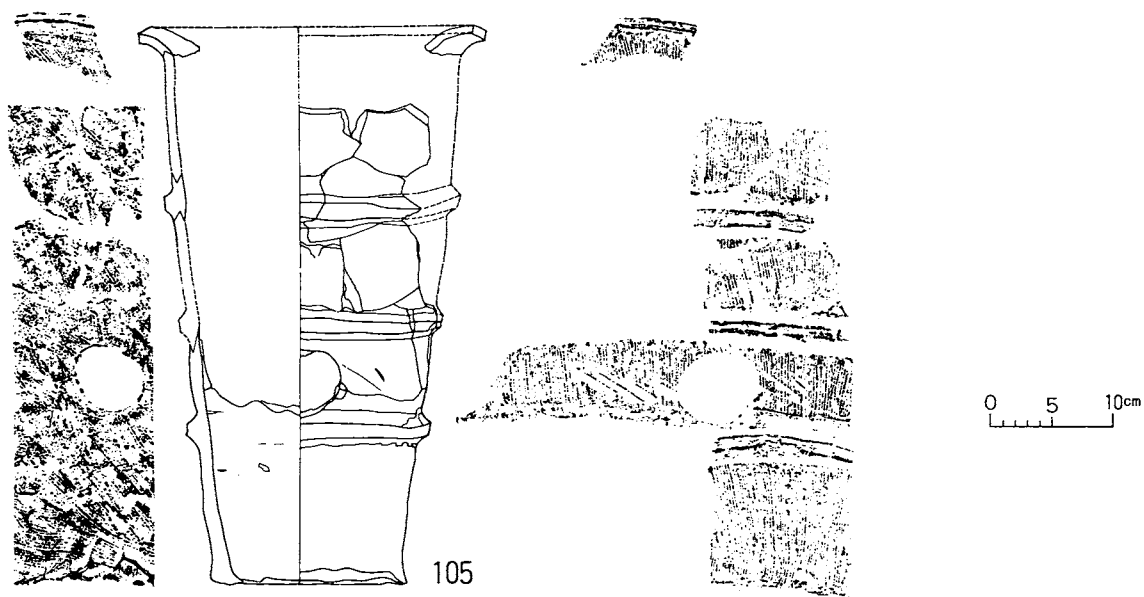
第 25 图 出土埴輪実測図11 1-3区



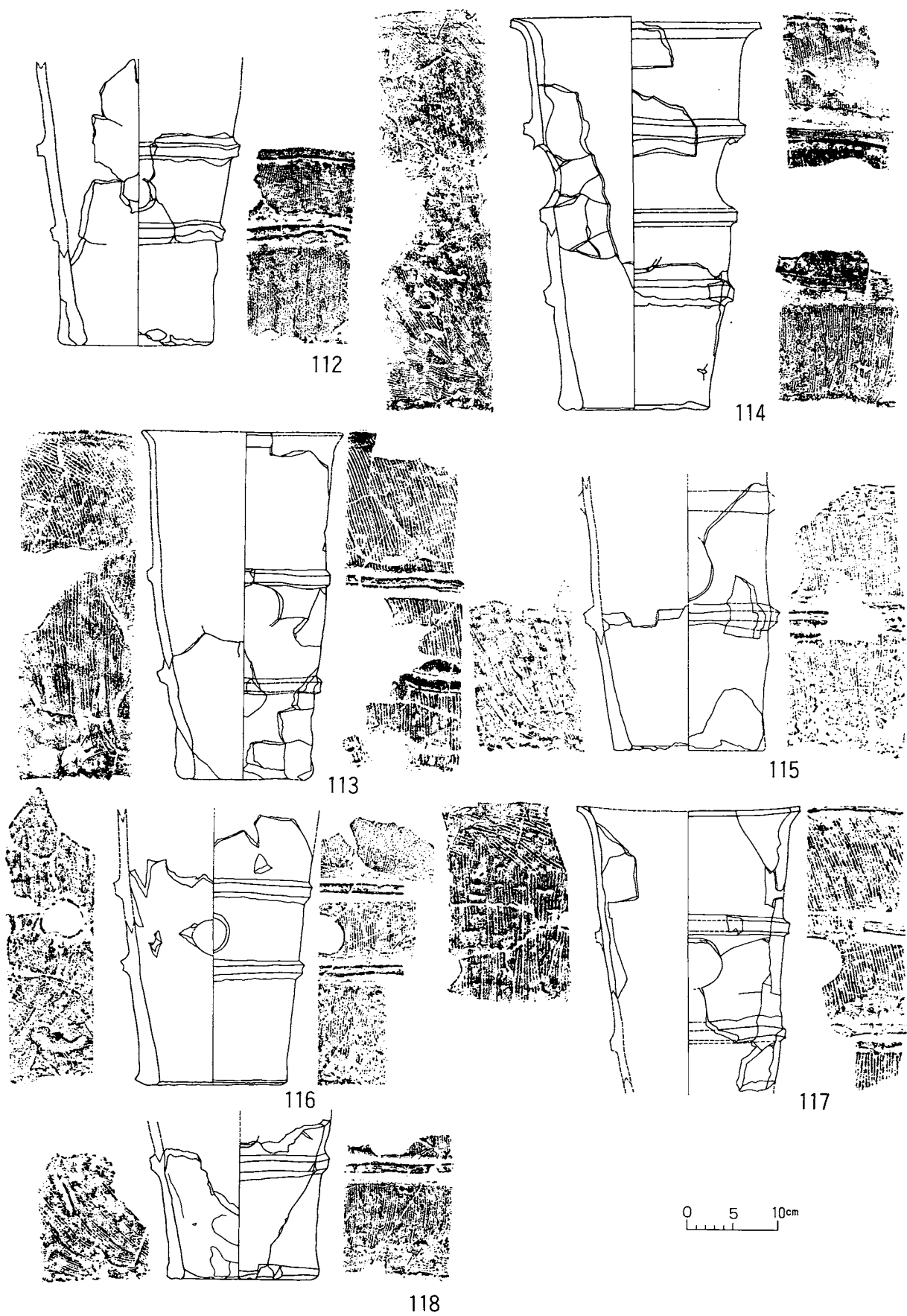
0 5 10cm



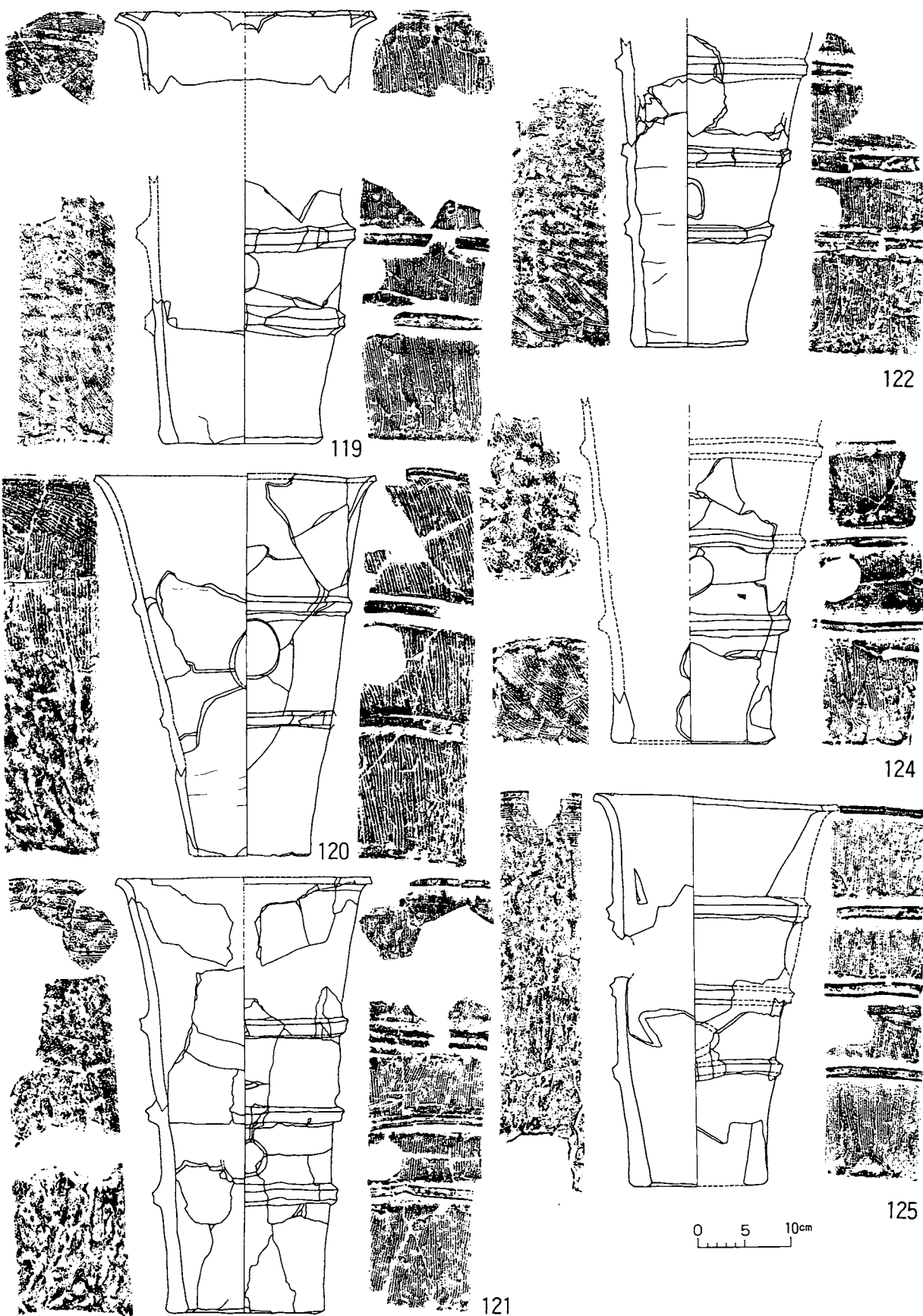
第 26 図 出土埴輪実測図12 1-3区



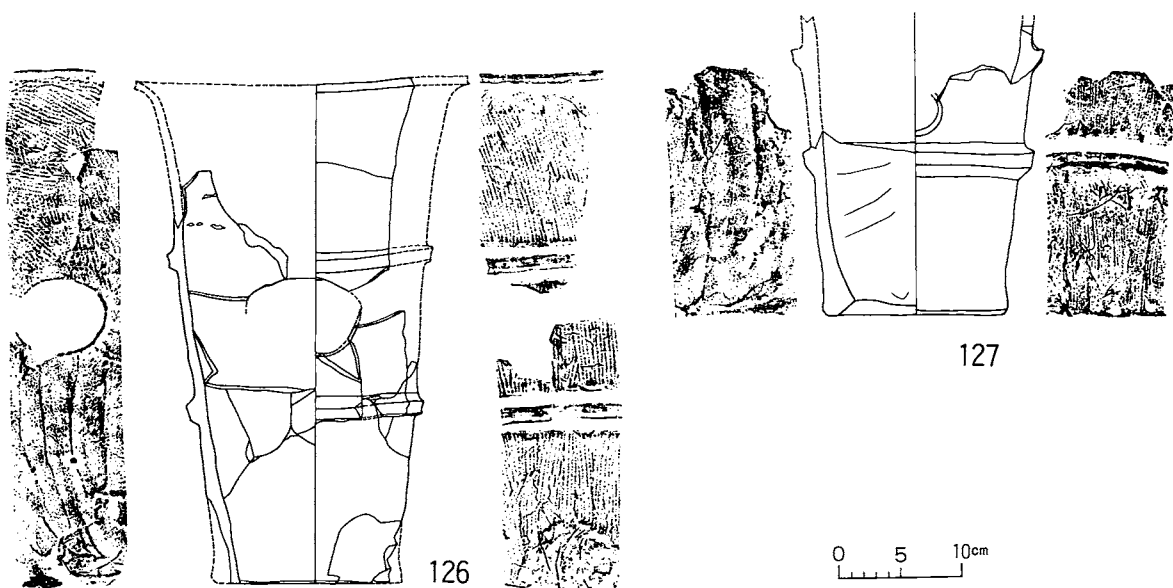
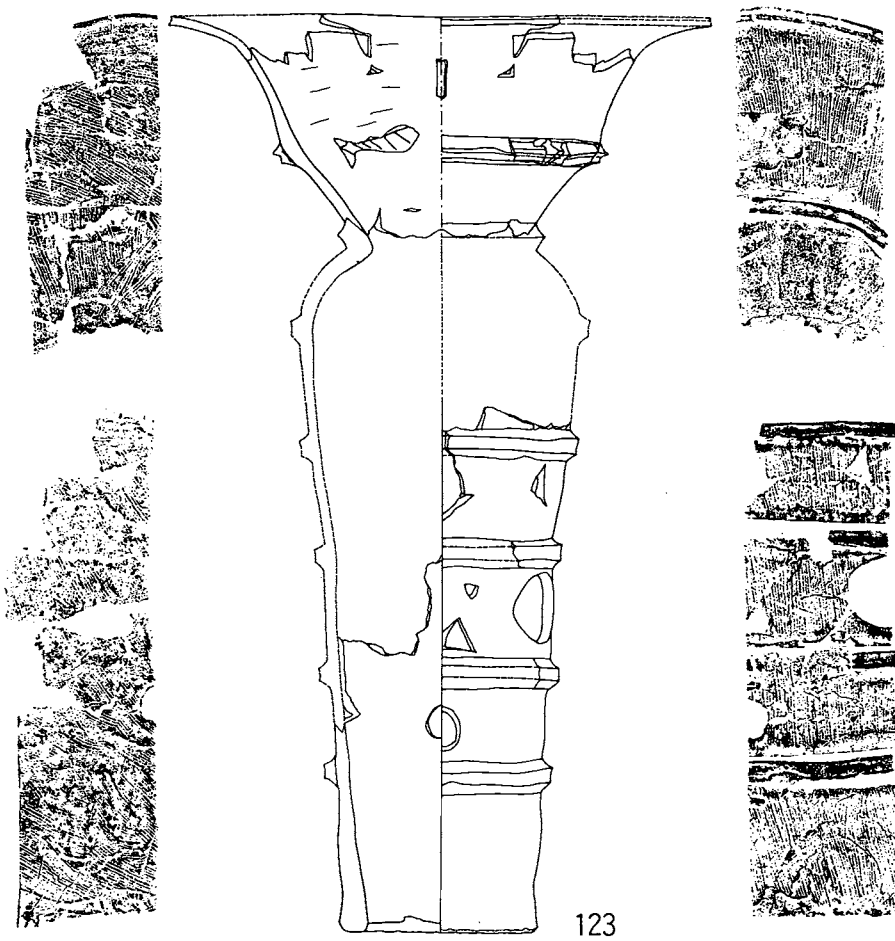
第 27 図 出土埴輪実測図13 1 - 3 区



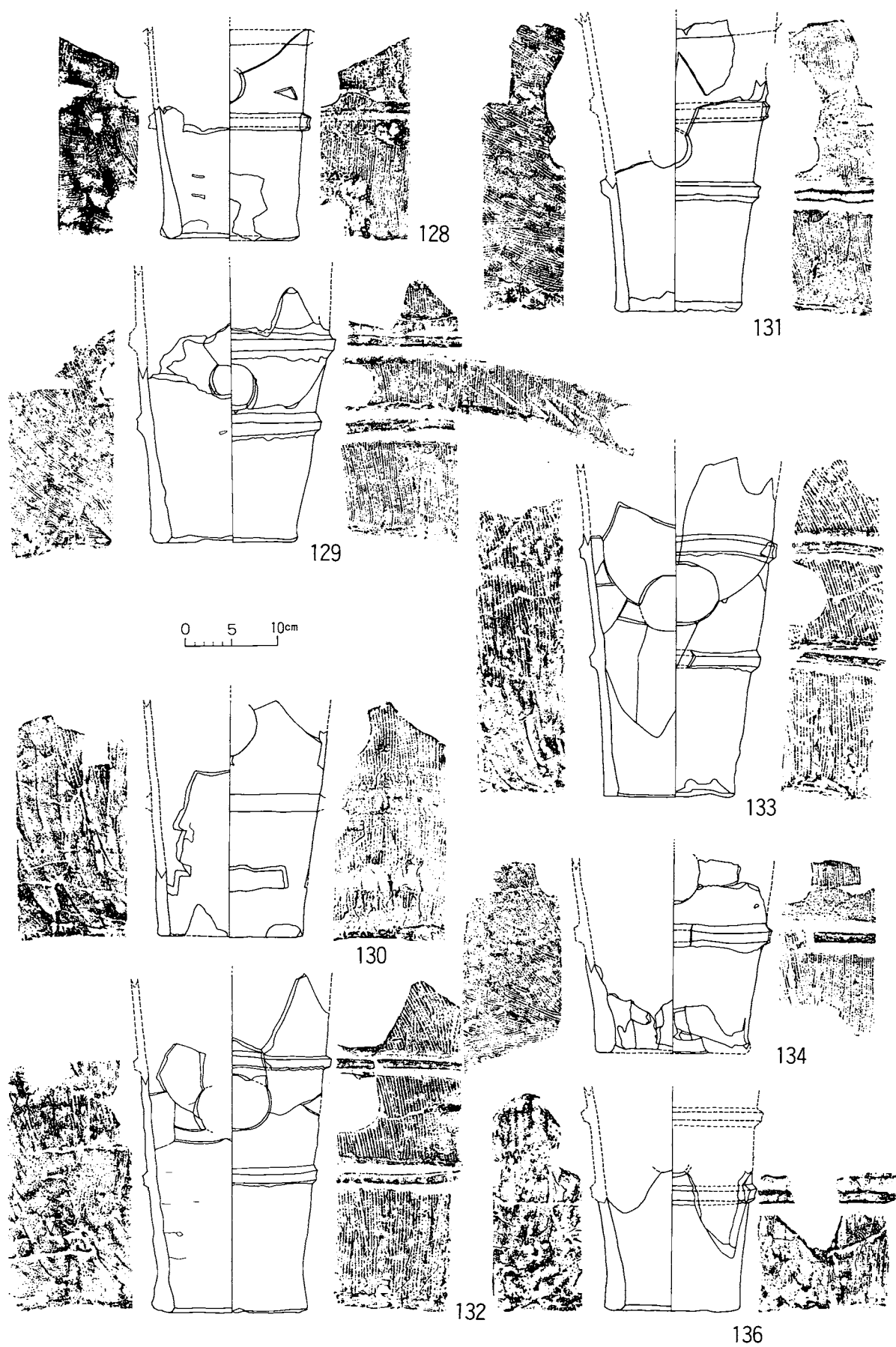
第 28 图 出土埴輪実測図14 1-4 区



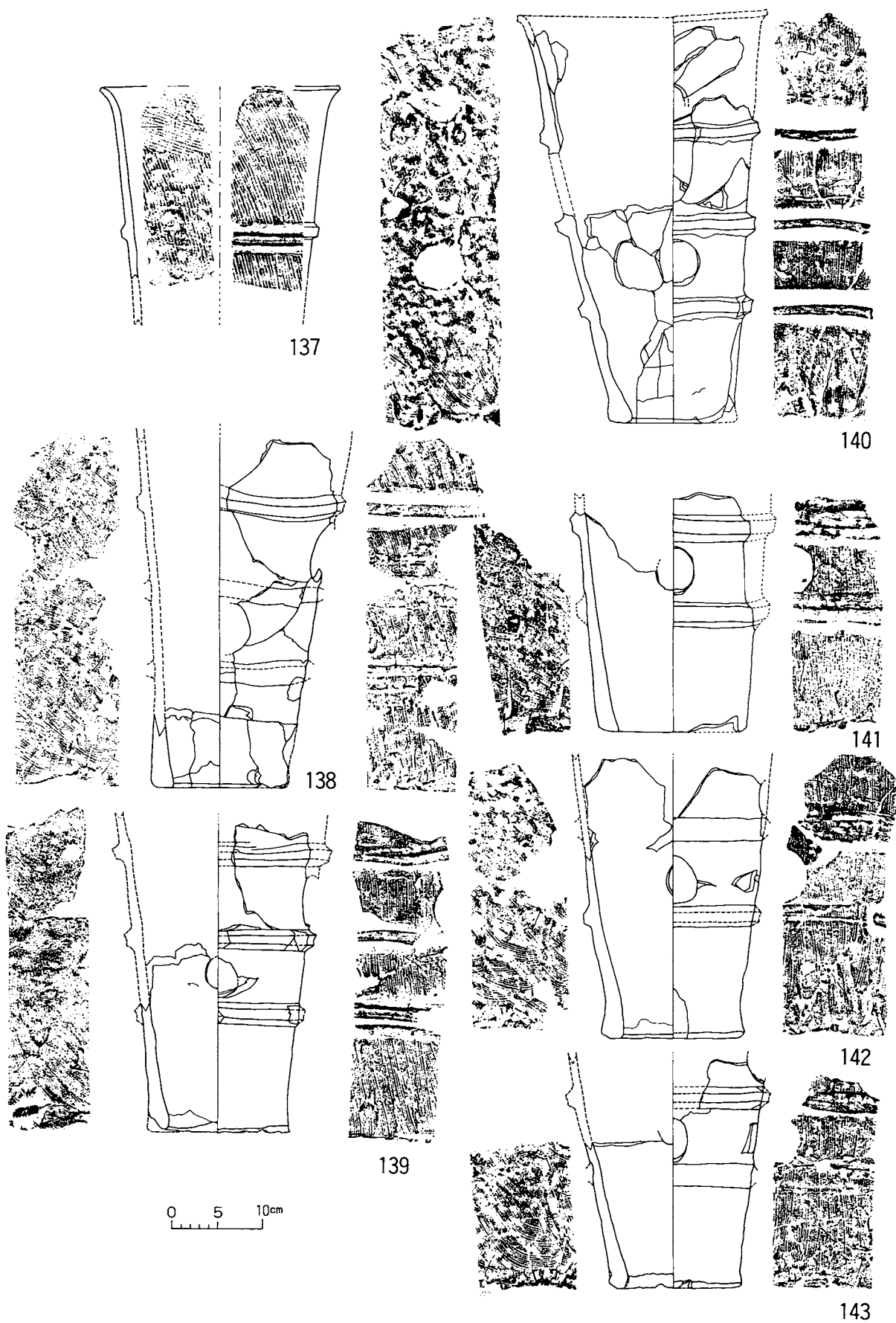
第 29 图 出土埴輪実測図15 1-4 区



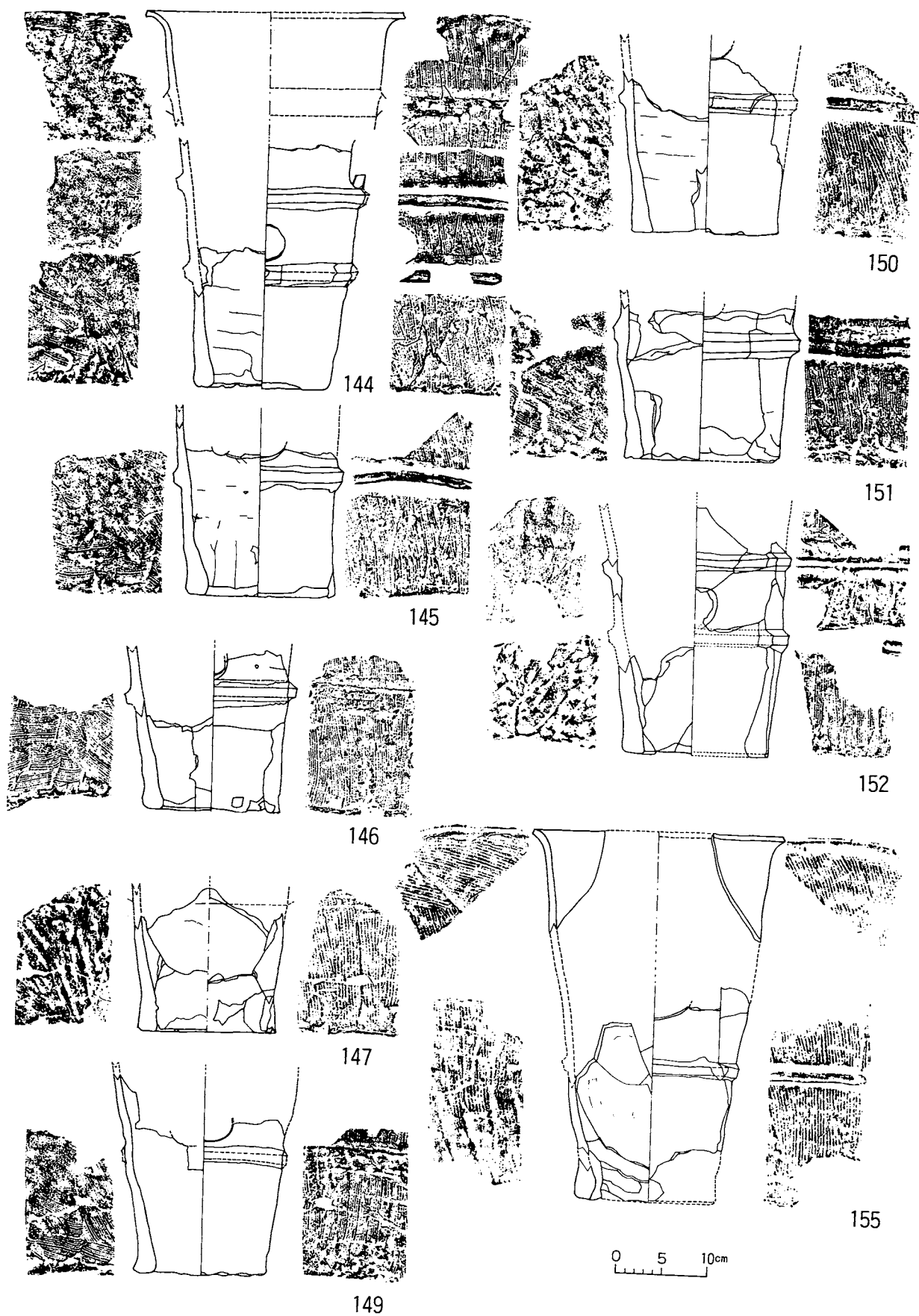
第 30 図 出土埴輪実測図16 1 - 4 区



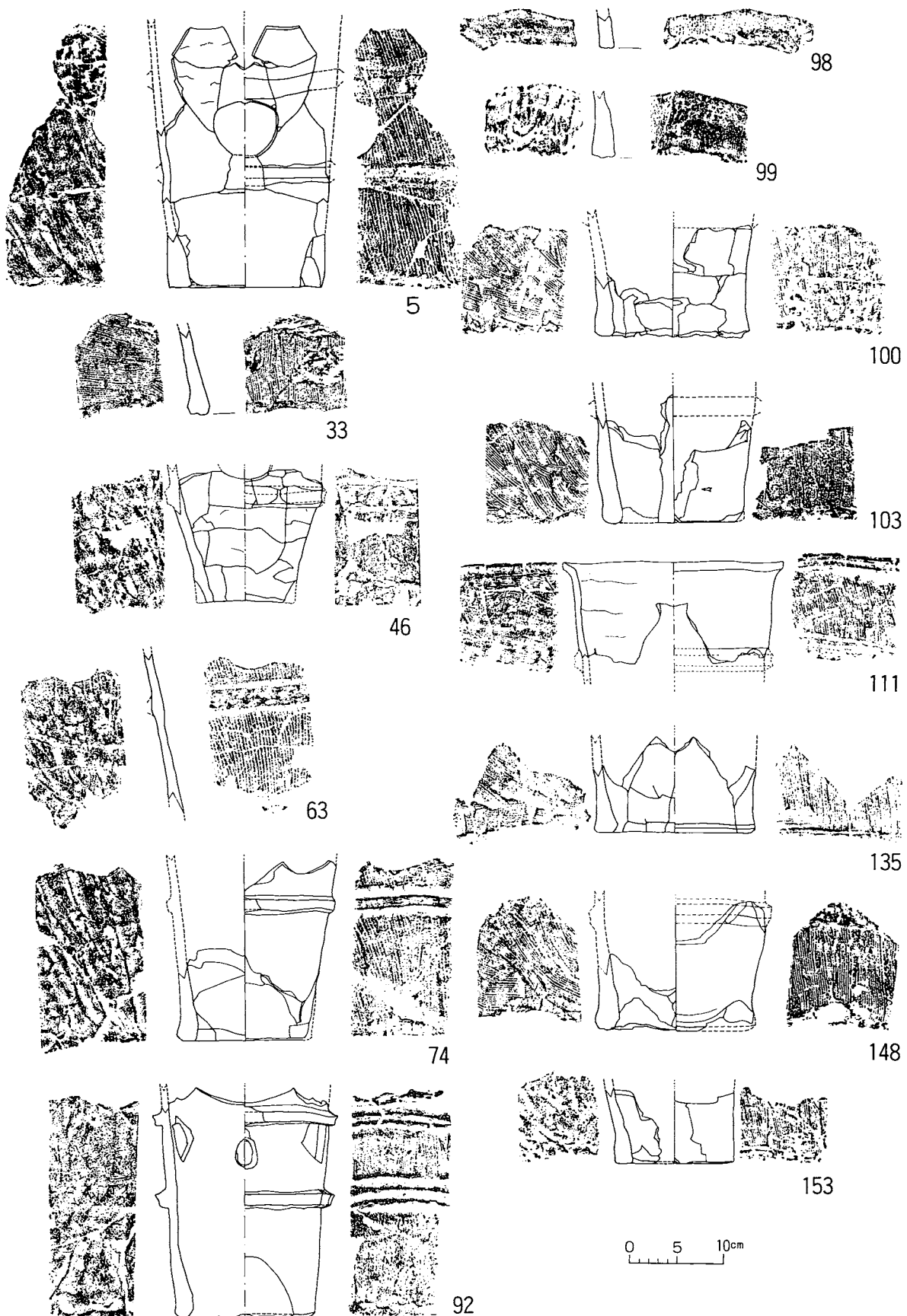
第 31 图 出土埴輪実測図17 1-4 区



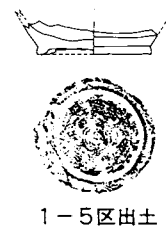
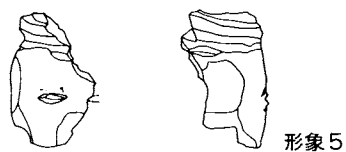
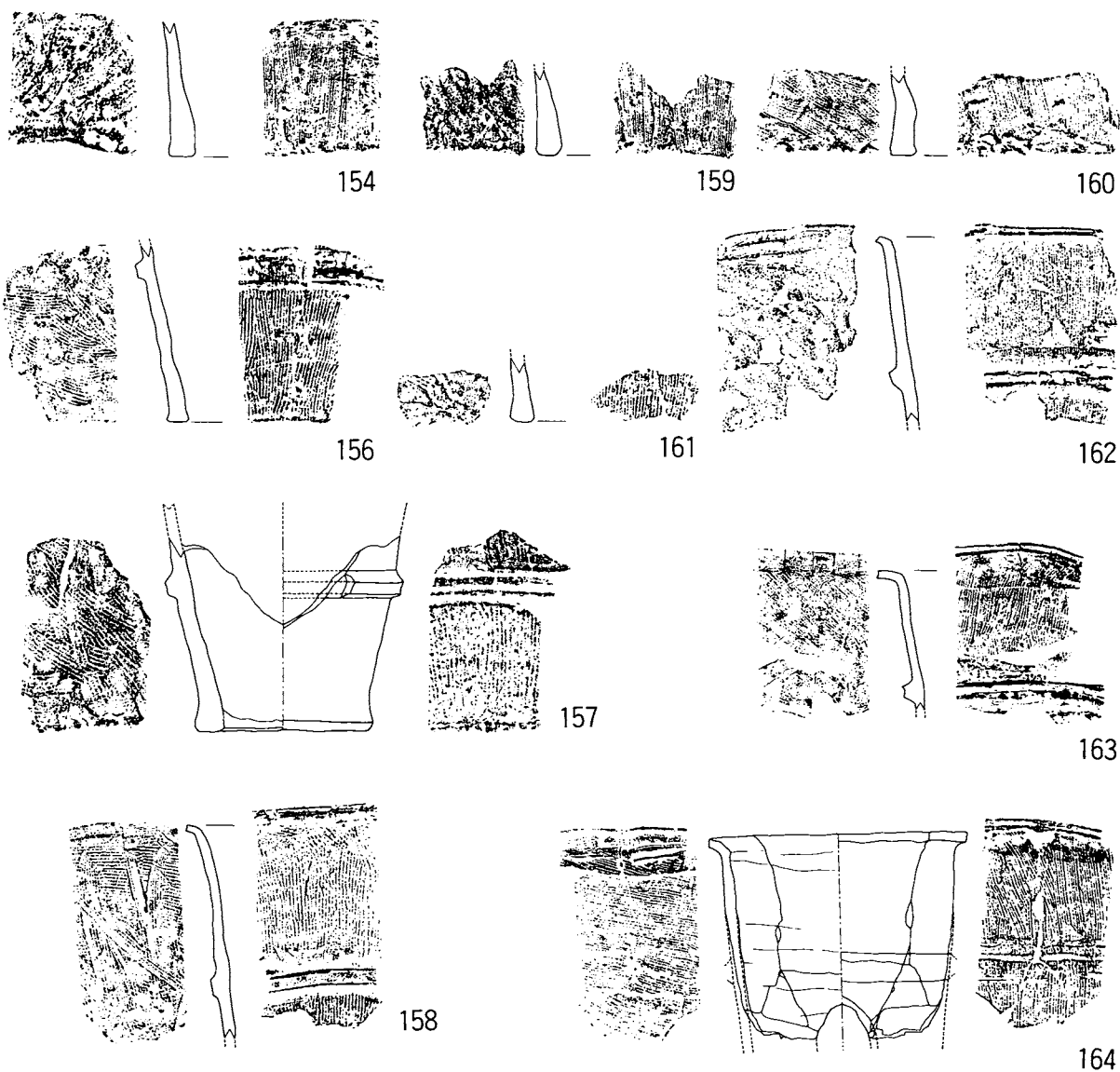
第 32 图 出土埴輪実測図18 1-4区 2-4区



第 33 图 出土埴輪実測図 19 2-4 区



第 34 図 出土埴輪実測図20



第 35 図 出土埴輪実測図21及び形象埴輪、須恵器実測図



24



136



144



132



12



131



37



71



123



39



86



20



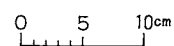
15



23



1



第 37 图 出土埴輪底部拓本

Ⅳ 考 察

鎧塚古墳は全長44mの帆立貝式の前方後円墳であり2ヵ所の墓前祭祀をもつ。後円部には円筒埴輪列が圍繞している。周溝には榛名山二ツ岳火山灰（FA）が推積していた。

このように多くの要素を兼ね備えた古墳であり問題点が多い。近在する遺跡の中で同一の要素をもった資料が少なく、あくまでも推論の域を脱しないが、以下に出土土器・埴輪・墓前祭祀・火山灰・その他の問題点について私見を述べたい。

1. 出 土 遺 物

a. 埴 輪

2 段凸帯 A タイプ（2-A）

形態・基底部が広く、第1段が低い。底部～第2段までほとんど垂直に立ち上り、第3段でわずかに外反する。口唇の形態は略矩形を呈するが断面わずかに凹状を呈する。第2段が広く大型である。

整形・内面は全面に斜の刷毛、部分的に縦のナデを施す。外面は縦の刷毛、口唇部は内外面共横ナデ、刷毛目数は9～11を計る。

透孔・第2段の第1凸帯寄り（第2段下位）に配置され、大型である（一対）。形は円形であり内面に切り残しをもつことを特徴とする。

凸帯・丁寧なナデによって付着され、断面略矩形を呈するが、凹形を呈するものが多い。

色調・地は淡黄色—22、24、61、68、75、淡赤褐色—115に区別されるが、115を除いて須恵質の為判然としない。

備考・須恵質のものが多い。

例・22、24、61、68、75、115。

2 段凸帯 B タイプ（2-B）

形態・底部からわずかに外傾しながら口縁に至り、口唇部は曲線を抽いて外反する。口唇断面は基本的には矩形を呈するが、中央がわずかにくぼみ凹形を呈するものが多い。第2段が広く大型のものが多い。

整形・内面 口唇部横の刷毛、第3段斜あるいは縦の刷毛。第1～第2段縦のナデ。外面縦（若干傾斜する）の刷毛。口唇部横ナデ。刷毛目は粗く、6～7本（2cm内）を計る。

透孔・第2段の第2凸帯寄り（第2段上位）に配置され、大型である（一対）。形は円形であるが、横に長い楕円形を呈するものもある。切り口はシャープで内面に切り残しをも

たないことを特徴とする。第3段最下部（第2凸帯上位）に小孔を穿つものもある。

凸帯・丁寧なナデで付着されており、断面略矩形を呈するが、中央がくぼんだ例も多い。

色調・淡黄色の地に赤褐色のしもふり状を呈するもの—70、72、113、120、133、淡黄色—66、79、117、132、150、153、赤褐色—52、87、橙褐色—80。

備考・須恵質のものは少ない—47、126。113は第1段が極端に狭く形態的に異質であるが整形技法及び第2段以上の形態が本タイプと同一であるのでここに包括した。

例・5、47、52、63、66、70、72、74、79、80、87、113、117、120、126、130、132、133、137、147、150、155、158。

2段凸帯Cタイプ（2—C）

形態・底部からわずかに外傾しつつ口唇に至り、口縁部はわずかに外反する。口唇断面は滑らかであり、丸味をもつもの—37等、外反し斜め上方を向き断面凹形を呈するもの—32、82、に区別される。小型である。

整形・内面第2段以上縦の刷毛、第2段中位以下縦のナデ、外面縦の刷毛。口唇部横ナデ。刷毛目は粗く、2cm内に6本を計る。

透孔・第2段の第2凸帯寄り（第2段上位）に配置され、大型である（一対）。形は円形であり、切りっぱなしのシャープな面をもつ。

凸帯・丁寧に付着されており、断面矩形を呈する。

色調・淡黄色—37、54、82、96、黒褐色—32。淡黄色と赤褐色—104。

備考・須恵質多。

例・29、32、37、54、82、96、98、104。

2段凸帯Dタイプ（2—D）

形態・底部から外傾しつつ口縁に至り、口唇部は若干外反する。口唇部は斜上方を向き断面凹形を呈する。小型である。

整形・内面は全面にナデが施される。口縁は横のナデ、底部～第3段中位まで縦を主体としたナデ、外面は縦の刷毛。口唇部は内外面共横ナデ。刷毛は細かく、2cm内に11～12本を計る。外面第2段の透孔間に各々×の窯印を有する。全体に丁寧につくられている。

透孔・第2段の下部（第1凸帯直上）に配置され、大型である（一対）。形は円形もしくは隅丸方形であり、切り口は再調整されており比較的シャープに仕上げられている。

凸帯・丁寧に付着され、断面凹形を呈する。

色調・淡黄色に赤褐色のしもふり—38、46、48、50、他—須恵質。

備考・須恵質のものが多。

例・2、3、36、38、39、40、41、42、45、46、48、49、50、153。

3段凸帯Aタイプ（3—A）

形態・底部から内湾ぎみに外傾し口縁にいたる。口唇部は曲線を描いて外反し端部はやや斜上方を向き矩形を呈する。

整形・内面全体に斜の刷毛を施す。縦あるいは斜のナデを加えている場合もある。外面縦の刷毛、外面底部端部に一周もしくは、部分的なナデを施す。口唇部横ナデ。

透孔・第2段透孔は、第2段第1凸帯寄り（第2段下位）に配置され、大型である。第3段透孔は、第3段の全域におよぶ大型の円孔が穿たれる。内面に切り残しをもつことを特徴とする。

凸帯・丁寧なナデで付着されており断面矩形を呈するが、稜がもりあがり凹型を呈する例も多い。

色調・淡黄色－110、淡赤褐色－30、73、84、須恵質－20、25、35、51、62、81、105。

備考・第2段に刻みをもつ例もある。84、105。

例・20、25、30、34、51、62、73、81、84、105、110。

3段凸帯Bタイプ1（3－B₁）

形態・底部からわずかに外傾しつつ直線的に口縁部に移行する。口唇部はわずかに外反し口唇端部が斜上方を向く。

整形・内面第四段に横の、それ以下に縦の刷毛を施し、第3段以下に縦のナデを加える。口唇部は内外面共横ナデが施される。外面は縦の刷毛。

透孔・第2段透孔は第2段の中位もしくは第1凸帯寄（第2段下位）に配置され4 cm前後で小型である。シャープな切り口はみられず再調整をしている場合が多い。第3段透孔は第3段全面にわたり、大型である。シャープな切り口はみられず再調整している場合が多い。

凸帯・上辺は丁寧なナデで付着されているが、下辺はナデてはいるものの、まったく粗く凸凹がはげしい。

色調・赤褐色を呈する。

Bタイプ・1の例－6、7、8、23、69、83、92、99、101、108、111、121、122、125、127、152。

3段凸帯Bタイプ2（3－B₂）

3段凸帯Bタイプは内面第3段以下にナデを施すタイプの総称である。第2段透孔は、小型で再調整されている事を特色とする。

Bタイプ2は、概1と同様であるが、口唇部が斜上方を向くこと、内面の整形に口縁部迄ナデが加えられること、外面底端部に横ナデを施すこと、色調は淡赤褐色を呈する等の違いがある。Bタイプ1にくらべて総体的に小型である物を言う。

Bタイプ2の例 4、44、65、67、90、116、136、162。

3段凸帯Cタイプ1

形態・底部から直線的に口縁まで外傾し、口唇部は外方に大きく開く。口唇端部は略矩形を呈し真横をむく。底端部は幅広く厚くつくられていることを特色とする。

整形・内面斜の刷毛を口縁から第1段中位まで施し、基底部は横位の刷毛を施す。その

後、部分的に縦のナデを施す。外面縦の刷毛、底端部に横ナデを施す例もある。

透孔・第2段透孔は、第2段中位に配置され4 cm前後で円形を呈する。第3段透孔は、第3段の全面にわたり、大型で円形を呈する。シャープな切り口は見られず、内面に切り残しをみせる。

凸帯・上辺は、丁寧に付着されているが、下辺は雑である。断面は稜の内側が若干窪む。

色調・赤褐色を呈するものが多い－10、11、21、56、58、64、124、淡赤褐色を呈するもの－118、129、淡黄色－9、119、151、須恵質（灰褐色）－12、13、95、114。

備考・基底部が厚くつくられることを、第2段透孔が、小型であること。内面に部分的なナデをもち、基底部に横位の刷毛を施すことを特色とする。

Cタイプ1の例 9、10、11、12、13、21、56、58、59、64、95、103、114、118、119、124、129、135、151。

3段凸帯Cタイプ2（3－C₂）

形態・底部から、口縁にかけて外傾する。口唇部の形態は不明。1とくらべて、底端部の厚さがうすくしあげられている。

整形・内面、斜の刷毛を全面に施す。底端部まで一気に施すものが多く、底端部に横位の刷毛を施すものもある。又、部分的に縦ナデを施している。

透孔・切り残をもち、シャープな面は見られない。第2段透孔、第2段中位もしくは、下位に配置され、4 cm前後で円形を呈する。第3段透孔、第3段全面に及び大型である。

凸帯・上、下面とも比較的丁寧に付着されている。断面は稜の内側が、若干窪む。

色調・バラエティーに富む。半須恵質化し、オレンジ色と灰褐色を相半ばする例・17、18、19、53、93、139、143。須恵質化し、灰褐色を呈する例・71、85、86。淡黄色を呈する例・16、57、59、128。淡黄色を呈するか、半須恵質化した例・60、145。

備考・3 C－1とくらべて底端部がうすく若干、小型化する例・内面の刷毛目が、一気にひかれている例が多い。これらを総称して、3 Cタイプの2として区別する。

Cタイプの2の例 16、17、18、19、53、57、60、71、85、86、93、128、139、143、145。

3段凸帯Dタイプ（3－D）

形態・底部から口縁にかけて外傾し、口唇部は外湾する。口唇部は、若干斜上方を向きおおむね矩形を呈するが、中央がわずかに窪む。

整形・内面は口唇部横の刷毛、その他は全面に斜の刷毛、底端部は横位の刷毛を施すものもある。第2段から第4段下位に縦のナデを施す。外面は縦の刷毛、底端部横ナデ、口唇部は内外面共横ナデ。

透孔・第2段透孔－第2段中位もしくは下位に配置され、5 cm前後の中型で円形を呈する。第3段透孔－第3段下位（ほぼ第3段全域に及ぶが）に配置され大型で円形を呈する。第4段透孔－第4段下位に位置され、2 cm前後の小型で円形を呈する。おそらく一対にはならず単独で配置されているものであろう。切り口は下段と同様シャープである。

凸帯・上、下辺とも比較的丁寧に着されているが、下辺はやや雑である。断面はおおむね、矩形を呈するが若干の窪を呈する。

色調・赤褐色を呈する例、15、140、141、須恵質で灰褐色を呈する。例、134

備考・3 Dタイプは、第2段透孔が中型であり、外面底端部に横ナデを施し、口唇部は曲線的に外反することを特徴とする。

Dタイプ 例、15、134、140、141、148。

3段凸帯Eタイプ(3—E)

形態・比較的小さな底部からわずかに外傾しつつ口縁に至る。口唇部は、斜上方に外反し、端部は矩形を呈する。

整形・内面は全体に斜の刷毛を施しており、口唇部と底端部は、横位の刷毛を加えている。内面にナデをまったく施していない。外面は縦の刷毛、底端部に部分的な横ナデを施す。口唇部は内外面共横ナデ。

透孔・第2段中位に配置され、中型で円形を呈する。第三段透孔は、第3の中位にあり、切り残しをもつが、部分的に切りっぱなしでシャープな切り口をもつものもある。

凸帯・おおむね、矩形をなすが稜が盛り上り凹型を呈する部分もある。上、下辺とも比較的丁寧に着されている。

色調・すべて須恵質である。灰褐色を呈する例—76、122、部分的に淡いオレンジを呈する。例—89、97、半須恵質で大部分が、淡黄褐色を呈する。例—1。

備考・3 Fタイプの大部分は、3 Eタイプの内面に縦のナデを加えたものであると考えることができる。

例・1、33、76、88、97、100、122、164。

3段凸帯Fタイプ(3—F)

形態・比較的小さく造られた底部から直線的に口縁に移行し、口唇部は強く外反する。口唇端部はおおむね矩形を呈する。

整形・内面は口唇部に横の刷毛、それ以下には角度のついた斜の刷毛、底端部は横位の刷毛を施す。口縁部から第1段中位まで縦のナデを加える。外面は縦の刷毛、底端部に一周もしくは、部分的な横ナデを施す。口唇部は内外面共横ナデ。

透孔・第2段透孔—第2段の下位に配置され4～5cmの中型で、円形を呈する。第3段透孔—第3段下位に配置され比較的大型で、円形を呈する。いずれも、切残し部分をもつ。

凸帯・上辺に較べて下辺がやや雑に着されている。断面は、中央が若干窪む。

色調・淡い赤褐色を呈するもの—107、142、半須恵質化し淡いオレンジ色と灰褐色を相半ばするもの—35、89、144。

備考・3 Fタイプは、本来独立したものでなくどのタイプにも属さないものの集合体と、3 Eタイプ内面に縦のナデを加えたタイプが同居している。

Fタイプ—35、89、106、107、138、142、144、149、163。

例・3－Eタイプにナデを加えたもの－89、106 6、107、138、144、149、その他－35、142。

朝顔Aタイプ

形態・第1段が比較的低く、安定した感があり、ほとんど垂直に立ち上がる。肩部は若干の丸味をもって内傾する。花状部は大きく外反する。口縁部はほぼ垂平に大きく広がる。4段凸帯を有する。

整形・外面は肩部を除いて全面に縦の刷毛。肩部は横或は斜のナデ。内面は肩部を除いて斜の刷毛。肩部は横或は斜のナデ。花状部口縁は横の刷毛のち横のナデ。

透孔・第2段透孔は第2段下位もしくは中位に配置され3cm前後の小型で円形を呈する。第3段透孔は第3段のほぼ全域にわたる。円形もしくは隅丸方形、第4段透孔は4cm前後で円形。第2～第4段の透孔はいつでも再調整されている。

凸帯・比較的丁寧なナデで付着されている。断面は概矩形を呈する。

備考・基部が低く比較的安定した形態を示す。又基部を厚く作っていることを特色としている。123は5段凸帯を有する例であり円孔の穿ち方、底部の造り、内部整形等この類に属する特色が多いが、花状部が外面までナデを呈する点、或は花状部の形体（花状部凸帯で角度を変えること、口唇部の開き）等異なる点も有する。

例・14、31、55、94、102、109、131、146。

朝顔Bタイプ

形態・比較的小さな底部から直線的に外傾し肩部に至る。肩部の形態は不明。花状部は凸帯の付着されている位置で角度を変え口唇部にかけてカーブを描いて外反する。比較的小さい。各凸帯間の間隔が大きい。

整形・内外面共縦の刷毛、内面は底部から第2段上位まで縦のナデを加える。花状部は外面は概縦の、内面は斜の刷毛、内面の口縁は横の刷毛、口唇部は内外面共横のナデ。

透孔・第2段透孔、第2段中位に配置され大型であり円形、いつでも切ったままで再調整されていない。

凸帯・比較的丁寧なナデで付着され断面は矩形を呈する。

備考・全体の安定感がなく、刷毛目は粗く、透孔は大きい。花状部は比較的小型である。
例（27、28） 43。

朝顔Cタイプ

形態・小さな底部から直線的に肩へ移行する。肩はわずかなふくらみをもつが直線的にくびれる。花状部は直線的にわずかな傾斜をもって立ち上り口縁部は曲線を描いて外反し端部は矩形を呈する。

整形・外面は肩部を除いて縦の刷毛、肩部は横の刷毛、内面花状部は横域は斜の刷毛、肩部は斜のナデ、それ以下は縦の刷毛の後縦或は斜のナデ。

透孔・透孔の配置 規模はAタイプと同様であるが第4段はない。

凸帯・比較的丁寧に付着され断面矩形を呈す。

備考・3段凸帯をもち全体が小型である。焼成が非常にもろい。

例・26、91。

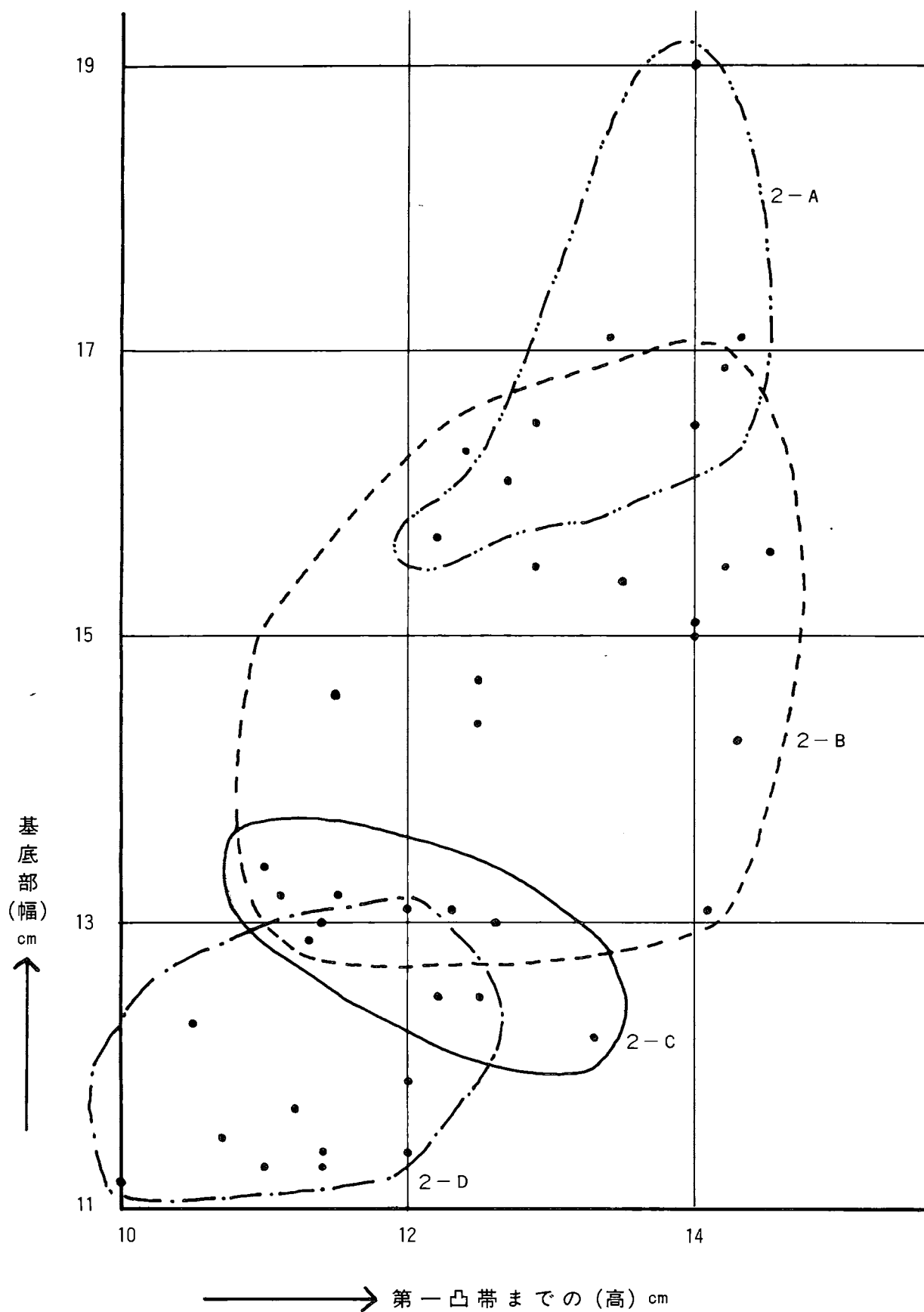
2段凸帯をもつ埴輪はAが最も大型であり、B→C→Dと小型になっている。この状況は基底部と、第1凸帯までの比率表（Fig、36）をみると歴然としている。しかもこの変化は、基底幅よりも、第1凸帯までの高さの方がはげしい。Aは内面の全面に刷毛を施し部分的にナデる手法をとるが、B、Cは、中位以上は刷毛を施すが、中位以下にナデを施すという手法をとるものが多い。Dは全面にナデを施す。これからA→B・C→Dという手法的な流れをみることができる。

3段凸帯をもつ埴輪はほとんど大小の区別が無い。内面の整形をみると、Eはナデを施さず、刷毛目のみが全面にみられる。逆に大部分にナデを施すものはBタイプである。他は部分的にナデを施すものが多い。第3段にみる透孔は総じて大型であるが、第2段のそれは、大、中、小の3種がみられる。大は、Aタイプにみられ、内面のナデも一部施される程度である。中は、D、E、Fタイプにみられる。D、Fの内面に施されるナデは中間位にみられ、上下端に刷毛目がみられる。小は、B、Cタイプにみられ、大部分にナデが施されるものである。これから、E・A→D・F→C・Bの手法的な流れをみることがでできる。

朝顔形円筒埴輪は、花状部に差が大きい。Aタイプは直線的に開いていき、口縁に至って大きく水平に開く。Bは、花状部中央の凸帯でくの字状に折れあまり大きく開かない。Cは大きく開くが、AとBの中間を示す。Bは、外面の刷毛目が粗く、2段凸帯のBタイプと同様の手法によっている。花状部の形態からA：B、Cの流れをみることができる。

透孔の穿ち方には、内面に切り残しをもつもの、切りっぱなしでシャープな面をもつもの、内面を再調整し切り口の断面が山形を呈するものなどがみられる。内面に切り残しをもつものは、2—A、3—A、C₂、D、E、F、朝—Aタイプである。再調整を施すものは、2—D、3—B₁、B₂、F、朝—Cタイプにみられる。切りっぱなしでシャープな面をもつものは、2—B、C、3—A、B₁、C₁、D、E、F、朝—A、Bタイプである。このうち重複しているものは、3段凸帯を有する例に多くみられる。内面に切り残しをもつものは、大型であり、内面に刷毛目を多く施す例が主体である。再調整を施すものは、小型であり、内面はナデを主体とした例である。シャープな切り口をもつものは、大、中、小型に亘り、内面は刷毛目とナデを相半する。

これらを総括すると、2—A・(3—E→3—A)・朝—A、(2—B→2—C)・(3—D・3—F)・朝—B、3—C₂→3—C₁、2—D・(3—B₁→3—B₂)・朝—Cの4系統が認められ、前に記したグループほど古い要素をもつと考えられる。これらの色調は前者ほど淡く、後者ほど赤褐色系統が強い。このことも前のグループが古いことを裏づけている。また、須恵質埴輪は部分的に須恵質化したものも含め、1系統に限らず全体にみられる。内面調整の差は、形態上の差・透孔の穿孔方法の差等、各個体間の差を内包して



第 36 図 二段凸帯埴輪基部幅と第一凸帯までの高さの比率

おり、これに時期差が認められる。このように、鎧塚古墳には内部整形に全面刷毛目がみられるものから、全面ナデを施すもの、形態上では大型で円筒形を呈するものから、小型で底部から口縁まで直線的に開いてゆくものまでの埴輪が存在するといえる。

埴輪に時期差があるということは、換言すれば時期差をもって埴輪を樹立したといつてよい。埴輪の配置状況をみると、後円部南半では、内面調整にナデを多用する埴輪であつて、同一形態を示すものが数本集中して樹立されており、ナデの使用が少ない埴輪は、各形態のものがわずかにみられるにすぎない。逆に後円部北半では、同一形態が集中することなく各形態が交互に配されている。このように、後円部南半と北半では埴輪の配置状況が異なり、南半では新しいタイプが主体をなし、北半では古いタイプが主体をなしている。その中でも特に、後円東南部第2次墓前祭祀社東側で、最も新しいと考えられる、内面全面にナデを施し、小型である2-Dタイプが連続して樹立されている。これは後円部南半と北半との使用時期が異なることを裏づけている。さらに、埴輪の樹立の時期は、1次・2次の墓前祭祀社の存在と切り離して考えることはできない。墓前祭祀が埋葬儀式に伴うものであり、埴輪祭祀はこれに付随するものと考えられる。このことから墓前祭祀社が複数ヵ所存在するということは、埋葬が複数回行なわれたことを示すものといえる。よって、それに伴う埴輪祭祀も複数回実施されたとしてさしつかえない。

以上のことから、鎧塚古墳における埴輪祭祀＝埴輪の樹立は、複数回行なわれた埋葬に伴い、少なくとも2回行なわれたと推定される。

b. 土 器

鎧塚古墳から出土した土器は、いづれも墓前祭祀社に伴うものである。器種は、須恵器器台・須恵器無蓋高杯・土師器高杯・土師器杯・土師器埴（壺）等である。

器台……第一次墓前祭祀出土須恵器器台は高杯型器台である。杯部の形態は半球形を呈し深く、口縁端部が段を成し、丸く仕上げられて外方へ屈曲する。脚部は相対的に短く、曲線を描いてハの字形に開き、端部は口縁端部と同様、段を成して丸く仕上げられている。透孔は三角形、逆三角形の2孔を直線上に配し、相対称を成す。凸帯は凸帯として付着されており、相対性によって凹凸をなしているものではない。文様帯は凸線と櫛描波状文によって構成されており、脚端部まで配されている。これらの特色は陶邑Ⅰ型式1段階から2段階にみられるものである。

第2次墓前祭祀出土須恵器器台も高杯型器台である。1次例と全体の形態は大きく異ならないが、端部に凸帯を付さず丸味をもたない。口縁端部は直縁となる。杯部は依然として深い、直線的なプロポーションを示す。透孔は、長方形の2孔を直線上に配している。

凸帯は上下を凹めることによって相対的に隆起したようにみせている。文様帯は凸線と櫛描波状文によって構成されており、やはり脚端部まで配されている。これらの特色は、1次例よりも新しい要素が多く、陶邑Ⅰ型式2段階から3段階に比定できよう。

須恵器高杯……第1次墓前祭祀出土須恵器高杯は無蓋高杯であり、杯部は深く、大きい。杯部下半部外面は回転ヘラ削りが施され、内面は回転ナデが施されている。杯部には1本の凸帯が配されるのみで文様体を構成しない。脚は大きく外反し、端部は矩形を呈している。また脚部には四方に長方形の透孔を配している。暗赤褐色を呈し、白色の微粒子を多量に含み軽い。これらの特色から陶邑Ⅰ型式2段階から3段階に比定し得る。第2次墓前祭祀址出土例も無蓋高杯で、杯部は深く、大きい。杯部下半部及び脚部外面は櫛目状の工具によって回転ナデが施されている。杯部には中位に2本の凸帯が上下を凹めることによって相対的につくり出され、その下位に櫛描波状文が配されている。脚は太く、短い。端部は段をなし、ほぼ直立している。また、脚部には長方形の透孔を3方に配している。青灰色を呈する。これらの特色から陶邑Ⅰ型式3段階に比定し得る。

土師器高杯……第1次墓前祭祀出土土師器高杯は6点（内大型1点）あり、ほぼ同一の形態を示す。杯部は1点（No.9）を除いて丸味をもった稜を有し、脚との接合ははめ込み式で、いわゆるヘソをもつ。No.9は杯底面と杯上半を接合させており、鋭い稜をもつ。しかし、脚は全て細長い形態を呈し、ふくらみはあまりもたない。

第2次墓前祭祀出土土師器高杯は14点（内大型1点）あり、杯部の形態から大型（No.11）口縁部の比較的大きなもの（No.12～15、17、19、20、23）、小さなもの（No.16、18、21、22、24）の3種に区別される。しかし、脚の形態はNo.11の裾部を除いて丸味をもって短く、同一の形態を呈している。接合の部位の差は、口縁径の大きさや杯部稜の形態に影響を与えるものであり、杯の形態を決定づけるものである。杯底面を脚と同一行程で成形したものは、比較的鋭い稜をもち、大きく外傾する杯部を支え得る。よってこの工法が用いられた高杯は口縁径の比較的大きなものであるといえる。一方、杯部の底中央がいわゆる底抜け状の穴を有する場合、底部の幅が狭く、体部はあまり傾斜しないものでなければならず、よって、全体にコンパクトな形態を呈することになる。大型高杯が前者の工法をとっていることも、これらの事情によるものである。

第1次、第2次各々の高杯は、いずれも鬼高式のものであるが、第1次例の技法に、古い技法の残影が見られ、相対的に第1次例が先行するものと考えられる。

土師器杯……第1次墓前祭祀出土土師器杯は、口縁部が直立し、底外面は削りによって成形されている。第2次例も成形は同一であり、第1次例とほとんど差は無いが、口縁部が外傾し、底部が浅く仕上げられる器種が加わる。いずれも鬼高Ⅰ式のものであるが、第2次例に新しい要素が加わることから、第2次例が後出のものと考えられる。

以上述べてきたように、第1次例と第2次例には須恵器、土師器共時期差が認められた。各々の土器の組み合わせにおける時期の序列はいずれも矛盾するものでなく、土器群に与え

られた時期は、そのままそれらを出土せしめた遺構に付与される年代となるものである。須恵器に与えられる時期（陶邑編年）は5世紀後半であり、土師器に与えられる時期は、最も古くみて5世紀末である（第2次例は6世紀初頭）。このことから、須恵器に伝世期間があったとすれば、土師器に与えられた年代が各遺構の時期を示すものであるといえるであろう。しかし、①各々に認められた時期差が、わずかなものであるにもかかわらず個々であっても、土器群であっても一貫したものであること。②これらを出土せしめた遺構の性格が、複数の埋葬に伴うものであると判断されること。③土師器が、必要となった時点で製作されたと思われるような粗い仕上げのものであること。④須恵器台がおおむね、陶邑の系統をみせるものの細部では異質な個所が少なからず見られ、別系統も考えられること。⑤第1次墓前祭祀址出土須恵器無蓋高杯にも別系統の技法が考えられ、さらに生焼けであり、白色微粒子を含むことから在地窯で焼かれた可能性があること、等の理由によりここでは、須恵器の伝世期間というものは考え難く、須恵器に与えられる時期は同一であると考えられるものである。

鎧塚古墳出土の埴輪は、底端に半円形の生焼け部分をもつものが存在すること、完全に須恵質化したものが存在すること、また、それらの量が多いこと等から窖窯で焼成されたと考えられる。後に述べるように鎧塚古墳における埴輪が、古墳祭祀に伴って配置されるものであるとすれば、古墳祭祀の開始された時点で窖窯が存在していた可能性は大である。

埼玉県内では、陶邑Ⅰ型式4段階に比定される、児玉郡ミカド遺跡(註1)、同長沖2号墳(註2)、出土の須恵器が存在窯で焼かれたものであることが判明している。類例は、行田市稻荷山古墳(註3)、児玉郡後張遺跡(註4)、出土の須恵器にもみることができる。これらの例から埼玉県内における在地窯は、現在まではⅠ型式4段階まで遡ることができるが、その初源は陶邑Ⅰ型式2段階の時期まで遡る可能性があると言える。

一方、墓前祭祀址土器群の大半を占める土師器について、古式須恵器を伴う例をとりあげ検討してみたい。

第1次墓前祭祀址出土の高杯にみられる、接合面にヘソをもつ類例は、TK216型式・陶邑Ⅰ型式2段階に比定される杯が出土した東松山市舞台遺跡4号住居址(註5)にみられる。調査者によると、「鬼高期の最も古いとした一群のものは、その伴出する須恵器から考えて5世紀の最終段階から6世紀の初頭に位置づけ」ている。

第2次墓前祭祀址出土の大型高杯の類例は、陶邑Ⅰ型式3段階に比定される無蓋高杯が出土した本庄市諏訪遺跡49号住居址(註6)にみられる。調査者は、出土須恵器をTK208～TK23型式に比定し、伴出の土師器は鬼高Ⅰ期の古い段階として須恵器伴出土器群中最も古いとしている。

このようにみえてくると、事例があまりにも少ないが、第1次墓前祭祀に伴う土器群は、第2次のそれより古く、陶邑Ⅰ型式2段階の須恵器と伴出する土器群であるといえる。また、第2次墓前祭祀に伴う土器群は陶邑Ⅰ型式3段階の須恵器と伴出する土器群であると

いえる。

次に、第1次、第2次墓前祭祀に伴う杯形土器は、行田市梅塚古墳（註7）にみられる。が、陶邑Ⅰ型式2、3段階の須恵器を伴出する集落遺跡では、蓋杯を模倣した杯は出土しておらず、前段階から継続した器形に限られている。集落遺跡での出現は、上里町東猿見堂遺跡（註8）にみられ、伴出須恵器は陶邑Ⅰ型式Ⅳ～Ⅴ段階に比定される時期である。あるいは、この器種の初源は古墳に伴う儀器として発生したのかも知れない。また、この器種は鬼高Ⅰ期の全般に亘ってみられ、存在期間の長いものである。

以上、鎧塚古墳出土の土器は、2つの墓前祭祀を構成している土器群に分かれ、その間には時期差が認められた。また、在地窯の存在が陶邑Ⅰ型式2段階まで遡る可能性があり土師器の他遺跡での須恵器との伴出出土例が、鎧塚古墳出土の須恵器との伴出出土例と定期的に同一であることから、その年代は第1次墓前祭祀土器群が5世紀後半～末、第2次墓前祭祀土器群は5世紀末に位置づけることができる。

2. 墓 前 祭 祀

鎧塚古墳における墓前祭祀は、墳丘裾部、埴輪列の内側に2ヵ所存在し、各々に時期差が認められることは、前に記したとおりである。

第1次、第2次墓前祭祀の設置位置が、後円部墳丘の中心からみて正しく北東、南東を指す位置であること、器台を中心として北および西に特に遺物の集中をみせること等は、墓前祭祀において、方向、方角の意識が強くはたらいっていることを示す。このことは、鎧塚古墳自体が前方部を西に向けていることと切り離して考えることはできない。また、各々の遺物群の組み合わせは、前に述べたとおり共通するものであり、墓前祭祀の規則性、規範性を示すものである。

このような中で、1基の古墳に時期差のある2ヵ所の墓前祭祀がみられることは、次の2つのことが推定される。1つには、同一事象に伴う行為としてとらえた場合、複数の埋葬が考えられ、1つには、墓前祭祀の実施される時点の問題としてとらえた場合、単一埋葬に伴う異質事象の回数としてとらえられ、古墳埋葬前・埋葬時・埋葬後のいずれかに当ると考えられる。以上のことと関連し、第1次、第2次の両者に遺物量の差がみられることについて、複数の埋葬を考えた場合には、両者の内的な差としてとらえられ、事象の回数として考えた場合には規範の差としてとらえられる。

鎧塚古墳では主体部がすでに削除されており、この確認はできないが、器種に規範があり、複数回の埋葬に伴う事象として考える方がより妥当性をもつ。

埼玉県内の古墳から古式須恵器が出土した例は、現在までのところ5例知られているに

すぎない。比企丘陵地方では、東松山市の諏訪山1号墳から甕が1点出土している(註9)。直径20m前後の円墳であり、2ヵ所の粘土槨を有する。遺物は墳頂部からの出土である。児玉地方では、児玉郡児玉町の長沖2号墳から無蓋高杯1点が出土している(註10)。直径23mの円墳であり、周溝内からの出土である。土師器杯1点が共伴している。行田・熊谷地方では先ず、行田市須加大稲荷1号墳から甕が1点、および甕片7点が出土している(註11)。直径26m前後の円墳である。行田市埼玉の稲荷山古墳からは、19個体分が出土し、土師器甕が伴出したと伝えられている(註12)。同じ古墳群中の梅塚古墳からは、蓋杯3組が出土している(註13)。直径29mの円墳で、周溝内からの出土である。土師器杯2点、土師器埴1点が共伴している。

出土須恵器は、いずれも主体部からではなく、墳丘上、もしくは周溝内からの出土であり、墓前祭祀に伴う土器である。器種は、諏訪山1号墳、大稲荷1号墳、稲荷山古墳で甕が、稲荷山古墳、長沖2号墳では高杯が共通しており、古墳祭祀供献土器としての器種の選定がみられる。

個体数は、諏訪山1号墳で1、長沖2号墳で1、大稲荷1号墳で1(8)、梅塚古墳で3(6)、稲荷山古墳で19を数え、墳丘規模が大きければ個体数が多く、埼玉地方の古墳に出土数が多いことがうかがえる。出土数は偶然性を伴うが、ある程度古墳の存在する地域および墳丘の規模と須恵器の個体数は正比例すると言えるようである。各々の須恵器は、長沖2号墳例を除いて、TK23型式(陶器第1型式4段階)に比定し得るものである。長沖2号墳例はこれよりわずかに新しく、TK—47型式(陶器第1型式5段階の初)に比定される。伴出土師器の前後関係もこれとほぼ同一である。

3. 火 山 灰 に つ い て

鎧塚古墳の周溝に推積するテフラは3層認められる。重鉱物組成は、上層が、シソ輝石79.9%、普通輝石11.8%、不透明鉱物(磁鉄鉱)6.2%、中層がシソ輝石85.7%、普通輝石11.5%、不透明鉱物(磁鉄鉱)2.8%、下層が角閃石47.9%、シソ輝石38.3%、不透明鉱物(磁鉄鉱)7.6%、普通輝石2.9%、緑簾石0.8%を示し、上位2層は同様のシソ輝石>普通輝石>磁鉄鉱の組成を示す。下層位はこれと異なり角閃石を主とする。これらの組成から各々の供給源は上位2層が、浅間山、下層が榛名山二ッ岳に求められる。そして、上層は淡白色を呈し、“A”に、中層は砂状を呈し、暗茶褐色を示すことから“B”に同定された。また、下層は普通輝石、緑簾石を含有することから、榛名山二ッ岳火山灰のうちでも、いわゆる“FA”に同定された(註14)。

さて、これら3層のテフラのうち、鎧塚古墳の築造期に最も近接した“FA”について、

検討してみたい。

埼玉県内はその分布範囲の末端に位置し、よほど条件が揃わない限り、層として判別されない地域にあたる。このことから実際、層として確認することが不可能であり、報告例は知られていない。また、さして、火山灰についての問題意識がもたれていなかったことも事実であろう。この様なことから、群馬県下の事例をもって検討材料とせざるを得ない。現在のところF Aの降下時期は、群馬県内の火山灰の検出された遺跡から出土した土器の編年から、6世紀第1四半期後半から第2四半期初頭に比定されている（註15）。

F A降下以前の集落遺跡として赤城村勝保の寺内遺跡（註16）、佐波郡境町の島海戸遺跡（註17）等が知られている。寺内遺跡は利根川左岸の段丘上に位置し、住居址10軒が検出されている。そのうち、覆土中にF Aが推積している6号住居址は、出土遺物に球胴で、わずかに外反する口縁をもった壺、外斜および内屈素縁の内面に放射状の暗文をもつ杯等がみられ、鬼高I期の古い段階に位置づけられるものである。島海戸遺跡は低台地上に位置し、内斜口縁および、体部が深く、口縁のほぼ直立する杯が出土しており、やはり鬼高I期の古い段階に位置づけられる。

F A降下の時期とほぼ同一時期とみられる例は、群馬県保渡田遺跡8号住居址（註18）が知られている。外稜の拡がり口辺をもつ杯、あるいは、内斜口縁で小型化の傾向をもつ杯、頸のしまりがあまりなく、底部に急にすばまる踵等が出土している。これらは、鬼高I期の盛行期のものである。

一方、F A降下前と降下直前時の様相を呈る古墳群としては、渋川市行幸田古墳群（註19）が知られている。降下前の土器群は、2、4、7号墳で、口辺をつまみ上げたり、ホゾ接合した高杯、外斜口縁で放射状の暗文をもつ杯、等和泉的な要素が強い。降下直前とみられる例は、3号墳で2重口縁をもつ甕、内斜口縁をもった杯、12号墳で外斜口縁で平底をもち、深手の杯、等が出土し、鬼高I期の初現的な様相を呈している。

鎧塚古墳の場合、和泉期的な様相は、2、4、7号でみられたほど強くないにせよ、ホゾ接合等古い技法が残存しており、3、12号でみられた時期とほぼ併行するか、もしくは、わずかに先行し、両者の中間に位置する時期であろうと考えられる。また、周溝底とF Aの間に一層認められており、よって鎧塚古墳の場合、その造営からまもなくして、F Aが推積したものと考えられる。その時期は現在比定されている6世紀の第1四半期前後であるとされよう。

4. 鎧塚古墳の性格と問題点

鎧塚古墳は調査の結果、主軸長43.8mを計り、帆立貝式の前方後円墳であることが知れ

た。主体部はすでに削平されており存在しないが、挙大の礫が多量に出土したことから礫層を有していた可能性が高い。また、散逸しており実見することはできないが、主体部からの出土品として、鏡、玉類などが伝えられている（註20）。しかし、後円部円筒埴輪列の内側に2ヵ所の墓前祭祀址が確認され、それが古墳祭祀そのものに伴う事象であり、よって鎧塚古墳において2回の埋葬が、実施されたと考えられたのである。

鎧塚古墳造営の時期は、出土遺物から、その初源が5世紀後半から末に求められ、6世紀初頭まで継続したと考えられる。この時期は当地域の統轄者墳墓群・埼玉古墳群（註21）が出現する時期と同一、もしくは、先行する時期である。当地域で鎧塚古墳と同一の時期に比定される前方後円墳は、南河原村犬塚・とやま古墳（註22）、熊谷市奈良・横塚山古墳（註23）、羽生市村君・永明寺古墳（註24）、がある。とやま古墳は齊条古墳群の、横塚山古墳は別府古墳群（註25）の、永明寺古墳は村君古墳群の主墳であり、各々の古墳群の初源を示すものである。時期的に稲荷山古墳と併行、もしくは、先行する前方後円墳が、熊谷市奈良、同上中条、南河原村齊条、羽生市村君というように、利根川の南岸に一直線上に並び、各々が一定地域を画して存在しており、あたかも、背後の稲山古墳を護衛しているかのようである。このように各古墳は、稲荷山古墳を当地域首長墓とした、在地首長墓と考えられるのである。また、鎧塚古墳の墳丘規模、あるいは、墳丘を圍繞していた埴輪の大きさを、稲荷山古墳、とやま古墳と比較してみると、稲荷山古墳>とやま古墳>鎧塚古墳という関係を示し、使用する埴輪にさえも規制が及んだことを示唆している。

鎧塚古墳と同形態を呈する古墳のうち近在する例としてあげられる、群馬県太田市塚廻古墳群（註26）は、竪穴式の石室を有し、円筒埴輪列が一周するが、造り出し部が埴輪祭祀の主役となっており、横穴式石室が出現する前後の様相を呈している。この様な様相は、中原古墳（註27）にもみられる。これに対して、鎧塚古墳の場合は人物埴輪の配置位置が後円部西南側のくびれ部に面した墳頂であったと考えられ、上記の例と異なる。

また、やや先行する、とやま古墳では、人物埴輪はみられず、鎧塚古墳で人物埴輪のみ見られることは、当地域でこの時期に人物埴輪が出現したことを示す。帆立貝式前方後円墳であり、竪穴系の石室を有し、整然とした埴輪列も有し、土器の組み合わせ等に規格性をもった墓前祭祀も備ええた鎧塚古墳は、塚廻・中原より古く、横穴式石室を採用する以前の古墳祭祀のあり方を示しているものといえる。

以上の状況の中で、鎧塚古墳が特殊な須恵器高杯型器台を有して造り出し部でなく、墳丘裾部円筒埴輪列の内側で墓祭前址をとりおこなったことは、地域の中での規制が、ここまで及ばなかったことを示し、自らの意識が反映したものと思われる。また、同一の墓前祭祀の例は、大阪府堂山一号墳（註28）、にみられ、甘木市小田茶臼塚古墳（註29）等いずれも五世紀中葉から後半のものであり、この祭式の時期はさらに限定されるようである。

鎧塚古墳を圍繞する埴輪は、大多数が朝顔形を含めた円筒埴輪であり、形象埴輪は人物埴輪がわずかに存在するのみである。円筒埴輪は、技法上の特徴から各タイプに分類され、

時期差も認められた。そして、それらは墓前祭祀＝古墳祭祀との時期差と一致するものであろうと推論してきたのである。外面の2次調整は、ほとんど見られないが、朝顔形のなかに縦刷毛がわずかに見られる。最も特徴的なのは、須恵質埴輪の量が多いことである。赤褐色を呈する埴輪の中にも底端部外面に半円形の焼きむらが存在するものが多く、このことも鎧塚古墳における埴輪が窖窯で焼かれたものであることを裏付けるものである。

さて、鎧塚古墳墓前祭祀址から出土した須恵器と土師器について、考察の中では、両者の間に年代の差を求めず、逆に年代の差が無いものとして諸要素について検討した。その結果、須恵器の在地窯の存在が陶邑Ⅰ型式2段階まで遡る可能性があるとした。しかし、東北の仙台市大蓮寺窯跡（註30）例でみられるように、このことをもって当期から、継続的に須恵器生産が行なわれたとするものでは無い。武蔵において須恵器が多量に出土してくるのは、陶邑Ⅰ型式の最終段階である。また、鬼高Ⅰ期における模倣杯の出現期が古墳において遡るものであり、その初現は古墳祭祀に伴うものであることを結論づけた。古式須恵器と土師器が共伴する例が少なく、かなり短絡的なものであるが、その可能性は大であり、須恵器・土師器それ自体の問題と共に古墳祭祀の様々な系統も含めて、集落遺跡との関係までを、今後、資料の増加を待って補強したいと考えている。

註1、坂本和俊「ミカド遺跡の調査」『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会、昭和54年

三辻利一・高橋一夫「埼玉県内窯跡出土須恵器の胎土分析とミカド遺跡出土土器の産地推定」『研究紀要第1号』埼玉県立歴史資料館、昭和54年

註2、菅谷浩之「長沖古墳群」埼玉県児玉郡児玉町教育委員会、昭和55年

註3、柳田敏司・斉藤忠他「埼玉稲荷山古墳」埼玉県教育委員会、昭和55年

註4、増田逸郎・宮崎朝雄「児玉町後張遺跡の調査」『第10回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会、昭和52年

註5、井上肇他「舞台(資料編)」『埼玉県遺跡発掘調査報告書』第17集埼玉県教育委員会、昭和53年、「舞台(本文編)」『埼玉県遺跡発掘調査報告書』第18集埼玉県教育委員会昭和54年

註6、小久保徹「諏訪遺跡出土の古式須恵器について」『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集埼玉県教育委員会、昭和54年

註7、栗原文蔵・田部井功「天王山・梅塚古墳他周掘発掘調査概要」『資料館報』No.6 埼玉県立さきたま資料館、昭和50年

註8、未発表であるが、調査担当者外尾常人氏のご好意により、資料を実見させていただいた。

註9、金井塚良一『諏訪山古墳群』—東松山市文化財調査報告書 第7集—東松山市教育委員会、昭和45年

註10、註2に同じ

註11、栗原文蔵他「行田市須賀一大稲荷古墳群について」埼玉考古12号、埼玉考古学会、昭和49年

註12、註3に同じ

註13、註7に同じ

註14、新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テラフ層」『考古学ジャーナル』No.157、昭和54年

註15、石川正之助他「遺構の年代と火山噴出物の降下年代」『考古学ジャーナル』No.157 昭和54年

註16、都丸肇、井上唯雄『寺内遺跡』赤城村教育委員会、昭和50年

註17、小林敏夫「島海戸遺跡」『考古学ジャーナル』No.157、昭和54年

註18、井上唯雄、都丸肇「保渡田遺跡」『考古学ジャーナル』No.157、昭和54年

註19、松本浩一『空沢遺跡』渋谷市教育委員会、昭和53年

註20、熊谷市史編さん委員会『熊谷市史』前編、昭和39年

註21、註3に同じ。

註22、柳田敏司他「とやま古墳」埼玉考古学会、昭和42年

註23、増田逸郎他「横塚山古墳」埼玉県遺跡調査会報告第9集 埼玉県遺跡調査会、昭和46年

註24、栗原文蔵他「埼玉県羽生市永明寺古墳について」『上代文化』38号 国学院大学考古学会、昭和44年

註25、註20に同じ

註26、横塚克明、石塚久則他『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会、昭和55年

註27、斉藤忠「群馬県太田市高林古墳群」『日本考古学年報』三、昭和25年

註28、田代克己「堂山古墳群発掘調査概要」大阪府教育委員会、昭和48年

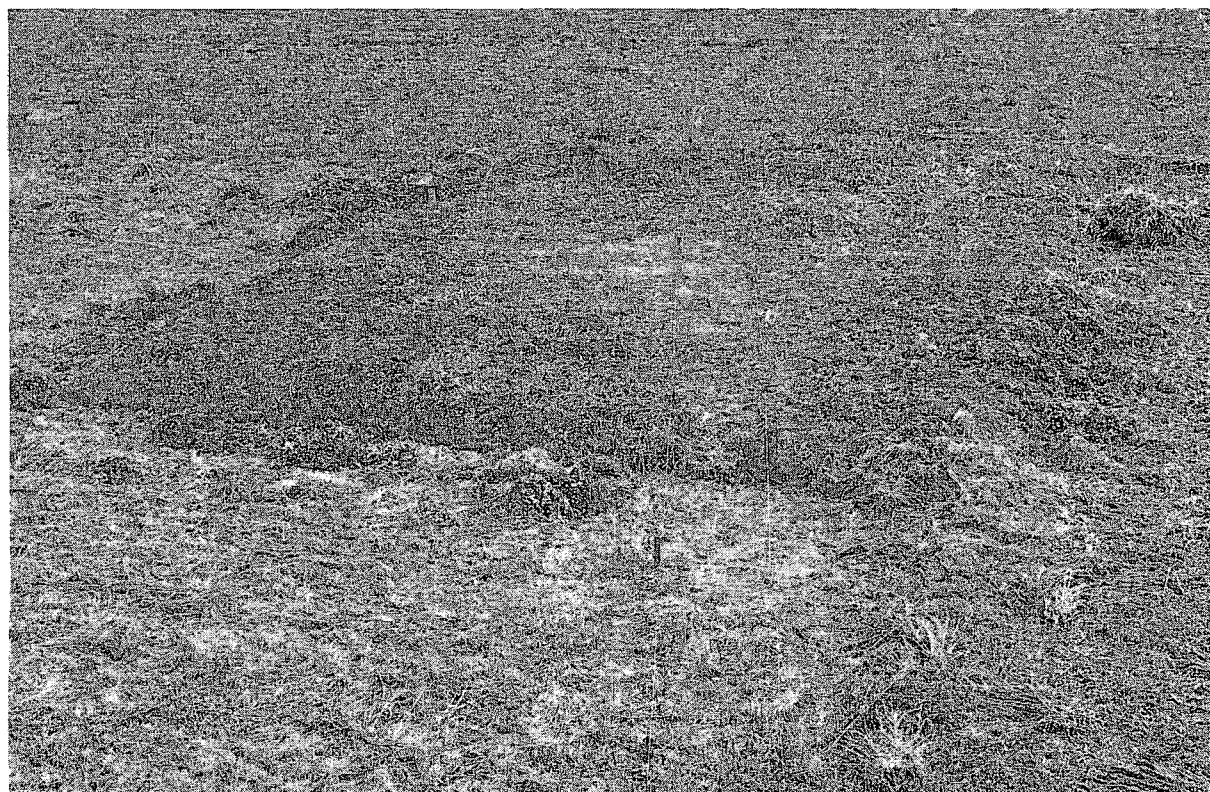
註29、「小田臼塚古墳」『甘木市文化財調報』第四集 甘木市教育委員会、昭和54年

註30、渡辺泰伸他「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』古窯跡研究会、昭和51年

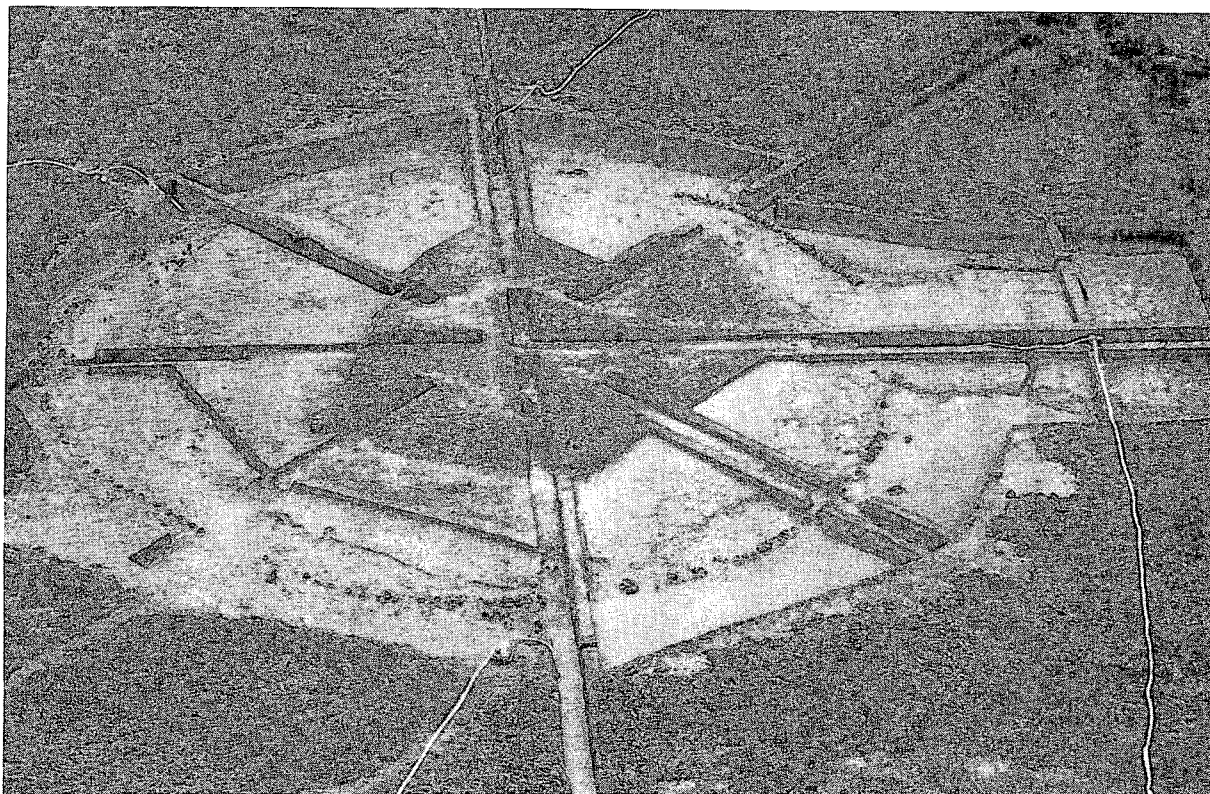
なお、須恵器の形式名は、主として中村浩氏「陶邑Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書』28、29、30輯を参照し、部分的に口辺昭三氏『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966年を参照した。



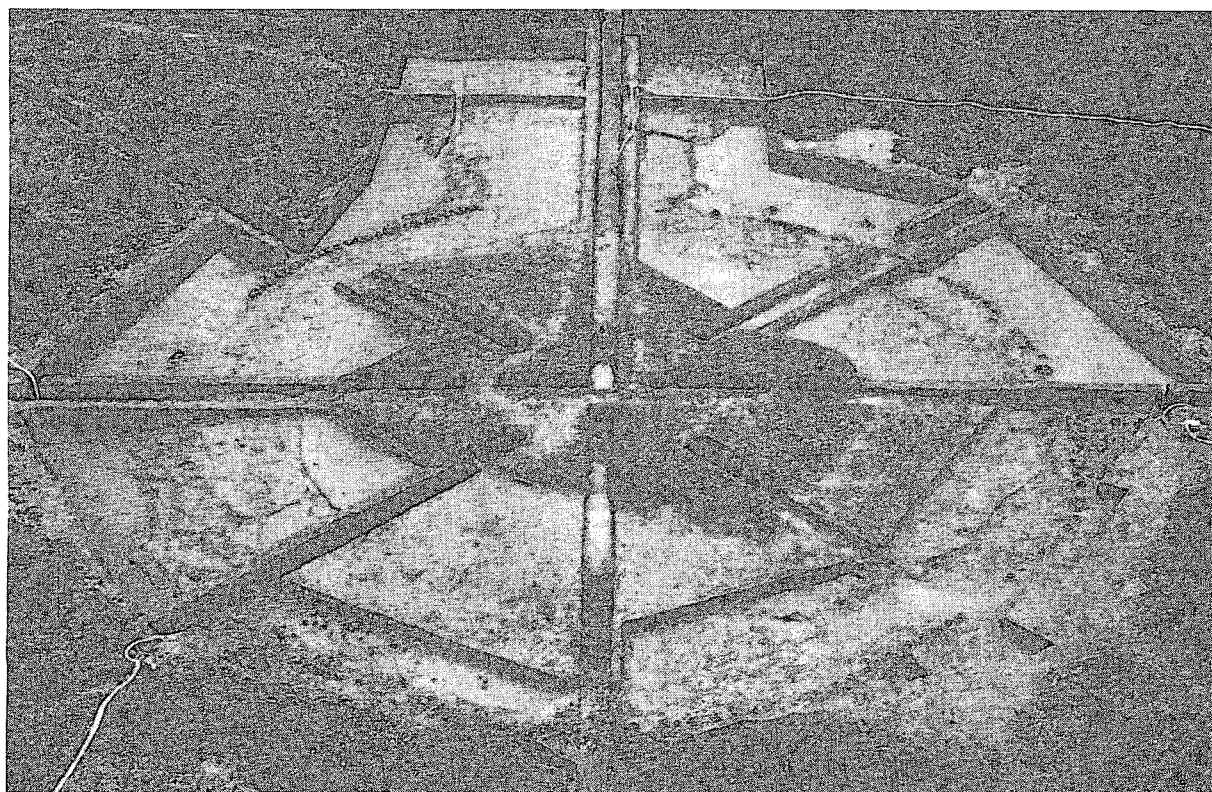
1. 航 空 写 真



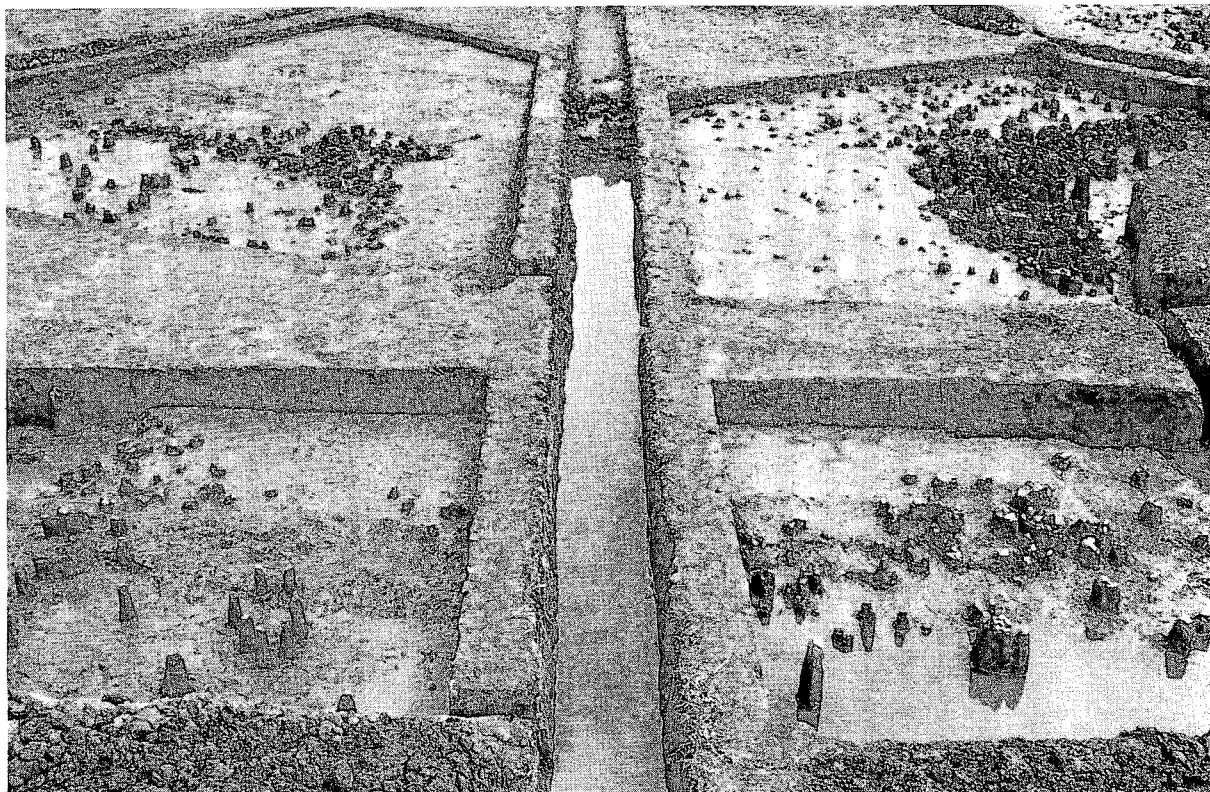
2. 発掘前全景 南より



1. 古墳全景北より



2. 古墳全景東より



1. 前方部埴輪出土状況 西より



2. くびれ部埴輪出土状況(2-4区) 北より



1. 後円部埴輪列（2－6区）東より



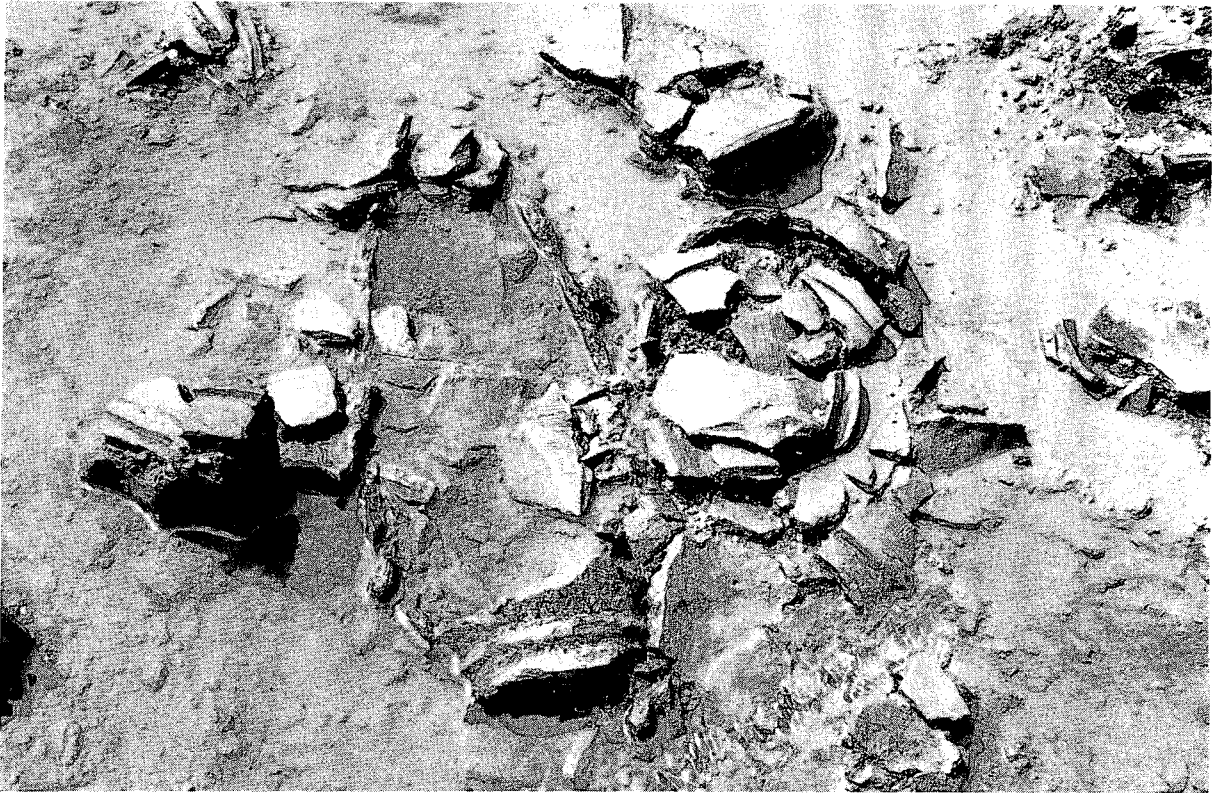
2. 後円部埴輪列（2－6区）南より



1. 後円部埴輪列（2-3区）西より



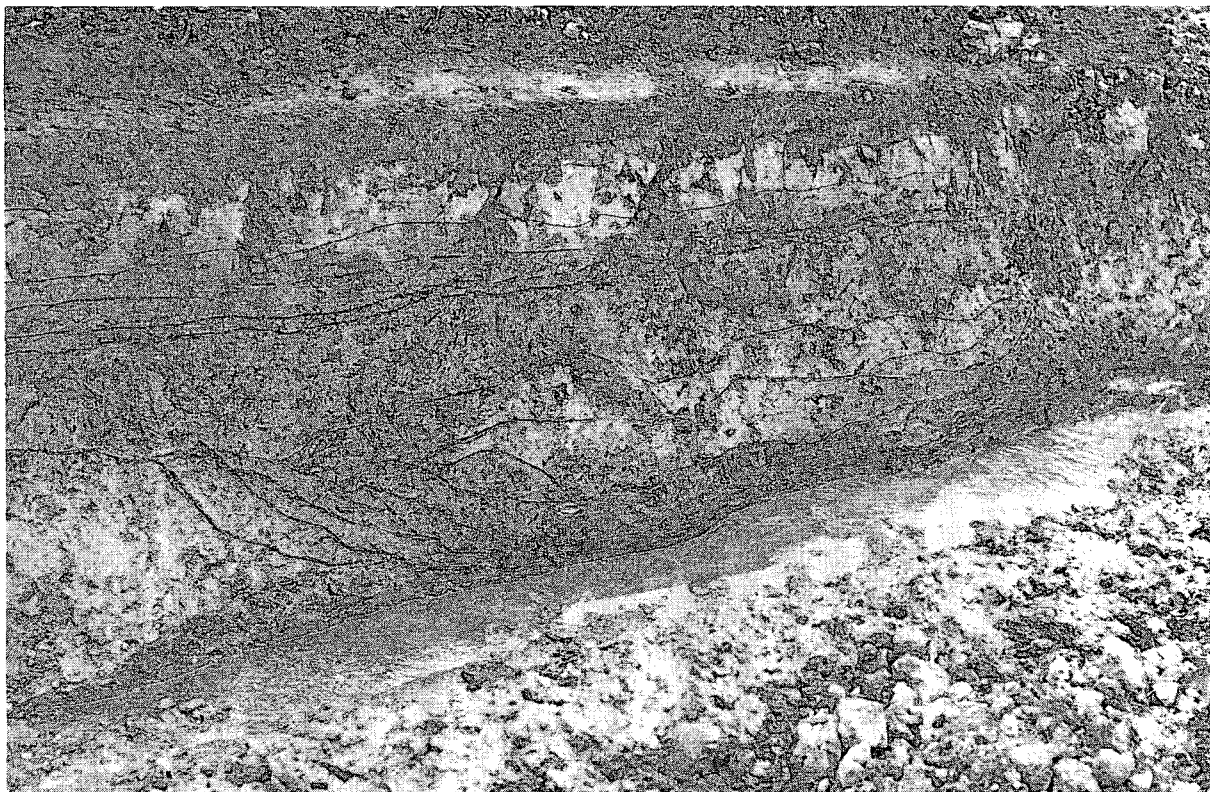
2. 後円部埴輪列（2-3区）東より



1. 朝顔型埴輪出土状況 (No.91)



2. 人物埴輪出土状況 (2-6区)



1. 周溝土層



2. 墳丘裾部埴輪設置状況(2-5区)



1. 第1次墓前祭祀
址遺物出土状況

2. 第1次墓前祭祀
址遺物出土状況
北より

3. 第2次墓前祭祀址遺物出土状況 北より

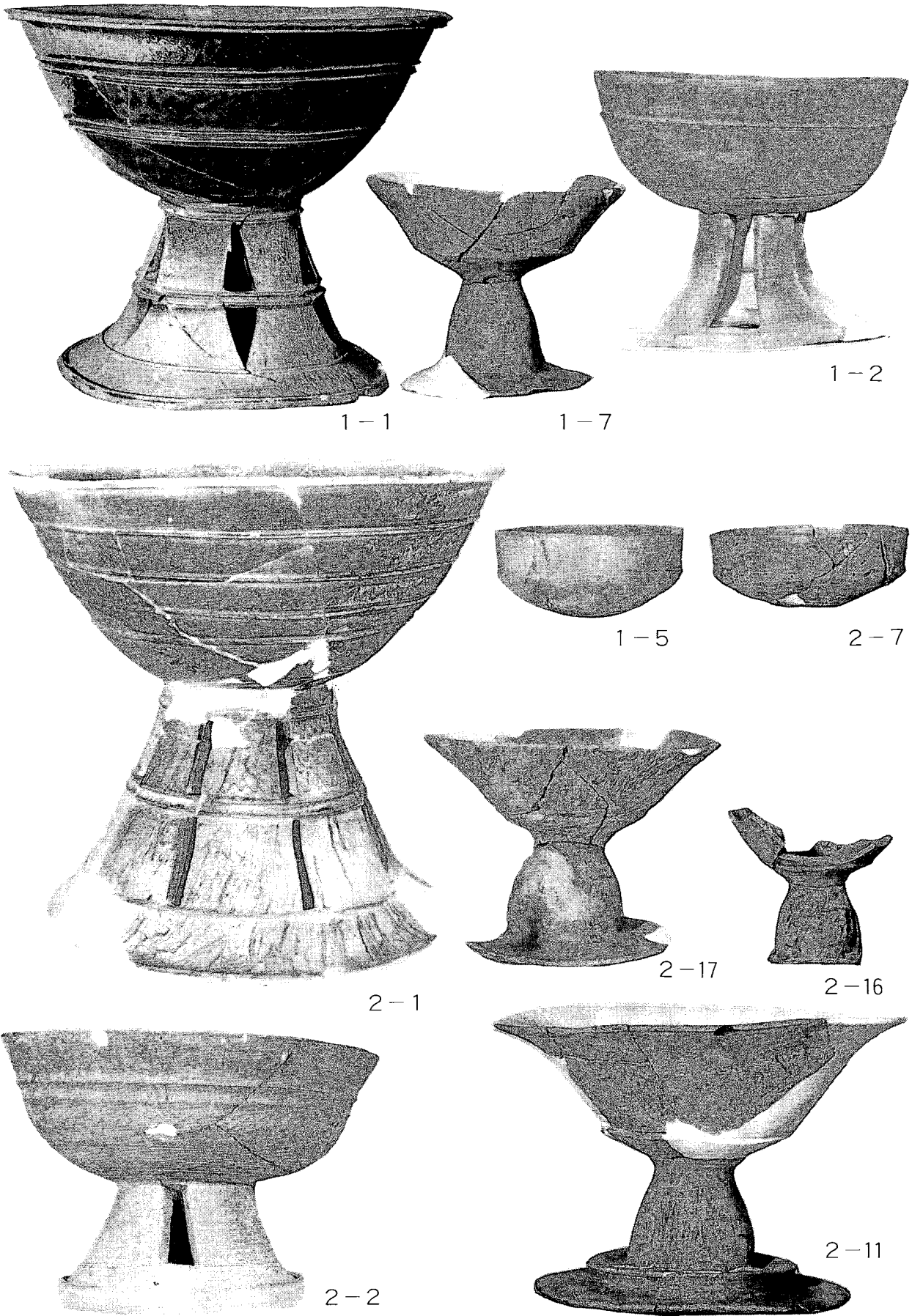




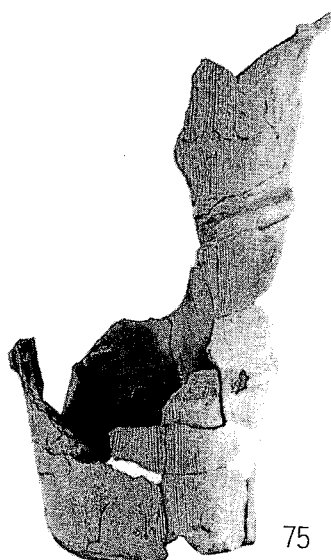
1. 第2次墓前祭祀址遺物状況 南より



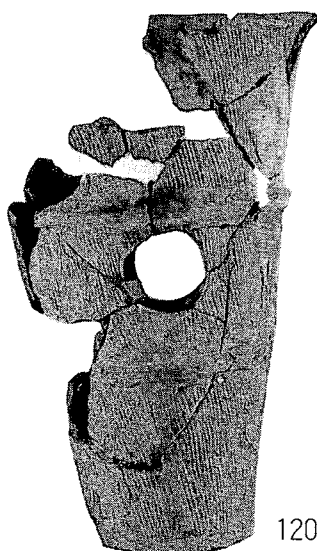
2. 第2次墓前祭祀址遺物状況 西より



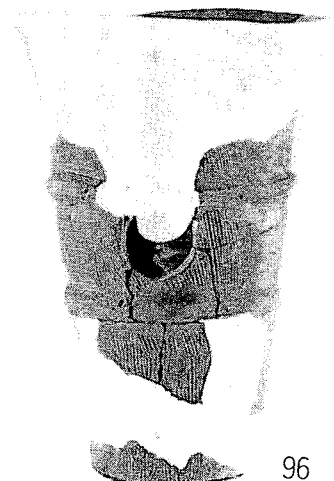
墓前祭祀址出土遺物



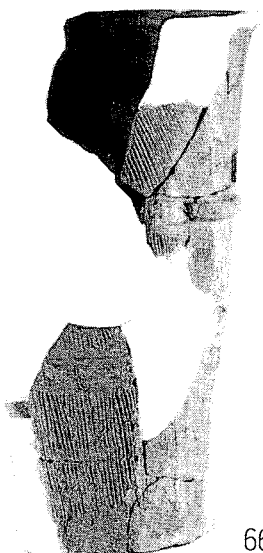
75



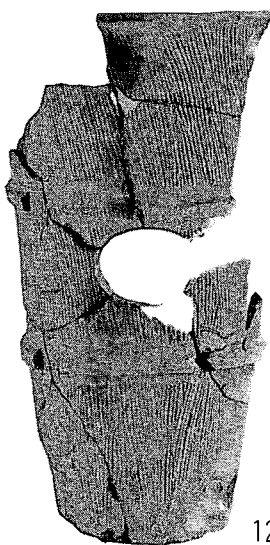
120



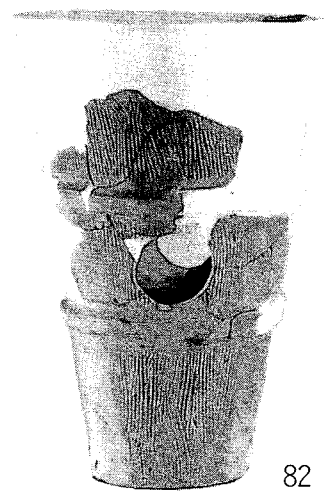
96



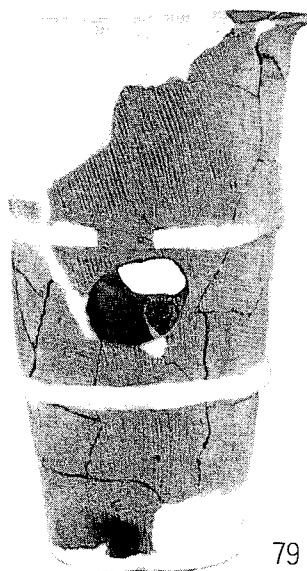
66



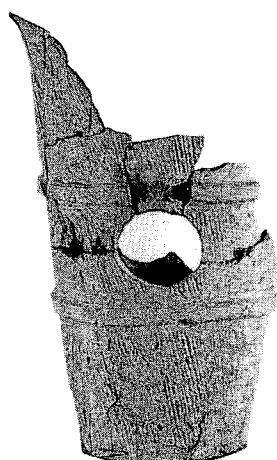
126



82



79

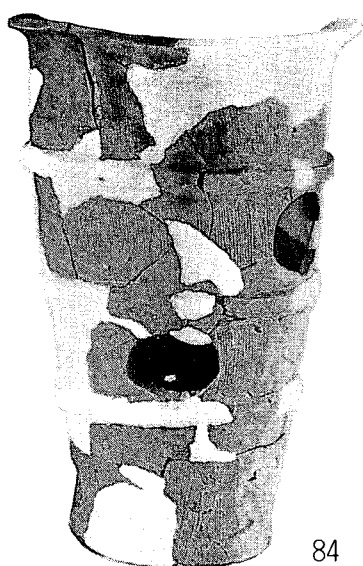


37

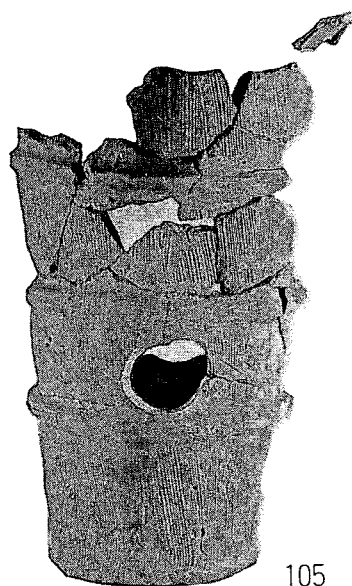


2

2段凸帯 A (75) B (66.79.120.126) C (37.96.82) D (2) 各タイプ



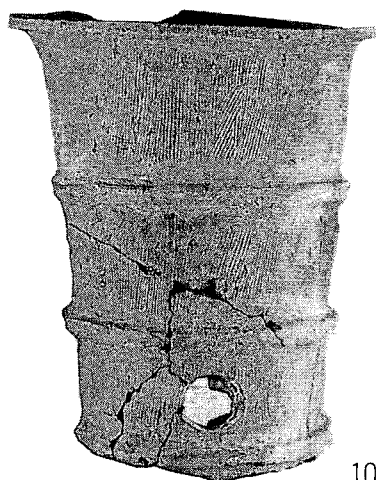
84



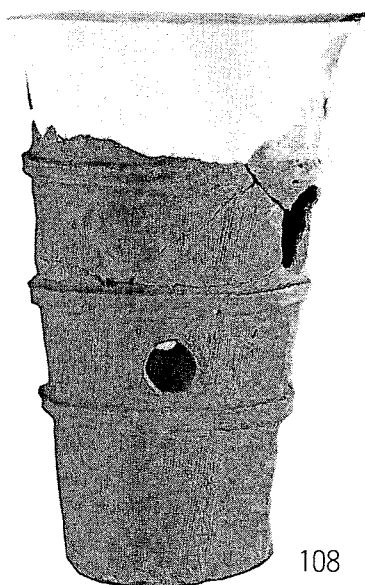
105



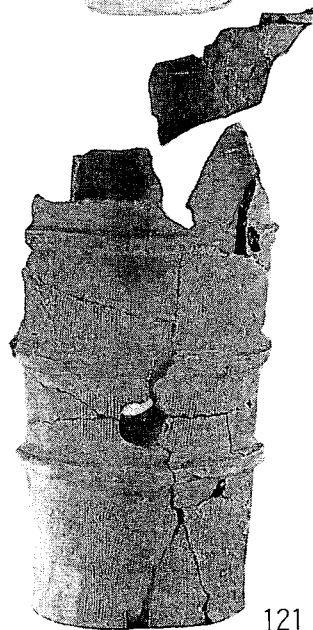
110



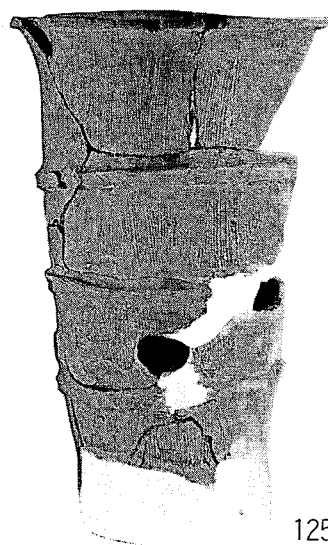
101



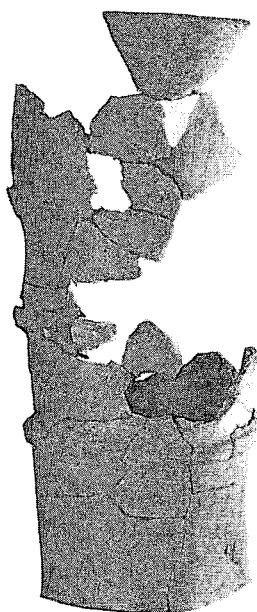
108



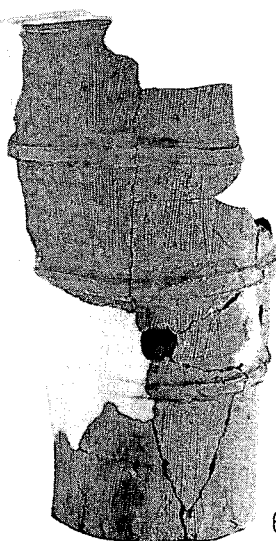
121



125

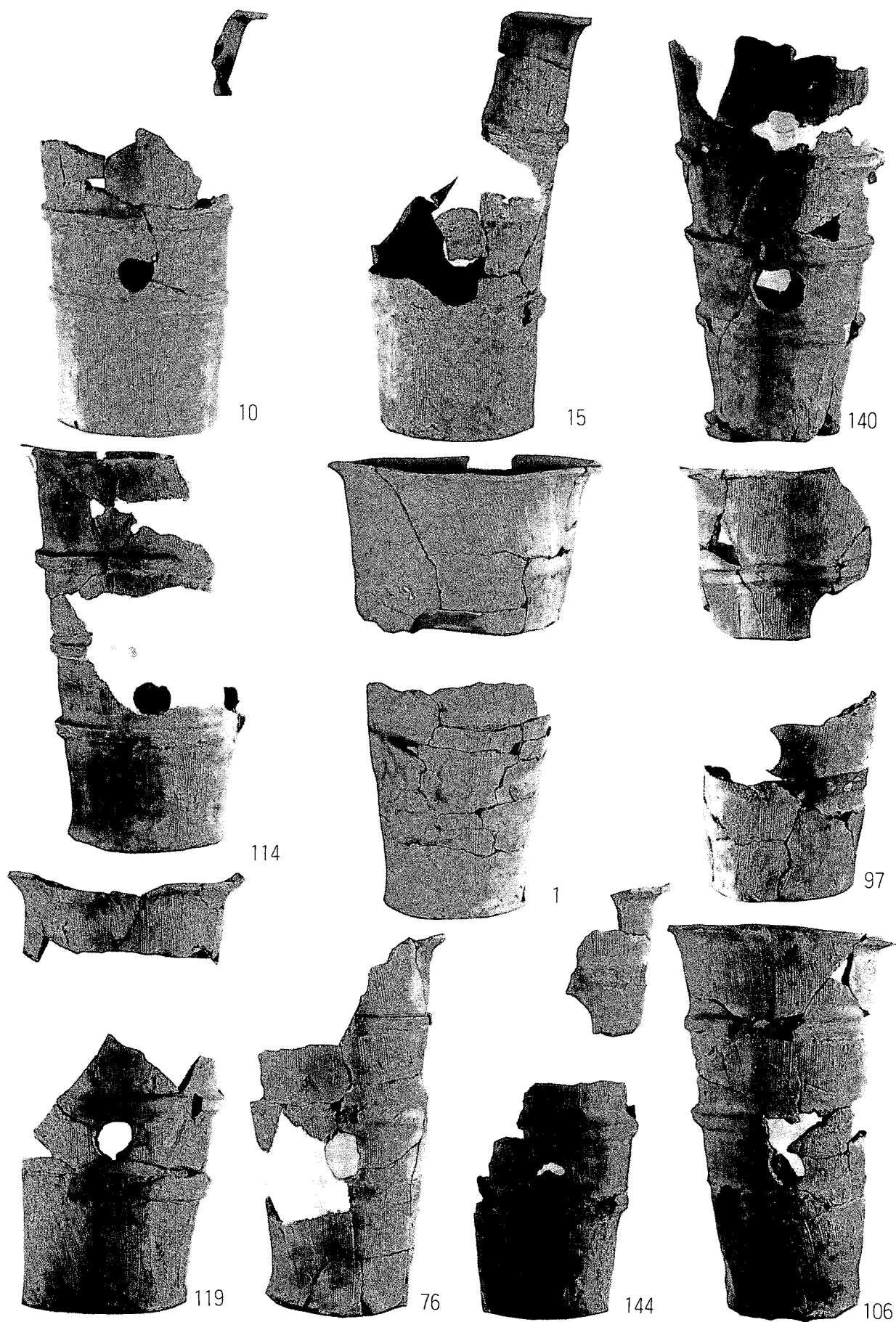


4

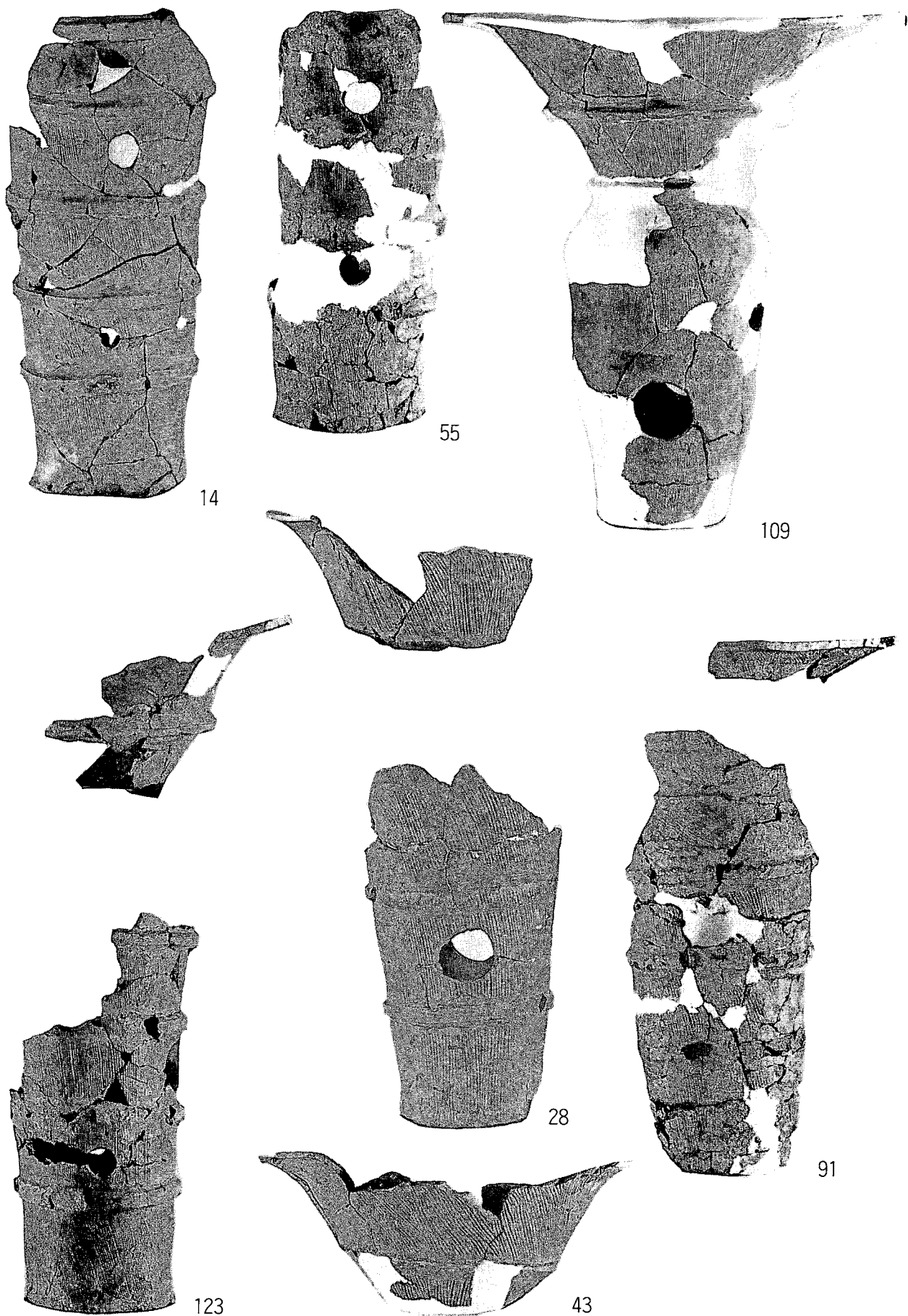


67

3段凸帯 A (84.105.110) B₁ (101.108.121.125) B₂ (4.67) 各タイプ



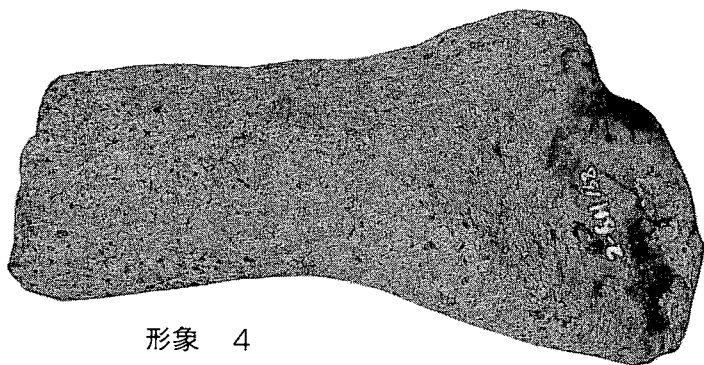
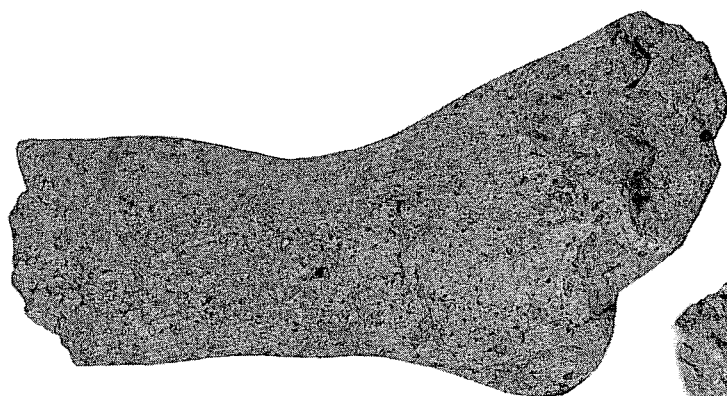
3段凸帯 C1(10.114.119) D(15.140) E(1.76.97) F(106.144) 各タイプ



朝顔形円筒埴輪 A (14.55.109.123) B (27.28.43) C (91) 各タイプ



形象 5



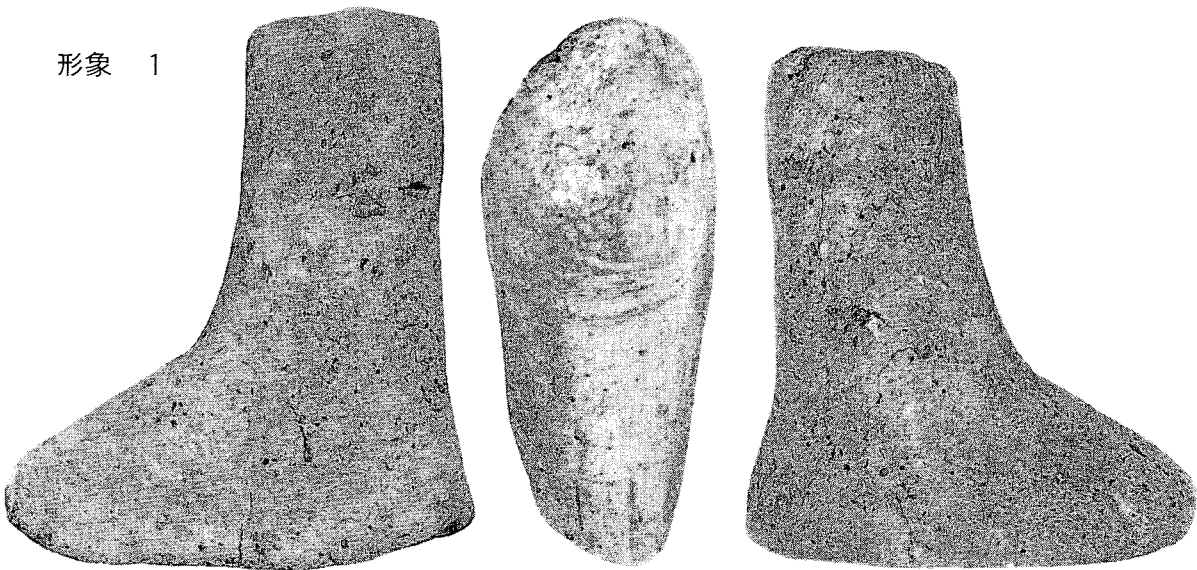
形象 4

形 象 埴 輪 (1) - 実 大

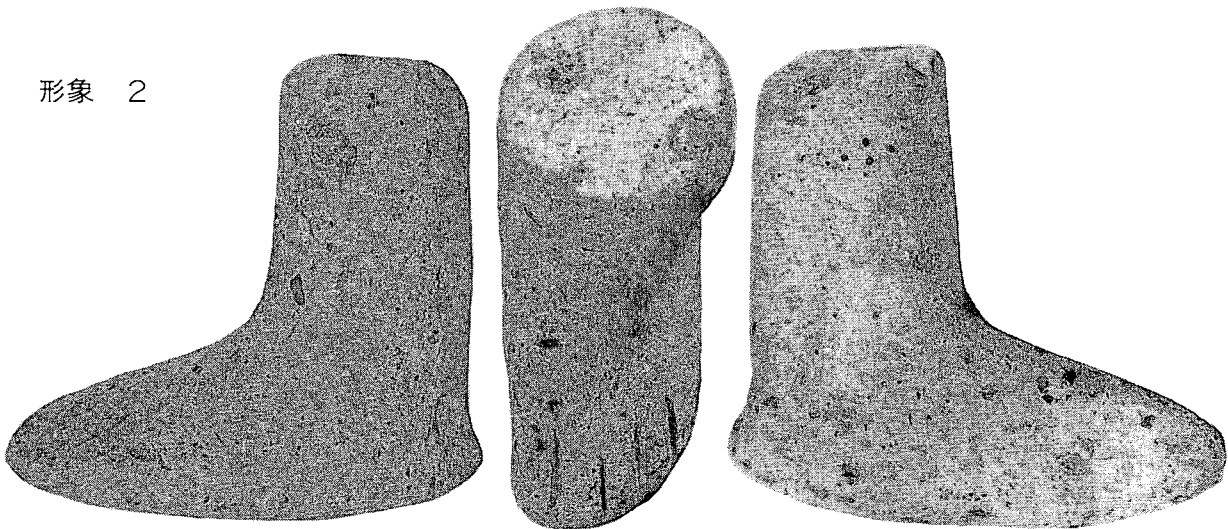
形象 3



形象 1



形象 2

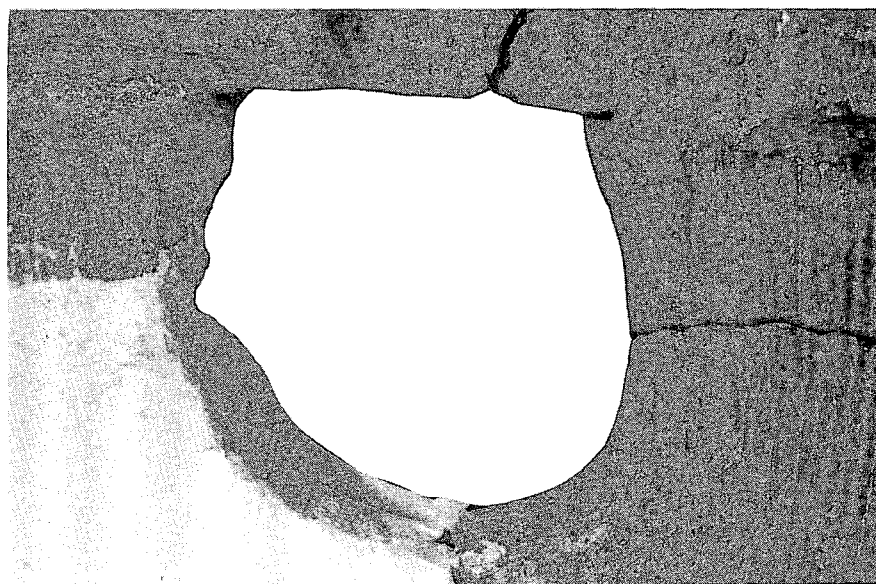


形象 埴 輪 (2) - 実 大

透孔形態

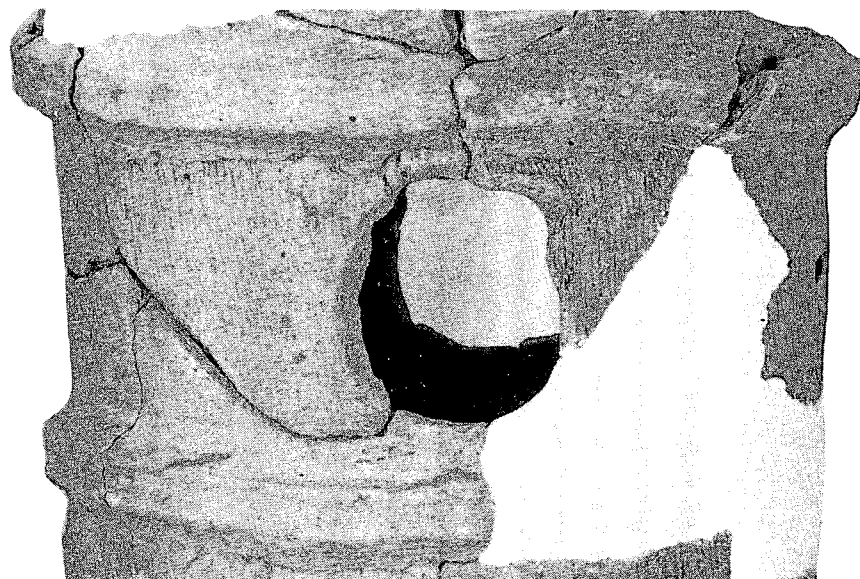
逆 C

96



F (方形)

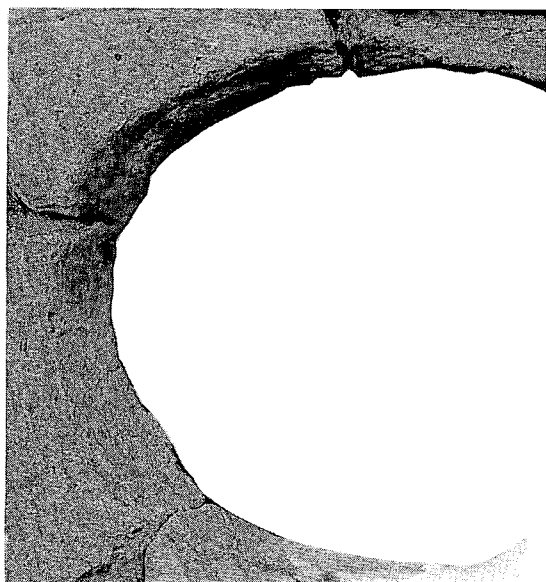
14



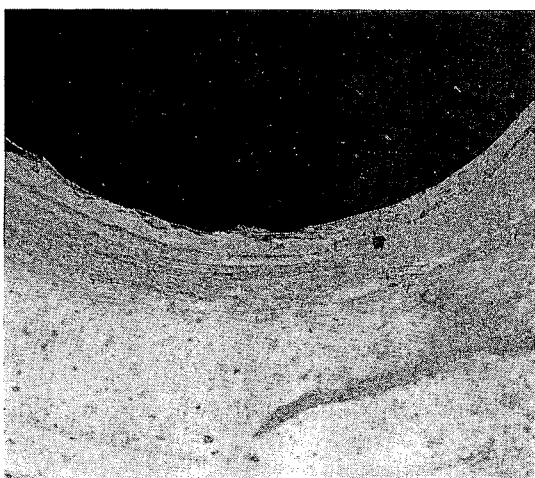
F (長円)

25

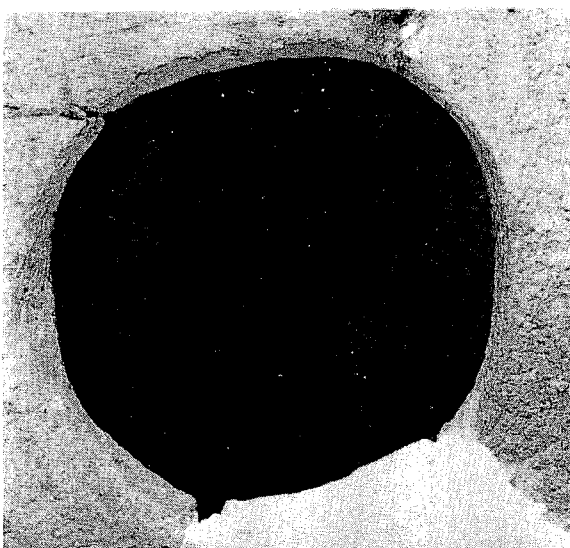
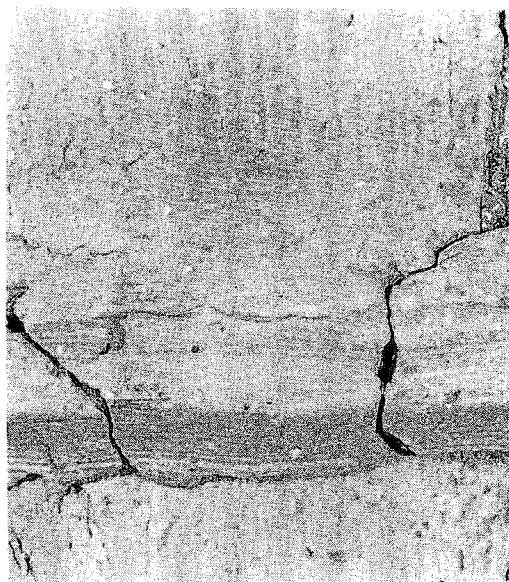




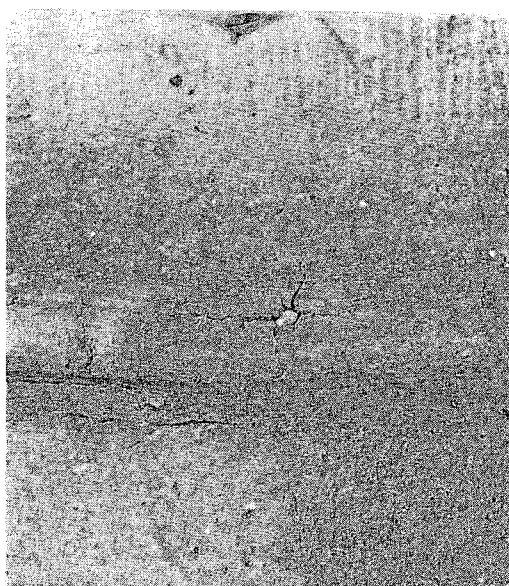
A A
126 8



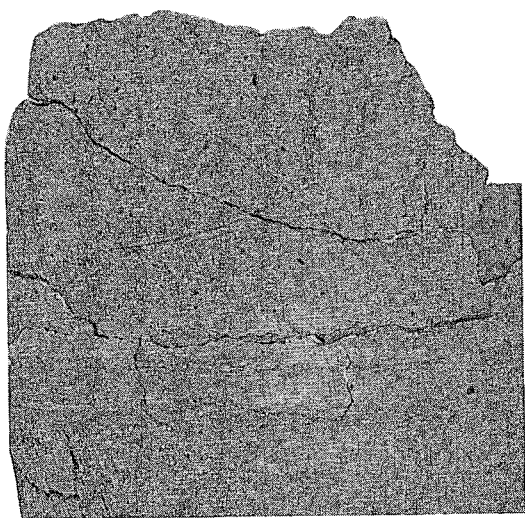
B B
24 17



C D
109 39



製作技法（透穿孔法、凸帯付着法）



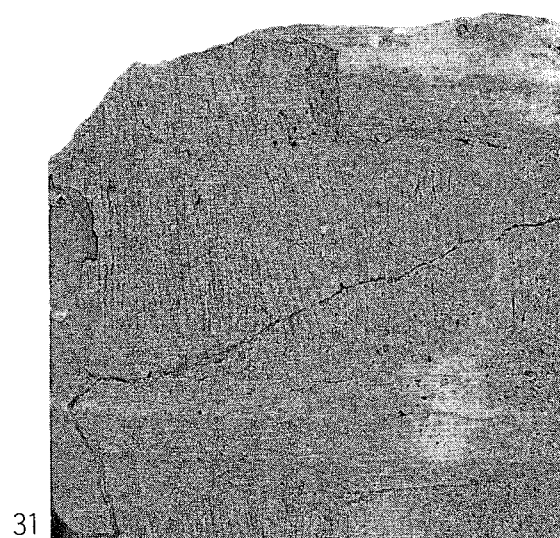
49



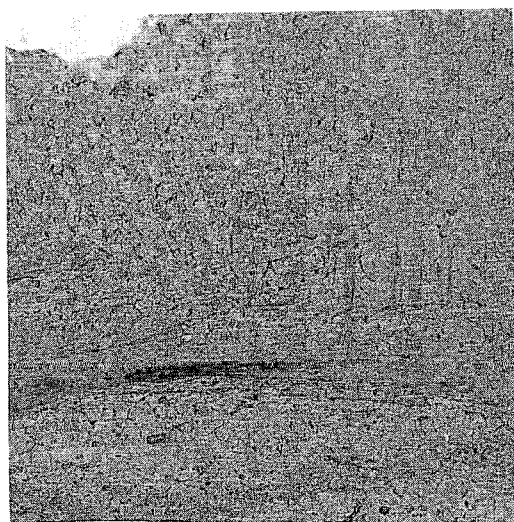
3



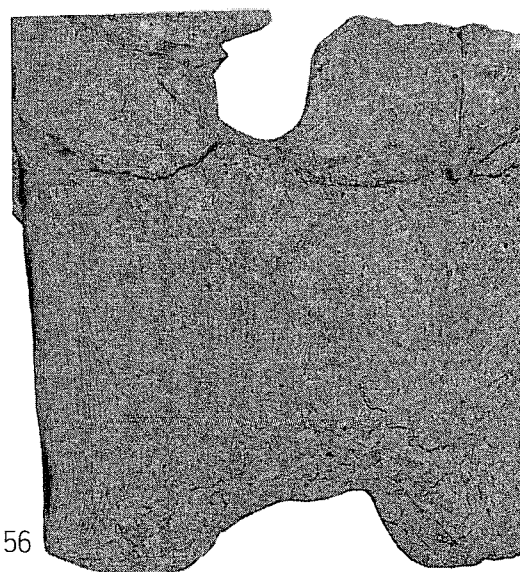
84



31

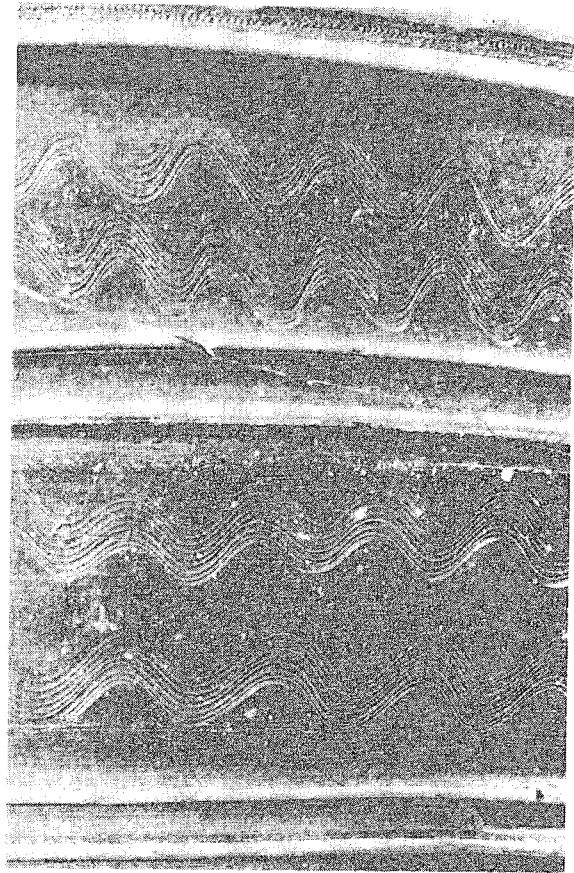
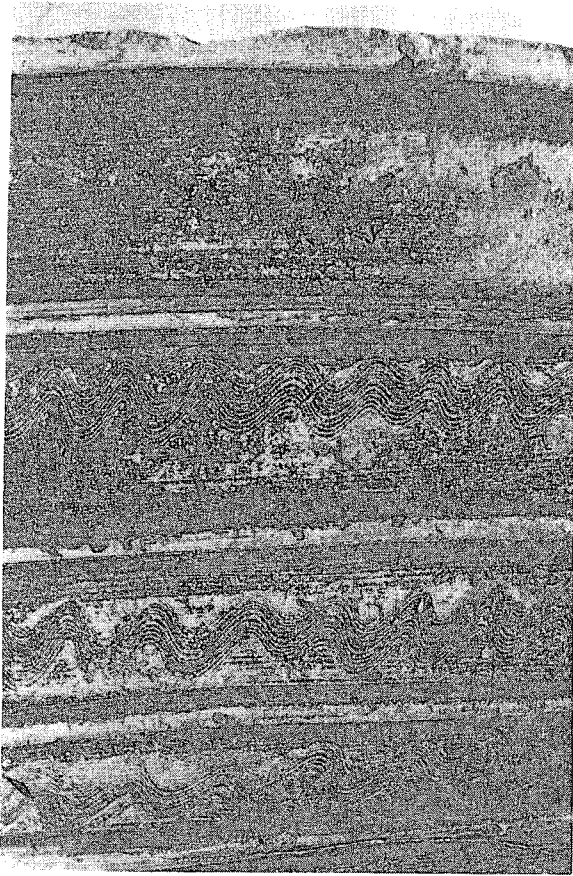


109



56

埴輪の外面にみられる特徴



出土器台の文様体

正誤表			
ページ	行数	誤	正
1	5	提された	提出された
1	30	雅子塚	稚子塚
6	第3図	5Tri	5Tre
83	14	稲山古墳	稲荷山古墳

昭和56年3月 発行

昭和55年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

鎧 塚 古 墳

編集・発行 埼玉県熊谷市教育委員会

印刷所 有限会社 誠光社印刷所

埼玉県熊谷市大字原島1165-1

電話 (0485) 21-2514(代表)
